

ダビデの生涯

マイリス ヤナツイネン

目次

1. 羊飼いかから宮殿へ
2. お尋ね者ダビデ
3. 義なるイスラエル王
4. 心の中に潜む敵
5. 家族の中の敵
6. 放蕩息子の父
7. いつまでも、主の家に

付記では、この中の登場人物の名前を五十音順に説明しています。

1章 羊飼いかから宮殿へ

主は私の羊飼い。

私は乏しいことはありません。

主は私を緑の牧場に伏させ、

いこいの水のほとりに伴われます。¹

今からおよそ 3000 年昔のこと。ある日、15 歳の少年が一人、ユダの荒れ地で父親から預かった羊の群れの番をしていた。少年は羊たちのために、いい草地や水飲み場を探して歩いた。毎日同じことをしているので、彼にとって何も特別なことではなかった。彼は羊をととても大切に、一匹ずつに名前を付けてみんな覚えていた。羊が谷に落ちそうになったり、野獣に襲われたりしたとき、自分の命を危険にさらして助けたことが何度もあった。

羊たちは岩の間の草を探しては、のんびりとはんでいる。太陽が沈みかけていたが、まだベツレヘムの家へ羊を連れ帰る時間ではなかった。少年は一心に石投げの練習をしていた。袋には平たい

¹ 各章の主題はダビデの賛歌で最も有名な、詩篇 23 篇の一節である。(新改訳聖書)

石を集めて入れてある。岩壁の一点を定め、石投げ紐に石を挟んで放つとーっヒューッー石は狙った的に命中した。

この若い羊飼いは、動物的にも当てる稽古を続けたが、ほどなくしてカラスを打ち落とすようになった。時間があれば腕を磨いたので、彼は石投げの達人になった。

羊飼いの少年は自分の技のことを詩にして、曲も付けようとした。彼は誰かにヘブル語の文字を教わっていたので、読むことも書くことも出来た。²自分の経験を基に、彼は詩と曲をいくつか作った。その中の一つで、主を「よき羊飼い」として描いている。³

主は私のたましいを生き返らせ、
御名のために、私を義の道に導かれます。
たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、
私はわざわざを恐れません。
あなたが私とともにおられますから。
あなたのむちとあなたの杖、
それが私の慰めです。
私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、
私の頭に油をそそいでくださいます。
私の杯はあふれています。
まことに、私の命の日の限り、いつくしみと
恵みとが、私を追って来るでしょう。
私は、いつまでも、
主の家に住みましょう。(詩篇 23:3-6)

このように、神のいつくしみと恵みは生涯、自分から離れないと羊飼いの少年は信じていた。しかし彼の家庭は、主の恩恵に与っているとは思えないようなものだった。姉二人は母親の最初の結婚で生まれた異父関係で、7人の兄たちは母の再婚後生まれて、父親が同じだった。ダビデは末っ子だったから、兄たちからかわれたり支配されたり、酷い扱いを受けて悔し涙を何度も飲まなければならなかった。それでも、自分の‘よき羊飼い’に悔しさを打ち明け、それが彼の支えになっていた。

²紀元前 1000 年ごろのイスラエルでは、読み書きは一般的だったことが、最近明らかになった。

³詩篇 23 が書かれたのがいつかは確かではないが、その内容は明らかにダビデの若いころのものである。

成長して、若者は女性に興味を持つようになった。結婚相手にはどんな娘がいいかな？美人で貞節で、もちろん働き者で・・・ひいおばあさんのルツみたいな人はどうだろう？しかし、一家に8人も息子がいて、結納金などどこにあるというのだ？ダビデには考えられなかった。わずかな羊の群れと土地は、兄たちが相続する。彼の家は一族を率いる家系だけれど、豊かではなかった。

その日、突然、地平線に砂埃の波が現れた。ロバに乗った二人の男が羊の群れに向かって走って来る。若い羊飼いの鋭い目は、彼らが家の召使いたちだと見分けた。どうしたのだ？家になにか悪いことでも起きたのだろうか？

「ダビデ坊ちゃま、急いで家へお帰りください。ご用があります」声の届く所まで来ると、召使いが叫んだ。もう一人が続けた。「預言者サムエルさまがおいでになって、あなたを呼んでおられます。羊のことはご心配なく。今夜は私たちが小屋に入れておきますから」

3000年余り前のまさにその日、預言者サムエルの訪れが、続いて起きた出来事の始まりだったなど、神のほか誰も知る者はなかった。地上のどの王家より歴史に影響を与えた、偉大な王の名門がその日に誕生したのだ。実に、その王座は世の終わりまで永遠に続くことになる。⁴

聖書に登場するのはダビデという名の一人の人です。その名前がどういう意味のものかは分かりませんが、‘いとしい’とか‘愛する’という言葉と結びついています。ダビデの名前は聖書全体で1000回ほど出てきますが、そのうちの60近くが新約聖書に‘ダビデの子’という言い方で出ています。

聖書の150章以上がダビデによって、あるいはダビデについて書かれたものです。モーセを除けば、聖書の中でダビデについて書かれた箇所は他のども人物よりも多く、ダビデの子に関する記述は聖書のほぼすべてのページに何らかの形で見られます。

王となる訓練

この時、ダビデの一家は、モーセの時代からユダ族を率いてきた家系でした（ルツ4：18-22）。この羊飼いの少年の曾祖父はボアズという名の有力者で、聖書の読者には買い戻しの権利者、モアブ人ルツの夫として知られています。ダビデの祖父はオベデ、父親はエッサイです。

年がずいぶん離れているので、末っ子はおそらく祖父とは会うことがなかったでしょう。彼らの家は、その時もまだ、ボアズとルツが住んでいたのと同じベツレヘムの小さな村にありました。

⁴ 預言者サムエルの訪問は紀元前1025年。

そこには、すばらしい泉とイスラエル3部族の母ラケルの墓のほかに、取り立てて見るものはありませんでした。

しかし、この末息子はどうして、エッサイの家族からつまはじきされていたのでしょうか。末っ子はたいてい甘やかされるものではないですか？なのに、預言者サムエルが、エッサイの息子たちみんなを自分の前に連れてくるようにと言ったとき、なぜ親たちは、面倒なことなのに、ダビデを荒れ野から呼び返すようなことをしていたのでしょうか。つまり、父親も兄たちも、預言者はこの末っ子には用がないものと考えていたわけです。ダビデがエッサイの2番目の妻の子というのは疑わしい、もしかしたら情婦の子であったかもしれないと言う人もいます。

詩篇の次の言葉はどういうことを意味しているのでしょうか。“ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。(詩 51：5)”出自のはっきりしないことが、兄たちの不可解な行動を説明していると言えます。ともあれ、ダビデの母は彼を産む前から、神に子どもを託すという信仰者でした(詩 22：10-11)。

このように、ダビデは幼いころから‘敵の攻撃’を身に受けていました。事実、彼は73篇の詩ほぼ全部に、敵やその陰謀について述べています。自分の髪の毛より敵の数が多いと言って、弱音を吐いている箇所もあります(詩 69：4)。ダビデの生涯を調べると、神の国の指導者たちが神のみ言葉に留まろうとする時、彼らはしばしば攻撃を受けるものだということに気付きます。

しかし、ダビデの子ども時代は後々の使命のための準備でした。いじめられたことで自己評価が壊れて乱暴者にもなりましたが、困難な時には神を避難所とすることを学びました。ダビデは不当に扱われても頑なにならず、ふりかかる災難を全部、よき羊飼いと分け合うことを身につけました。一方正直に言えば、ダビデは子供時代のトラウマから来る‘弟コンプレックス’を、生涯かけて完全に克服するどころか、さらに増幅させたと認めざるを得ません。⁵

ダビデの詩篇から、彼が親密な家族生活にどれだけ憧れていたかが分かります。“見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんとい

う楽しさであろう。(詩 133：1)”彼のこの夢は、少年時代にも後の彼自身の家庭でもかなうことはありませんでした。しかし彼は、神が自分の生涯にわたる計画を持っておられると確信していました。

それはあなたが私の内臓を造り、
母の胎のうちで私を組み立てられたからです。

⁵ 筆者の造語で、姉兄に対して弟が抱くコンプレックスのことを言う。

私は感謝します。
あなたは私に、奇しいことをなさって
恐ろしいほどです。
私のたましいは、それをよく知っています。
私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、
私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。
あなたの目は胎児の私を見られ、
あなたの書物にすべてが、書きしるされました。
私のために作られた日々が、
しかも、その一日もないうちに。(詩 139 : 13 - 16)

若い人たちにとって、自分の性格も容貌も神が造られたのだと知ることは、どんなにか気持ちが解放されることでしょうか。人生での使命でさえ、自分のために計画され用意されていて、それと同時に必要な訓練も備えられています。ダビデの場合も、兄たちから受ける酷い仕打ちや羊飼いと
いう重労働が、神の良い計画の一つでした。羊飼いの少年は、卑しいという理由で兄たちが嫌が
った仕事を引き受け、そしてそこから何かを得ることを知ったのです。荒れ野の静けさの中にある
間は、精神的にも肉体的にも訓練され、成長する時間となりました。そして最も重要なのは、生
ける神に助けを求めること、また逃れる所は神だけだと、危険な仕事が教えてくれたことでし
た。

羊を追って走ったり、野獣の餌食になることから守ったりするには、いろいろな力がいらいます。羊
飼いの少年は、仕事での危険を次の言葉で述べています。“しもべは、父のために羊の群れを飼っ
ています。獅子や、熊が来て、群れの羊を取って行くと、私はそのあとを追って出て、それを殺
し、その口から羊を救い出します。それが私に襲いかかるときは、そのひげをつかんで打ち殺して
います。このしもべは、獅子でも、熊でも打ち殺しました。”(1サム 17 : 34 - 36)

その場面を、順を追って想像してみましよう。一野獣が少年の群れを襲う。獣は驚いている羊を
口にくわえ、藪に引きずっていかうとする。少年は逃げないで、唯一の武器である木の棍棒をにぎ
って野獣を追って走る。野獣は獲物をくわえているので速く走れない。そこで少年はついに追い
つく。彼は恐れもなく獣のヒゲを掴んで、餌食を口から離すまで頭を締め上げる。――

この時、怒った獣は当然羊飼いに注意を向けるものです。野獣が死ぬまでに、木の棍棒でどんなふ
うに攻撃するか、想像してみましよう。戦いはレスリングさながらで、勇気、状況判断、機敏さ、

強靱な筋肉、そして神の助力への信頼が必要だということは明らかです。勇敢で献身的な羊飼いだ
ダビデは、羊のために命を捨てる良い牧者（ヨハ 10：11）のひな型を表しています。⁶

羊飼いの仕事には静かな時間もあります。その間、ダビデは楽器を弾く練習をしたり、楽器を手作
りしたりしました。彼の最初の楽器は柳の葉の笛だったかもしれません。しかし、後には立琴を
作るようになりました。弦をかき鳴らしているうちに、ダビデの胸に詩やメロディーがあふれ出
て来ます。少年は余暇に学ぶため、何か書物を持っていたと考えられます。ダビデは自分の民の神聖
な歴史も、モーセの律法もよく知っていたということが、聖書の行間から推測できます。

読者のみなさん、あなた方が困難に直面したとき、ダビデの若いころの苦境を思い出してくださ
い。取るに足りないとしか思えないことをさせられるとか、家庭や職場で乱暴されたりみくびら
れたりするようなときがあるかもしれません。でも神様はいつも、より大きな働きをさせる前
に、小さなことで我が子を試みられるということを覚えておいてください。

隠された王—隠された王のひな型

そのころ、イスラエルは最初の王、ベニヤミン族のサウルに統治されていた。初めの 20 年間、彼
は正しく民を治めていた。しかし神の言葉を無視するようになってから、彼は聖霊に見放され、
徐々に残忍な暴君になっていった。預言者サムエルは、彼から王座が取り去られ、“ご自分の心
にかなう(1サム 13：14)”他のだれかに渡されると言った。これは聖書の中で、ダビデに関しての最
初の記述で、新約聖書にも同一の言葉が使われている（使 13：22）。

サウルが神に背いてから数年後、神はイスラエルの新しい王を選ぶようにと内密にサムエルに命
じた。国に恐れが広がっていて、老いた預言者が突然訪れたとき、ベツレヘムの長老たち
が非常に恐れたことでもそれが分かる。サウルとサムエルの仲が良くないことは、公然の秘密だ
ったからだ。老預言者は、エッサイの家長と一緒にいけにえを献げるつもりだと言って、長老た
ちを落ち着かせようとした。

まず始め、サムエルは家の男たちに、夕方に献げ物を食べるため儀式に従って身を清めるように
と言った。エッサイの息子たちは全員そこに集まるようにと言われた。夕方になると、父親は立

⁶ 旧約聖書に登場するダビデとかモーセなどの人物、会堂などの建物、復活祭などの出来事は、後に来る救
い主を暗示し、イエス様の働きや人柄のひな型である。

派な息子7人を預言者の前に並べさせた。⁷長男エリアブはすばらしく美しい若者で、サムエルは彼がイスラエルの未来の王かもしれないと考えた。しかし神は違って、はっきりと言われた。“彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。”（1サム 16：7）

結局、エッサイの長子には何か外聞をはばかり秘密一神だけがご存じの隠れた罪があったのかもしれない。驚くことに、エッサイはそこにいた息子たち全員について、同じ言葉を聞いた。主は彼らの中からはだれもお選びにならなかった。エリアブではなく、アビナダブでもなく、シャマでもない。ナタヌエル、ラダイ、オツェムでもなかった。

“サムエルはエッサイに言った。「子どもたちはこれで全部ですか。」エッサイは答えた。「まだ末の子が残っています。あれは今、羊の番をしています。」サムエルはエッサイに言った。「人をやって、その子を連れて来なさい。その子がここに来るまで、私たちは座に着かないから。」エッサイは人をやって、彼を連れて来させた。その子は血色のよい顔で、目が美しく、姿もりっぱだった。主は仰せられた。「さあ、この者に油をそそげ。この者がそれだ。」サムエルは油の角を取り、兄弟たちの真中で彼に油をそそいだ。主の霊がその日以来、ダビデの上に激しく降った。サムエルは立ち上がってラマへ帰った。”（1サム 16：11-13）

その夜、ベツレヘムで、エッサイの末子は油だけでなく聖霊も注がれて、イスラエ

ルの王となった。彼は主の油注がれた者、‘ヤハウェのメシヤ’となった。預言者のこの選択について、兄たちが何と言ったか気になるところです。両親はどうだったのでしょうか？ それはともかく、儀式のあと、兄弟たちがダビデに良い態度

を取ったというようなことは話の中には見られません。それどころか、ダビデは以前と同様に、羊を世話する卑しい仕事に戻されました。そして兄弟たちは変わらずダビデをいじめ続けました。とにかく、エッサイの家族は油注ぎを秘密にしました。このことが知れると、危険だったからです。しかしその後おのずと、妄想癖の王の耳に入ってしまうことになります。

しかし疑問が残ります。つまり神はなぜ、実際に王座に着く15年も前に羊飼いの少年に油を注がれたのでしょうか。おそらく神は、ダビデが待つことに耐えるための鍛錬を始められたのです。実際、聖書では‘主を待つ’と‘神を信じる’のは一つのことの両面といえます。少年は主からの約束を受け取りました。そして今、主は約束を果たす力を持っておられる方だということを、彼が確信

⁷サムエル記によると、エッサイには8人の息子がいた。歴代誌では7人となっている。一人は幼くして死んだかもしれないし、あるいは1歴代誌 27:18 に出てくるエリフが、数えられていなかった8番目の息子かもしれない。

するかどうか試されているのです。読者のみなさんは今、この神の学校の何年生ですか？成績はどうでしょうか？

ダビデが油注がれた後、すぐにイスラエルの王位に着かなかったのには、もう一つの理由がありました。神は、ダビデが来るべき隠れたメシヤのひな型になることを望まれたからです。ダビデは15年間隠された王でしたが、32代目の彼の子はもっと隠された王様になりました。⁸2000年前の聖金曜日に、茨の冠で飾られた男が、王の中の王、キリストであるなどと、誰が思ったでしょう。となりの十字架で、救いを願った強盗のほかには、だれもいませんでした。

ベツレヘムの野原からイスラエルの王宮までは、どんなに遠いことか。羊飼いの少年が王室の訓練を受ける可能性は実に低いものでした。でも主は彼のために、その教育も用意してくださいました。また、ダビデは王宮に入るために、政治的な強硬手段やロビー活動に頼る必要は全くなかったのです。神が直接彼の前に、次々に扉を開いていかれました。王国が彼を求めたのであって、ダビデの方から王国を追い求めたわけではありませんでした。

ダビデの帝王教育の道は、次のようにして開かれた。妄想におびえて落ち込んでいる王を慰めるために、立琴を上手に弾く者が求められた。ベツレヘムの人たちはエッサイの末っ子の腕前をよく知っていたので、サウルの召使いの中にいたダビデの村出身者が、このことを話した。彼の提案どおりサウルは少年をギベアの城に呼んで、少し試したあと、一種の音楽療法師として抱えることにした。⁹

まもなくこの羊飼いの少年が、おびえている王を本当に助けることができるとわかった。神からの悪い霊がサウルに臨むたびに、ダビデは立琴を手にとって弾く。するとサウルの気分は良くなり、元気を回復して悪い霊は彼から離れた（1サム 16：23）。

マルチン・ルターの「音楽は悪魔を追い払う」という言葉は正に真実です。落ち込んだときに賛美歌を口ずさむ人はみんな、この事実を体験しているでしょう。

荒れ野で時間があれば、立琴に打ち込んでいたダビデは実に賢明でした。もし彼が楽器の練習を自分に課していなければ、王宮への扉は閉ざされたままだったでしょう。しかしダビデは小さなことにも誠実でしたが、今はもっと大切な、彼の兄たちがきっと驚くに違いない役に任命されました。彼は荒れ野の学校を卒業して、宮廷での振る舞いやきびしい作法などを教える王族専科へ進みました。

⁸ ダビデからイエス様までの世代を数えてみると、32という数字になった。時には“父”という言葉は祖父やさらに遠い祖父の意味で使われることもあったので、正しい数は数世代ずれているかもしれない。

⁹ ギベアはエルサレムから10km近く北にある。

王はすぐに彼の音楽療法になじんだので、彼を王宮の鎧持ちの役目に就けました。それはダビデがわずか 16 か 17 歳のときでした。

若い読者のみなさん、あなたは自分のこれから先の人生でどんな能力が必要とされるかを、前もって知ることはできません。もっと役に立つ事ができるというのに、大切な時間をただの娯楽や、スマホなどにのめり込むことに費やしていいと思いますか。実際、時間というのは取り戻すことができない資源で、余分に与えられるというものではありません。時間を浪費するのは愚かです。

巨人との対決

立琴弾きで鎧持ちの若者の心は、ときどき訳の分からない感情に襲われる。母親や羊の群れが恋しくなるのだ。そんなとき、王の許しを得て、ダビデは 20 キロほど離れているベツレヘムとギベアを行ったり来たりする。

そのころ戦争が起こって、エッサイの上の息子 3 人が戦場へ行った。当時、イスラエルの歴史ではペリシテ人は最悪の敵だった。サウル時代の初期のころは、彼は自分の国をペリシテの支配から守っていた。しかし後にはペリシテ人はサウルの民を圧迫し出した。そしてこのとき、イスラエルとペリシテの軍はエラの谷を挟んだ両側に陣取っていた。¹⁰

代表戦士がガテ出身の男で、決闘で勝負を決めようと言い出した。これは当時、ままたる習慣だった。そこで、指揮官たちは全軍での戦いを後回しにした。このゴリヤテは身長が 3 メートル以上で、かぶとの重さが 56 キロと、とてつもない大男だった。槍の重さが 7 キロほどあって、その先端は驚異の金属“鉄”だった。鉄はそのころ中東に出始めていて、海沿いにあるペリシテはイスラエルに先立って取り入れていた。¹¹

サウル王は最高司令官で、イスラエル人のだれより頭ひとつ背が高かったので、当然、命の危険を顧みずにゴリヤテに立ち向かうべきだった。しかし彼には、巨人を打ち負かすのは不可能と思えた。挑戦を拒んだだけだった。イスラエルのほかの戦士もだれひとり、この命がけの試みに挑む勇者はいなかった。

¹⁰ エラの谷、すなわちオーク谷は現在、地中海に流れ込むサンティワジの川床になっている。

¹¹ 旧約聖書には“巨人”、すなわちレファイム人がしばしば出てくる。ペリシテ人が地中海の島からやって来てパレスチナに定住したとき、彼らはレファイム（巨人）の谷も征服した。元の住民の巨人はそこに残って、ペリシテ軍に加わった者もいた。ダビデがペリシテ人を相手にした戦いに関連して、4 人の巨人が出てくる。そのことについては、後に述べる。

ダビデが現場に着いたときゴリヤテは、一月以上のあいだ日に2回、暴言をわめき続けていた。サウルや彼の兵士からの反応はないままだった。そこへ若いダビデが、父親から3人の兄たちと千人隊長に食べ物を届けるよう言いつかって、やって来た。戦場に物を届けるのは当時の習慣だった。

兄たちはダビデの骨折りに一言の礼も言わないばかりか、むしろ彼をなじった。長兄のエリアブが言う。「いったいおまえはなぜやって来たのか。荒野にいるあのわずかな羊を、だれに預けて来たのか。私には、おまえのうぬぼれと悪い心がわかっている。戦いを見にやって来たのだろう。」

(1サム 17：28)

聖書からは、ダビデの若い時代のうぬぼれや悪い心のことは分らない。エリアブのこの言葉は聞き流せばいい悪口に過ぎない。家族で一番年下の者が受けるいじめをダビデも受けたということだ。

ゴリヤテの大口を聞いたダビデは心底憤慨し、また自分の同胞が黙っているのにも、がまんならなかった。ダビデにすれば、この大男のペリシテ人がイスラエル軍をあざけるなど、もってのほかだ。それはイスラエルの神をあざけるに等しいのだから。サウルと彼の戦士たちは神の約束——特に、エホバの神・主はご自分の民の側に付いて敵と戦うとの約束(申 20：1-4)——を忘れてしまったのだろうか。

ダビデは一瞬でゴリヤテの弱点を見抜いた。ゴリヤテは動きが遅く不器用なうえ、額部分はむきだしになっている。ダビデにとって、背の高さなどライオンや熊ほど危険ではなく、それ以下だった。羊飼いの少年は、このような敵に直面する訓練を荒れ野の‘学校’で身に付けているのだと気づいた。

いつものように勇敢に、ダビデは決闘することを申し出た。サウルがためらったので、ダビデは野獣との戦いについて話し、信仰による確信を述べた。“「獅子や熊の爪から私を救い出してください。主は、あのペリシテ人の手からも私を救い出してください。」”(1サム 17：37) イスラエルにとって幸いなことに、エッサイは末っ子が荒れ野で危険な目に遭うことを防ごうという気がなかった。だからダビデが、必要なときに神様に信頼することも放っておいたのだ。

巨人退治

王はためらった。サウルは、ダビデはゴリヤテとの戦いできつと負けると思ったので、彼を死に追いやることをしたくなかった。サウルの戦士たちもそう思った。

だれひとり、ダビデが勝つ方に賭ける者はなかった。しかも国の存続に関わる。ゴリヤテは、決闘で勝負をつけて、勝った方が相手を奴隷にすると主張している。それなのに、みな驚いたことにサウルは少年の熱心な申し出を受けた。捨てばちになったのかもしれない。それとも少年の信仰心が伝わったのだろうか。

自分の幼い弟が、勇敢にペリシテ人の大男との対戦に向かったのを目の当たりにして、3人の兄たちはどう思っただろう。一方、ゴリヤテの思いについてはわかっている。10代の少年が武器も持たず、具足も着けないで現れたとき、彼は大声でののしった。しかし、小さな石投げ紐と羊飼いの杖だけを持って戦いに臨んだとき、少年が発したのは信仰の叫びだった。「おまえは、剣と、槍と、投げ槍を持って、私に向かって来るが、私は、おまえがなぶったイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かうのだ。」続けてダビデはゴリヤテに向かって叫んだ。「きょう、主はおまえを私の手に渡される。私はおまえを打って、おまえの頭を胴体から離し、きょう、ペリシテ人の陣営のしかばねを、空の鳥、地の獣に与える。すべての国は、イスラエルに神がおられることを知るであろう。この全集団も、主が剣や槍を使わずに救うことを知るであろう。この戦いは主の戦いだ。主はおまえたちをわれわれの手にわたされる。」（1サム 17：45－47）

ダビデの振る舞いは、信仰に関して大切なことを示しています。彼にとって神は生ける方であって、その助けは強い確信をもって信頼できるものなのです。力の差で戦いの結果が左右されるものではありません。勝敗は主だけがお決めになります。ダビデはライオンや熊をやっつけたやり方で、ゴリヤテを打ち負かしました。ダビデが自分の力に依るのでなく、主の御名によって戦いを始めたので、主は全責任をご自分が負われたのです。イスラエルの神はどんなことがお出来になるか、すべての国が知ったでしょう。

‘この戦いは主の戦いだ’神の民は幾度、この事実にも慰められてきたことか！強い集団が弱い側を負かすとか、多数派がいつも勝つのが当然とは言えません。そうです、主はご自分の“小さな群れ”が、劣勢であろうが、力でなされた決定であろうが、常に勝利するようにお助けになります。

読者のみなさんはどうですか？ダビデと同じように主の力を信じますか。近年、キリスト教徒の信仰や倫理は、また聖書の力についても同様ですが、厳しい戦いに見舞われています。この戦いの主導権は、新無神論者でも議会や教会の集会、教会監督に、とりわけメディアにあるわけではありません。唯一、私たちの主が主導権者なのです。結局、聖書を信じている人々、神の助けに頼っている人々が勝利を得るのです。たとえ国やメディア、自由主義の教会の99.9パーセントが、真の信仰者の10分の1パーセントに対抗しても、このことは実現します。

ダビデとゴリヤテに、それが起こった。大男が脅し文句を言う口を開く前に、ダビデは、なめらかな石を袋から取り出して、ゴリヤテに向かって投げ撃った。荒れ野で羊飼いの石投げの練習をしたのは、無駄でなかった。的はゴリヤテの眉間一点一石は、動く標的を強烈な力と正確さで撃った。大男は雷に打たれた樅の木のように倒れた。そこでダビデは、ゴリヤテが持っていた剣でとどめを刺した。少年の信仰がペリシテ軍の力を上回る現実を、だれもが目にした。戦いに勝って、神の民を救ったのだ。

サウル王はびっくりして、ダビデの出自を調べ始めた。そのような戦士が村の羊飼いの息子のはずがない。¹²“ダビデがああペリシテ人を打って帰って来たとき、アブネルは彼をサウルの前に連れて行った。ダビデはペリシテ人の首を手にしていた。サウルはダビデに言った。「若者、あなたはだれの子か。」ダビデは言った。「私はあなたのしもべ、ベツレヘム人エッサイの子です。」”（1サム 17：57-58）

ここで再度、ダビデにイエス様のひな型を見ることができます。羊飼いであるだけでなく、戦士でもあります。ダビデが自分の民のために戦ったように、イエス様も戦われました。もしダビデがエラの谷での決闘に負けたなら、イスラエルはペリシテの奴隷となっていました。もしイエス様が荒れ野やカルバリの丘でのサタンとの戦いに負けられたなら、人間は悪魔のものとなって、最後は永遠の地獄の火の中で終わったでしょう。

戦いに勝ってイスラエルの父親、息子、夫、未来の夫たちが無事に前戦から帰還してきた。国は占領や略奪、強姦から免れた。女たちは、こんなときに常にするように、安堵のため息をついた。そして若い英雄を讃える勝利の歌を作った。

サウルは千を打ち、
ダビデは万を打った。

謙虚な美少年の羊飼いは突然、もてはやされ、男の子たちや娘たちのあこがれの的になりました。しかし有名になることは、若者のためによくありません。特に女性の賞賛を集めるときは、なおのことです。うぬぼれているアイドルほど嫌味な者はありませんが、反対に、自分の魅力に全く気付かないでいる、純真な英雄はとても魅力的です。もし主が彼に多くの困難をお与えになっていなかったら、ダビデは得意になって自分が優れていると思ったことでしょう。

¹²サムエル記は同時代の資料を集めたものである。（1歴代誌 29:29）ここにはダビデが宮廷に入ったことについて、2通りの説明がある。出来事がどんな順番で起きたか、また矛盾点がどのように説明されたかは分からない。ともかく、聖書に書かれていることは、聖霊が選んだ歴史的、神学的に確かな資料だと、筆者は固く信じている。

王子と羊飼いの少年

戦いの時も平穏な時も、サウルは勇敢な息子ヨナタン—聖書には彼の悪いところは全く書かれていない、真の英雄—を常に側においていた。この若い王子は、ダビデが先のペリシテ人との戦いで見せたのと同じ勇気を示した。両軍が向かい合う山の上でにらみ合っている間に、ヨナタンは彼の道具持ちと一緒に、敵が占領している山の斜面を登っていった。そのあと、ふたりはそこに留まった。

登る前、ヨナタンはその道具持ちに次の言葉で、共に来るようにと言った。“さあ、あの割礼を受けていない者どもの戦陣のところへ渡って行こう。たぶん、主がわれわれに味方してくださるであろう。大人数によるのであっても、小人数によるのであっても、主がお救いになるのに妨げとなるものは何もない。”（1サム 14：6）これはまさに、ダビデが巨人に向かったときの確信だった（1サム 17:47）。

ヨナタン（ダビデより 10 歳ほど年上）は、戦争が起こる前に（ずっと軍隊の駐屯所にいたのでなければ）、おそらく父王の宮廷で若い立琴弾きを見かけていただろう。決闘の前までは、王子はダビデをただの琴弾きの田舎小僧と見ていた。しかし、ダビデがゴリヤテに向き合うのを目撃したときヨナタンは、羊飼いの少年には信仰心と勇気が満ちていると分かった。生まれながらの英雄だ！

真の英雄は、ほかの英雄と出遭えば彼を尊敬し、賞賛する。イスラエルのこの王位継承者は、墮落した社会では珍しく、本当の心の友を見つけたと直感した。“ヨナタンは、着ていた上着を脱いで、それをダビデに与え、自分のよろいかぶと、さらに剣、弓、帯までも彼に与えた。”（1サム 18：4）

注目すべきは、王子が彼の権力の象徴を手放したことです。剣は特に貴重でした。当時イスラエルには、鉄の剣はわずか2振しかありませんでした。（もう1振は父のサウルが持っていました。1サム 13：22）ダビデはこのことに重圧を感じたことでしょう。しかし、彼はその大変な贈り物を拒否しませんでした。というのは、それは誠実な動機からだということがわかったからです。

聖書はいろんな種類の契約について書いてあります。最も大切な契約は、神と人とのものです。次には、男と女の結婚の契約です。ダビデとヨナタンの友情は聖書の中では、友の結びつきについての唯一の例です。しかし、神が友情をどんなに高く見ておられるかが分かります。ヨナタンは真の友としてのイエス様のひな型です（ヨハ 15：13）。王子が羊飼いに王の印を贈ったように、イエス様はご自分の血で友を贖うという贈り物をされました。聖霊の剣と白い衣を共に。

箴言は友情について、多くの美しい言葉で語っています。“香油と香料は心を喜ばせ、友の慰めはたましいを力づける。”（箴 27：9）“滅びに至らせる友人たちもあれば、兄弟よりも親密な者もいる。”（箴 18：24） ダビデとヨナタンはお互いの中に、自分の実の兄弟よりもっと厚い気持ちを感じました。信仰心は人間の本質の最も奥深い所にあって、この二人に共通のものでした。彼らは価値観と目的を共有していました。相手を知れば知るほど、お互いを尊敬し合い影響しあったのです。

ペリシテとの戦いのあと、サウルはダビデがベツレヘムに帰ることを許しませんでした。若い羊飼いは、以前ほど自分の村を恋しいと思わなくなりました。今は宮廷の中に‘親友’がいます。ヨナタンとダビデはたぶん、しょっちゅういっしょにいて、若者たちが好きなスポーツや狩りや武術などを楽しんだことでしょう。二人はお互いに心の中を打ち明けて、大切なことについて一緒に考えたりしたにちがいありません。ダビデは思い切って、その友に自分の詩を暗唱して聞かせたかもしれません。

ヨナタンとダビデが、王位を争う競争相手となった可能性もあります。しかしそうではなく、彼らはお互いを好ましく思いました。いつ、どんな形で、王子は自分の友がイスラエルの次の王として油をそそがれたことを知ったのか、私たちにはわかりません。難しいことですが、ダビデが自分から打ち明けたとも考えられます。

ヨナタンはイスラエルの王位継承者として育てられましたが、ダビデに出会ってからその想定を捨てました。それは彼にとって難しいことではありませんでした。というのは、彼は神が使命を与える者として、自分ではなく彼の友達を選ばれたことを信じたからです。ダビデとしてはすべてを神に委ねているので、王座を争うつもりもありませんでした。ダビデが王座を求めたのではなく、王座がダビデを求めたのです。

サウルの妬み

イスラエルの勝利軍がエラの谷から凱旋したとき、婦人たちは沿道に群れ立ってダビデを讃える歌を歌った。それを聞くや、王はひどく気を悪くして言った。「ダビデには万を当て、私には千を当てた。彼にないのは王位だけだ。」（1サム 18：8）

それ以来サウルは、彼の鎧持ちが王冠をぶんどるのではないかという猜疑心でいっぱいになった。哀れなサウルは、統治が終わるまでの 10 年間、この妄想に取り憑かれたままだった。サムエルの預言“主は、きょう、あなたからイスラエル王国を引き裂いて、これをあなたよりすぐれたあなたの友に与えられました”（1サム 15：28）は昼も夜もサウルの頭の中を巡った。その上にダビデが油を注がれたことを知れば、サウルはどうしていただろう。

イスラエルのだれもが、市民も軍人も、宮廷人も王子も、王女も一追って述べるが一若い戦いの英雄に好意を持った。ダビデは人気者になったことを喜ぶよりも、当惑した。彼の中では、自分は依然“貧しく、身分の低い者”（1サム 18：23）だったからだ。ところがサウルの娘ミカルは、貧しいがとびきり美男のこの国民的英雄に心を奪われ、その気持ちを隠さなかった。しかしダビデはこんなミカルについての噂には耳を貸さなかった。というのは、王女を娶る結納金など自分は払えないとわかっていたからだ。サウルはゴリヤテに勝った者には、王女を妻として与え、税を免除すると約束していたが、それをすぐにすっかり忘れた。

娘の気持ちを知って、サウルはペリシテ人を使って自分と争う相手を殺そうと決心した。地中海を渡って東岸に住み着いたペリシテ人は、唯一、イスラエルに国境を接する民で、男児に割礼をしなかった。それでサウルは、結納として敵の戦士の包皮 100 枚を納めるように命じた。ペリシテ人から包皮を取ろうなどとする者は、だれも生きてはおられないと、サウルは考えたのだ。ダビデは、自分には容易い仕事だったのでほっとして、瞬く間にその 2 倍の数を持って帰った。そのようにしてこの若い戦士は、王女との結婚を強く望んでいることをはっきりと表した。

サウルは王女を羊飼いと結婚させるしかなかった。そこで新しい義理の息子を千人隊の長にした。ダビデはサウル王、アブネル将軍、王子ヨナタンに続く 4 位の将校になった(1サム 22：14)。主がご自身で羊飼いの少年にこの扉を開けようとされるなら、天地のどこにもその扉を閉ざす力はない。

ダビデとミカルは、純真無垢な新婚の二人がそうであるように愛し合った。この若い夫は、「いつか君は他のだれかと恋に落ちるだろう」などとでも言われようものなら、憤慨したことだろう。しかしダビデとミカルの愛は、10 代の情熱だった。大人であれば深い心の絆が生まれたのだろうが、若い二人がそうなるまでには時間がかかる。

サウルの妄想は日ごとに悪化していった。家族や召使いたちは彼の顔色を見て、気分を判断した。どんなことでも王に逆らう者はなかった。宮廷中がびくびくしていた。サウルが近くにいると、幸せ感は失せて、くつろぐこともできなかった。

ある時王は、自分のために琴を弾いているダビデの前で槍を振り回した。そして彼は義理の息子を、ついに目の前から戦場へ追いやった。“ダビデは民の先に立って行動していた。ダビデはその行く所、どこでも勝利を収めた。主が彼とともにおられた。”（1サム 18：13b-14）兵士たちは、常に最前線で先頭を切って突撃する、若い指揮官が好きになっていった。神はこのようにして、羊飼いの少年が将校にふさわしい戦闘訓練も受けるように配慮された。

ところが間もなく、ヨナタンが忘れることのできない日がやってきた。サウルは息子と信用のおける召使いを呼びつけて、ダビデを殺すと言った。王は、義理の息子は忠誠心に信頼がおけないので、彼には警戒しなければいけないと主張する。ヨナタンにとって、これは全くの不意打ちだった。彼は父親が自分の友に対して、そんな残忍な計画を企んでいたなど思いもしなかった。

ヨナタンは死にものぐるいで父親の気持ちを変えようとした。王たる者が無実の血を流してはいけない・・ダビデの行いはいつも国のためだったではないか？ついにサウルは折れて、その陰謀をやめエッサイの息子の安全を保障すると、主の御名によって誓った。ヨナタンは父の言葉を信じて、安堵のため息をついた。

数か月、あるいは1年が過ぎた。サウルの妄想は以前よりひどくなってぶり返し、主の名によって立てた誓いを破るまでになった。狂ったような状態で、王はまた義理の息子に槍を投げつけた。ダビデは王のために琴を弾いていた最中だったが、彼は驚くほどすばやく槍から身をかわし、戸の外に逃れ出た。

次の夜サウルは、娘の寝室から婿を連れてくるようにと家来に命じた。ダビデは病気で寝ているとミカルは言ったが、ベッドの中にはダビデではなく、掛けてある山羊の皮の下はテラフィムの像に変わっていた。(ミカルはなんのために像を持っていたのだろうか？若い二人は、イスラエルの神への信仰で結びついていただけではなかったか？)ミカルが夫を、窓からロープで逃がしたのだった。そして、言う通りにしないと殺すと、夫に脅された、と父親にうそをついた。

ミカルがその夜宮廷から夫と一緒に逃げた方が、おそらくみんなのためにはよかったのです。でも、先のことはわかりません。これがダビデの、サウルの宮廷との最後の別れとなりました。弱い王女に、夫と一緒に山や荒れ野を走って登り下りする力があつたでしょうか？なかったでしょう。ダビデは妻に、そんなことをしてほしいとは言えません。またミカルにしてもおそらく、彼と一緒にいく勇気はなかったでしょう。

若い妻は夫が逃げたとき、父親の宮廷に残りました。二人とも、いつまた会えるかわかりませんでした。

ダビデの聖書教育

ダビデには逃げて行く場所がなかった。ベツレヘムに帰ることはできなかった。そこは王が一番に探す所と考えられる。せっぱ詰まったダビデは、数年前に王になる油をそそいでくれたサムエルを思い出した。二人がその後、会っていたかどうかは分からない—多分会っていないだろう。というのは、サウルとこの老預言者との関係がよくなかったからだ。

ダビデはサムエルの住むラマまで、だれにも気付かれずにやっとたどり着いた。二人の再会は、嬉しいと同時に悲しいものだった。嬉しいのは、ダビデが正しく成長しているのがサムエルにわかったこと。悲しいのは、ダビデがギベアの宮廷から追い出されたことだ。しかしこの若い逃亡者の澄んだ目を見たとき、すでに 80 歳を過ぎていた老預言者は、国民の未来についての希望を取り戻した。

ダビデはサムエルにつれられてラマからナヨテに行き、そこに留まった。ヘブル語のナヨテというのは下宿という意味で、サムエルが始めた預言者学校が起源だと通常考えられている。彼は、若者が年上の預言者の個人教授の下で、神の言葉を学ぶ学校を創設した最初の人物だった。そこで詩作もしたし、神の民の歴史を調べることもした。ダビデはそんな学校に、避難所を見つけた。

サムエルがどれだけの期間、イスラエルの次の王を教えることができたのかは分からない。一か月か、もっと短かったかもしれない。いずれにせよ、この貴重な日々の中に、ダビデが将来の地位についたとき知っておくべきことを、老預言者は教えることができた。彼は、神殿礼拝の意味と、神の民の信仰のための‘恵みの手段’を特に強調した。¹³ この教えがどんなに大切なことかは、ダビデが王の座に着いた後で分かることになる。

ダビデの逃亡を知って、サウルは彼を捕まえるために兵士隊を 3 回、送った。そうすると、まったく訳の分からないことが起こった。預言者学校に着いたとき、兵士たちは‘神がかり状態’に陥って、とにかく、任務を果たせなかった。同じことが 3 隊の兵士に次々起こった（1サム 19：20－24）。

そこで王自らがナヨテに行くことにした。しかし彼もまたこの奇妙な現象に陥って、服を脱いで、一昼夜裸で倒れていた。サウルの意識がないうちに逃げることなど、ダビデにはいとも簡単だった。この奇妙な出来事は、神がかり状態になること自体は、その人が神と結びついているわけではない、ということを示している。神との結びつきに関していえば、信仰と聖霊をなくしていても、その人はまだ以前と変わらず、同じように信仰生活をしているように見えることもあるのだ。

サムエルは次の王を、神とみ言葉に託した。彼らにとって、これが二度目で最後の出会いだった。二人は地上では再び会うことはなかった。老預言者には、主が油注がれた者を一彼がユダの山野をさまよう間、彼の体だけでなく精神も信仰をも一守ってくださるようにと祈ることしかで

¹³ 古い契約では恵みの手段は、神のみ言葉と聖所と献げものだった。新しい契約では聖書、洗礼、聖餐である。神はこれらの方法で、罪人たちと共にいることを望んでおられる。

きなかった。サムエルは、ダビデが幾千の危険にさらされようと、主が守ってくださると分かっていた。神の御手の中では、敵の陰謀さえ祝福に変わるのだ。

これらの出来事の数年後にサムエルが死んだときにも、彼の主への信頼は変わらなかった。

友 袂を別つ

一方ギベアでは、ヨナタンが友をととても恋しがって、彼が宮廷に戻ることを望んだ。自分の父親が、「しません」と主に誓った後でも、ダビデを殺そうとしているなど、ヨナタンには信じられなかった。ラマから逃れたダビデは、サウル王国の首都ギベアに戻って、こっそりヨナタンと会った。

ダビデはサウルの衛兵長なので、宮廷の行事のときにはその場にいることになっている。そこで二人は試してみることを考えた。ダビデが新月祭の宴会に出なかったら、王がどんな振る舞いをするかを見るのだ。ヨナタンが結果を報告する約束だった。自分が見張られていると分かっていたので、王子は野原で弓の練習をする振りをしようと考えた。二人は、ダビデが隠れないといけない場合に送る合図はどうするかも決めた。

若者たちはすでにお互いの友情を固めていたが、このとき再び確認してさらに自分たちの子孫まで友情を及ぼすと約束した。その約束は初めから主の前で結ばれ、主は彼らの言葉を一つ一つ聞き取られ、主がその証人となられた。

ヨナタンが友に言った。「主が私の父とともにおられたように、あなたとともにおられますように。もし、私が生きながらえておれば、主の恵みを私に施してください。たとい、私が死ぬようなことがあっても。あなたの恵みをとこしえに私の家から断たないでください。主がダビデの敵を地の面からひとり残らず断ち滅ぼすときも。」こうしてヨナタンはダビデの家と契約を結んだ。「主がダビデの敵に血の責めを問われるように」ヨナタンは、もう一度ダビデに誓った。ヨナタンは自分を愛するほどに、ダビデを愛していたからである。”（1サム 20：13b-17）

王は新月祭の宴の間にダビデを捕まえようと思っていた。彼の義理の息子は現れず、もっと悪いことにヨナタンが友のために言い訳をしたので、サウルは激怒してダビデを殺すと言った。彼は自分の息子さえ忌まわしい言葉で侮辱した。“このばいたの息子め。おまえがエッサイの子にえこひいきをして、自分はずかしめ、自分の母親の恥をさらしているのを、この私が知らないとも思っているのか。エッサイの子がこの地上に生きていくかぎり、おまえも、おまえの王位も危うくなるのだ。今、人をやって、あれを私のところに連れて来い。あれは殺さなければならない。”（1サム 20：30-31）しかし、ヨナタンも怒った。彼は怒りに燃えて、なぜダビデが殺されなければ

ならないのかと、父親にくっついてかかった。今度は彼に向かってサウルの槍が飛んできた。王子は跳び退いて、怒りに震えながら部屋を出て行った。彼は自分の友の悪口は、もう一言も聞きたくなかった。

次の日、ダビデとヨナタンはこっそりと会った。二人とも、別れのときが来たことを察していた。これまで二人は絶えず一緒にいた。取っ組み合いをしたり、話しをしたり、歌い、祈り、共に食べた。王子への尊敬の印として、ダビデはヨナタンの前で地にひれ伏した。そして若者たちはお互いに抱き合って泣いた。ダビデは自制できないほど激しく泣いた。

二人の友は荒れ野の岩地にいた。ダビデは泣いた。サウルが生きている間、逃亡者としてあちらこちら逃げなければならないとわかっているからだ。どうすればいいのだろうか？ヨナタンとミカルは妄想狂の父親の支配の下で、どうなるのだろうか？ベツレヘムの両親や兄たちはどうなるのだろうか？

ヨナタンは、別れを言うつらさだけでなく自分の行く末の不安のために、腕を友の首に巻いて泣いた。子どものときは神を畏れる父を尊敬し、彼を手本としてきた。父子は相棒だった。どんなことでも息子に相談していた父だった（1サム 20：2）。そんな父が徐々に確実にサタンに支配されていくのを見ることは、実につらいことだったに違いない。

ヨナタンの状況は全くギリシャ悲劇のようだ。どちら側に付くべきか？宮廷を去ってダビデと共に山に逃げるべきか、友に背くようにと絶えずしむけるに違いない父親の家に留まるべきか？王位継承の地位には興味がなかった。そんなものはいつでも喜んでダビデに譲っただろう。しかし、彼には父を見捨てることはできなかった。彼はモーセの律法に従い、父を敬って彼の苦しい最後まで側にとどまった。国事や戦争などで、自分の働きが大いに必要とされていることが、分かってもいたからだ。

二人に、泣くことのほか何ができただろう。悲しみの底にあって、主の助けに頼るしかなかった。別れるとき、「安心して行きなさい」とヨナタンは祝福し、続けて言った。“私たちふたりは、『主が、私とあなた、また、私の子孫とあなたの子孫との間の永遠の証人です。』と言って、主の御名によって誓ったのです。”（1サム 20：42）

ダビデはどこへ行けばいいのか、二人ともわからなかった。しかし主が、去って行く者と共に行き、残る者と共に留まってくださると、彼らは知っていた。その上、彼らには共に過ごしたすばらしい時の思い出が残されている。誰にもそれを取り上げることはできない。

その日以来、二度とサウル王はダビデに会うことがなかった。ミカルは生きている夫の‘未亡人’として、他の男と結婚させられた。彼女は抵抗したのだろうか、自分のためにただ従ったのだろうか

か？サウルはヨナタンが‘エッサイの息子’と連絡を続けていると疑ったが、その具体的な証拠はなかった。

最後の日まで、ヨナタンは良いときも悪いときも、父の側にいた。“サウルもヨナタンも、愛される、りっぱな人だった。生きているときにも、死ぬときにも離れることなく、わしよりも速く、雄獅子よりも強かった。”（2サム1：23）しかし、妄想に陥った王が精鋭軍に命じて、ダビデを追跡して山へ行くようにと命令したときだけは、ヨナタンは明らかにうそを言った。熱があるとか、足が痛むとか、出かけられない言い訳をして断った。以来、ダビデ狩りのときには彼の名前は出されなかった。

ヨナタンがダビデに忠実だったように、ダビデもヨナタンと彼の家族に忠実だった。みんなの無事だけが彼の願いで、他はなにも望んでいなかった。しかし悪いことに、サウルにはそれが信じられなかった。たちの悪い人が、自分より優れている人を憎んで、どんなにばかげたことであっても、その人を誹謗するのを止められないというのはよくあることだ。

ダビデは一挙に、妻も友も、家も仕事も名望も、そして人間としての権利も、つまり全人生を失った。それでも彼が絶望に陥らず、怒りで我を忘れることなくいられた源は何だったのだろうか？それは神の言葉だった。ダビデは神の約束にしがみつくと、くやしきや絶望と闘った。神の約束：彼は、神の愛と助けへの信頼を取り戻すまで、“いのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、追ってくる”という約束を絶えず思い起こして、それに縋った。

ダビデの詩篇の多くが、彼の心の戦いの様子を証しています。詩篇は彼の嘆きの粒のようです。彼の詩の多くは、敵の圧迫についての描写で始まりますが、いつも信頼の表明で終わります—主は自分を見捨てられはしない—。聞いていてくださる方が側におられると知っていて、自分の嘆きを言葉にするのは、そのときのダビデにとってとても大切なことでした。彼だけでなく、彼の詩はこの3000年の間、苦しんでいる神の子どもたちにとって、大きな意味を持つものとなりました。とりわけ32代目の子にとって。

詩篇17篇、ダビデの逃亡初期、暗い夜に創られた詩は次のように訴えています。

神よ。私はあなたを呼び求めました。

あなたは私に答えてくださるからです。

耳を傾けて、私の申し上げることを聞いてください。(6)

私を、ひとみのように見守り、

御翼の陰に私をかくまってください。(8)

私を襲う悪者から。私を取り巻く貪欲な敵から。(9)

しかし、私は、正しい訴えで、御顔を仰ぎ見、
目ざめるとき、あなたの御姿に満ち足りるでしょう。(15)

2章 お尋ね者ダビデ

主は私のたましいを生き返らせ、
御名のために、私を義の道に導かれます。

ダビデが新月祭の間、宴席にいなかったため、サウルは彼がまた逃げたことを悟った。しかし、ゴリヤテを倒した王の義理の息子はよく知られていて、人の中に隠れるのは難しかった。そのことを頼みに、サウルは国中にダビデ逮捕の令状を送った。

無一文で武器もないダビデは、どうすればいいのか、どこへいけばいいのか分からなかった。困った末、祭司の町ノブへ手がかりを探しに行くことにした。そのころ、ノブでは80人以上の祭司がエリの孫のアヒメレクの下で、聖所の奉仕をしていた。祭司たちは、犠牲を献げて神に伺いをたてるため、何度もノブを訪れたダビデをよく知っていた。

シロの崩壊の後ほどなく、契約の箱は聖所ではなく民家に置かれていた。なぜそれがノブに運ばれなかったのかは、聖書の歴史の解けない謎だ。一方、もう一つ重要なのは、エフォド（大祭司の衣装）が聖所に置かれたままだったことだ。胸当てのポケットにはウリムとトンミムという二つの石が入っていた。祭司はその石を投げて、民の問題について主の助言を得ることができた。¹⁴

ノブの町はサウルのいるギベアからほんの数キロしか離れていないのに、驚いたことにダビデ逮捕の令状はまだ届いていなかった。しかし当時イスラエルは恐怖政治の下にあったので、サウルの高官が突然やって来たことで祭司たちは怯えた。ダビデは彼らに本当のことを言わないで、「嘘をついた。“王はある事を命じて、『おまえを遣わし、おまえに命じた事については、何事も人に知らせてはならない。』と私にいわれました。若い者たちとは、しかじかの場所で落ち合うことにしています”（1サム 21：2）このとき、少数の高官だけが、敬愛するダビデの逃走に従ったようだ（1サム 22：6、マタ 12：3）。

お腹を減らした逃亡者が何か食べるものが欲しいと頼んだとき、祭司は新しいものと置き換えられて祭壇にあった聖別したパンを持ってきた。レビ記 24:5-8の規定を見ると、ダビデが逃亡したのは安息日だったことがわかる。

問題は、モーセの律法によると聖別されたパンは定められた祭司だけが食べることを許されている、ということです。イエス様は、弟子たちが安息日の定めを破ったと非難されたとき、この出来事を引き合いに出されました。もし、ノブの祭司が安息日に聖別されたパンを、飢えた逃亡者

¹⁴ (14) この石で肯定と否定の答えを出した。一回以上続けて同じ答えが出なければならない。もし、石がそのたびに違う答えを出せば、それは主が答えを拒んでおられることを意味する。

に与えたことが正しかったのであれば、お腹が減ったイエス様の弟子たちが安息日に麦の穂を摘んで食べたことを、パリサイ人たちが非難したのはなぜだったのでしょうか？（マタ 12：1-8）弟子たちはモーセの律法を破ったのではなく、単に父祖から漠然と続く慣習に反しただけでした。

ダビデは、妻の寝室の窓から逃げ出したとき、ヨナタンにもらった鉄の剣を持って行くことができなかった。彼はノブで、なぜか聖所の隅に置いてあったゴリヤテの剣をもらった。そもそも剣はあの決闘の日に彼のものになっていたのに、どうしてそれがノブにあったのか、説明するのは難しい（1サム 17：54）。

一晩でもノブに留まるのは危険だったので、疲れていたけれど、ダビデは旅を続けなくてはならなかった。そしてユダの山をあてどなくさまよっていたとき、ペリシテの兵士にみつきり、ガテの町へ連れて行かれた。詩篇 56 篇からわかるように、ダビデはそこへ行きたくなかった。ダビデの逃亡に同行した者たちについては、聖書はなにも記していない。

ゴリヤテの故郷の城壁の中に閉じこめられた、ダビデの気持ちを想像してみてください。そのときにすぐ私刑にされなかったのは奇跡的なことです。というのは、あの決闘から5年も経っていませんからです。しかもゴリヤテの兄弟ラフミが、彼も大柄な兵士でしたが、そのときガテにいたのです（1歴 20：5）。

先に述べた詩篇 56 篇で、ダビデはガテで捕らわれたときの心情を主に訴えて、自分は‘はるかな沈黙の鳩’のようだと言っています。沈黙の鳩—そうです！

あなたは、私のさすらいを
しるしておられます。
どうか私の涙を、
あなたの皮袋にたくわえてください。
それはあなたの書には、
ないのでしょうか。（詩 56：8）

ダビデはガテで秘かに流した悔し涙を、詩の言葉で表現しています。敵の牢獄に閉じこめられているこのとき、妄想狂のイスラエル王が自分の妻や友、親兄弟にどんな仕打ちをしているのかと心配していました。先が見通せない厚い霧が、彼の前に立ちこめているのです。それでもダビデは歌います。

私は、神に信頼しています。それゆえ、恐れません。
人が、私に何をなしえましょう。（詩 56：11）

人間的に言うなら、ガテの兵士はダビデにどんなことでもできたのです。それでも彼は絶望的にならず、神の助けに対する信頼を失いませんでした。これこそ見ないで信じる信仰です。神のご計画を超えて自分に何かをすることは、何者にもできないとわかっていたからです。

そこから逃げ出すために、ダビデは気が狂ったふりをし始めた。ガテの壁に落書きしたり、髭によだれを垂らしたりした。当時の社会通念として精神が狂った人は神聖だとみなされていたので、狂人のような振る舞いをして、ダビデは暴行から身を守ることができた。ダビデの芸術的な演技力が発揮されて、ガテ人は彼の芝居を額面通りに受けた。

それがうまくいって、アキシユ王は気が狂ったヘブル人を町から追い出した。危険から逃れたダビデは詩篇 34 を書いた。¹⁵この詩は、信じる者を苦難からお救いくださる主への喜びに満ちている。‘主を仰ぎ見る人は光と輝き’と。ダビデは逃亡者であっても‘乏しいことはない’と思っている。主のみ使いが“彼を囲んで野に宿り、彼を連れて行ってくれる”と。主の耳はいつも‘彼の叫び’を聞かれる。そんな彼に害をするものがあるだろうか？何もない！

ユダの荒れ地で

ダビデは再び厳しい訓練学校に放り込まれました。今度は羊飼い時代より長く、もっと難しいものでした。この学校では、無意味だと生徒が感じることはあっても、意味のない課題は出ません。指導者としてのこの訓練は 10 年間、続けました。モーセの訓練期間はその 4 倍でしたが。

聖霊の働きとして、その選ばれた人から平穏な日常を取り上げて、荒れ野の孤独の中に投げ入れることがあります。イエス様が荒れ野でサタンの誘惑に遭われたときも、聖霊が導かれたのであって、悪霊ではありません（マタイ 4:1）。読者のみなさんはどうでしょう？病気や解雇、孤独感などは、一種の荒れ野として与えられたもので、なにも頼るものがない中で、み言葉に縋りつくことを学ぶのです。

ダビデが羊を飼っていたときに得た荒れ野で生きていく力は、この状況で役に立ったわけです。今、食べ物、水、隠れ場所を得る方法が身についています。彼はユダの山にあるアダラムの洞穴へ逃れました。おそらく、以前から知っていた場所だったのでしょう。¹⁶詩篇 142 篇はそこから生まれたと考えられます。表題は次のようになっています。「ダビデのマスキール 彼が洞窟にいたときに 祈り」

¹⁵ (15)詩篇 34 篇の表題では、ガテのアキシユ王の名前が間違って司祭アヒメレクになっている。

¹⁶ (16)洞窟があった場所は今はわからないが、ダビデの時代に、ベツレヘムから約 24km 南西、つまりユダ族の領内に同じ名前の町があった。

私は主に向かい、声をあげて叫びます。
声をあげ、主にあわれみを請います。
私は御前に自分の嘆きを注ぎ出し、
私の苦しみを御前に言い表します。
私の霊が私のうちで衰え果てたとき、
あなたこそ、私の道を知っておられる方です。
私が歩く、その道に、
彼らは、私に、わなを仕掛けています。
私の右のほうに目を注いで、見てください。
私を顧みる者もなく、
私の逃げる所もなくなり、
私のたましいに気を配る者もいません。

主よ。私はあなたに叫んで、言いました。
あなたは私の避け所、
生ける者の地で、私の分の土地です。
私の叫びに耳を留めてください。
私はひどく、おとしめられていますから。
どうか、私を迫害する者から救い出してください。
彼らは私よりも強いのです。私のたましいを、牢獄から連れ出し、
私があなたの御名に感謝するようにしてください。
正しい者たちが私の回りに集まることでしょう。
あなたが私に良くしてくださるからです。(詩 142)

ダビデがその洞穴に一人でいたのは、長い間ではなかった。間もなく彼の居場所についての情報が、人から人へ、村から村へとユダの中を駆けめぐった。アダラムの洞穴に最初に入ってきたのは、エッサイの上の息子たちだった。彼らは王の復讐を避けるため、ベツレヘムから逃げてきたのだった。末っ子が突然兄たちのリーダーになったとき、家族の序列は逆転した。なにしろ、彼はサウル王の軍隊で指揮官の訓練を受けている。兄たちは黙ってこの状況を受け入れたが、彼らの内だれも、ダビデの勇士の列に名前が挙げられた者はいなかった。

その後間もなく、ダビデは安全のため両親を外国へ連れ出した。ベツレヘムの家にはだれもいなくなっていて、大事な羊たちがどうなったのかはわからない。ダビデは両親をモアブの王のところに逃し、彼に頼んだ。“神が私に、どんなことをされるかわかるまで、どうか、私の父と母とを出て

来させて、あなたがたといっしょにおらせてください。”（1サム 22：3） 注目すべきは、ダビデが「サウルが私にどんなことをするか」とは言わなかったことだ。言うわけがない。彼はサウルの手ではなく、主のみ手が自分の人生を動かしていると、依然、信じていたのだから。¹⁷

ダビデには実に多くの友と、イスラエル軍の中の崇拜者がいた。しかし、荒れ野まで同行したのは、一握りだけだった。ほとんどの者が王に刃向かう勇気がなかった。刃向かうと、失うものが多かったからだ。しかし、従う者は他にも出てきた。“また、困窮している者、負債のある者、不満のある者たちもみな、彼のところに集まって来たので、ダビデは彼らの長となった。こうして、約四百人の者が彼とともにいるようになった。”（1サム 22：2）

ガドという預言者も、アダラムの洞穴時代にダビデ一行に加わった（1サム 22：5）。逃亡の時期について聖書が詳しく語っているのは、おそらく彼のおかげだ（1歴 29：29）。

ダビデはどうやって、田舎の貧弱な男連中を、訓練されたゲリラにまで鍛えたのだろうか？資金のないゲリラ軍が、荒れ野で 10 年もの長い間、どうやって生き延びられたのだろうか？リーダー自身は一団では年少の中に入っていた。彼がアダラムの洞穴に住み着いたときは、わずか 20 代初めだった。サウルの軍隊で指揮官としての訓練を受けたことに加え、ダビデは生まれながらの主導者だった。彼の生来のものと獲得したものが合わさって、隊員の心に不滅の忠誠心を興させた。というのは、英雄的資質は、ほかの者にも同じ資質を生み出すからだ。この組み合わせに、戦略に優れた才能が加わってダビデは並ぶ者のない軍隊の指揮者になった。彼は生涯、戦いで負けることがなかった。彼の神への強い信頼も、そのゲリラ隊に影響を与えた。彼は戦いの結果は神の手の中にあると確信していた。自分の生涯も部下たちの生涯も同様であることを。そのような信仰は人を勇敢にする。日がたつにつれて、ダビデの部下たちは、リーダーに倣って主に信頼するようになったに違いない。

ダビデが焚き火のそばで自作の詩を歌ったとき、その詩は部下たちへ、主に対する彼の強い信仰を伝えた。詩篇 63 篇はたぶんそのころのものだ。

神よ。あなたは私の神。
私はあなたを切に求めます。
水のない、砂漠の衰え果てた地で、
私のたましいは、あなたに渴き、
私の身も、あなたを慕って気を失うばかりです。(1)
あなたの恵みは、いのちにもまさるゆえ、

¹⁷ (17)ダビデの曾祖母ルツはこのときから 70 年ほど前にモアブから出て行った。

私のくちびるは、あなたを賛美します。(3)

あなたは私の助けでした。

御翼の陰で、私は喜び歌います。(7)

荒くれ者のゲリラたちが、このような詩を聞いたり一緒に歌ったりしているとき、どんなことを感じたでしょうか。彼らは、若いリーダーの心の中をかいま見たことでしょうか。主はダビデの人生の中心だということが、こんなふうにしてみんなに知られるようになりました。彼のような境遇になれば、多くの人は悔しさに絶望的になりますが、ダビデはその感情に支配されませんでした。かえって、安らぎと喜びの源である主の元に立ち返ったのです。

祭司大虐殺とその結果

当初、サウルはダビデの居所を知らなかった。義理の息子はあたかも風の中に消えてしまったようだった。だがある日、彼が目撃されたという情報が王のもとに伝わってきた。サウルはそれを知って、確かに自分に対する陰謀はあったと思って、悔しさに身もだえするほどだった。王は、はっきりとではないが、ヨナタンとダビデが契約を結んだという噂を聞いていたので、その陰謀に関わっていると言い募って、息子を責めた。

ここで王の羊飼いの頭、エドム人のドエグが登場する。彼はサウルに、ノブの神殿にいるダビデを自分の目で見たという、最新のニュースをもたらした。大祭司アヒメレクは逃亡者の言いなりに、武器まで彼に渡したという。それだけで十分だった。サウルは妄想の中で、ダビデは祭司と共謀して自分の命を脅かしていると確信した。聖職者まで、自分の権力を奪う陰謀に加担している！

王は怒り狂った。彼はノブの祭司たち 80 人全員を宮廷に呼び出し、自分の敵側に味方していると責め立てた。王の義理の息子で、しかも近衛兵の隊長のダビデが王の敵だとわかるわけがないと、アヒメレクは弁解した。しかしサウルは、道理を説く声にも自分の良心にも耳をかさず、祭司をひとり残らず殺すようにと命じた。殺戮は、サウルと石のように動けないでいる兵士たちの目の前で、エドム人によって行われた。一番若い祭司のエブヤタルだけが、ドエグの刃から逃れた。¹⁸

それでも収まらず、怒り狂った王はノブの町、祭司の家、妻、子どもたち、家畜もすべてを滅ぼすことにした。その結果、イスラエルに礼拝所がなくなったのは、100 年のうちに二度目となった。

¹⁸ (18)エブヤタルはエリの4代後の子孫である。エリ－ピネハス－アヒタブ－アヒメレク－エブヤタル

若いエブヤタルは、虐殺を逃れ、大祭司の式服であるエフォドを持ってダビデの宿営へ逃げてきた。彼はそれを、燃える神殿の中からかろうじて掴み出したのだ。

こうなると、なぜダビデが大祭司に嘘を言ったかが理解できる。彼は祭司たちを争いに巻き込みたくなかったのだ。虐殺の恐ろしいニュースを聞いたとき、ダビデは激しく自分を責めた。大虐殺は自分のせいだったのではないか？もし彼が、脱走した日に聖所へ行かなかったら、悲劇は避けられたのではないか？

ダビデは若いエブヤタルに嘆いて言った。“私が、あなたの父の家の者全部の死を引き起こしたのだ。私といっしょにいなさい。恐れることはない。私のいのちをねらう者は、あなたのいのちをねらう。しかし私といっしょにいれば、あなたは安全だ。”（1サム 22：22-23）一方、こういうことからゲリラ隊の若いリーダーは、聖なる式服のウリムとトンミムの2つの石で、主に伺いを立てることができるようになった。その後の45年間、エブヤタルはダビデの祭司であった。

詩は悲しみの中から生まれる

ダビデの嘆きは歌となった。詩篇 52 篇の表題は“エドム人ドエグがサウルのもとに来て、彼に告げて「ダビデがアヒメレクの家に来た」と言ったときに”となっている。ダビデの賛美の賜物は、彼の感情の波を詩に向かわせ、彼が何年も荒れ野で生き残るのに、どんなに役立ち、苦しむ心を元気にしたことか！（1コリ 14：26）

ダビデの詩篇は喜びだけでなく、畏れや復讐への渴望も描写しています。詩の形で心の動揺を主に訴えるとき、彼は何も隠しませんでした。これが、自分の悲観的な感情を心の隅に追いやるかわりに、うまく発散させる彼のやり方でした。このはけ口がなければ、彼はいやな人間になっていたことでしょう。

現代では、ダビデの復讐の詩篇は、聖書がどれほど暴力的な書物であるかを証明すると言う人がたくさんいます。しかしこれらの詩篇は、不当な扱いを受けたときに人間の心に浮かび上がって来る感情を、率直に描写しているだけなのです。ダビデは、神がすべての不正を憎んでおられることを知っていたので、あえて不正への報いとして復讐が必要だということを明らかにしたのです。しかしここで注目すべきは、ダビデが決して律法を自分の手で行うのではなく、復讐は主に委ねたことです。もしこのように、悲痛なまでに正直に、思いを詩篇に書いていなかったら、彼はそんなに敬虔なままでいられたでしょうか？

サウルの監督ドエグが、ダビデがノブへ行ったことをサウルに教え、惨たらしく祭司を虐殺した後、ドエグについてダビデは次のように書いている。

なぜ、おまえは悪を誇るのか。勇士よ。
神の恵みは、いつも、あるのだ。
欺きの舌よ。
おまえはあらゆるごまかしのことばを愛している。
それゆえ、神はおまえを全く打ち砕き、
打ち倒し、おまえを幕屋から引き抜かれる。
こうして、生ける者の地から、
おまえを根こそぎにされる。
私は、とこしえまでも、あなたに感謝します。
あなたが、こうしてくださったのですから。
私はあなたの聖徒たちの前で、
いつくしみ深いあなたの御名を待ち望みます。(詩 52 : 1、4-6、9)

過去 3000 年の間に、イエス様を含め、どれほど多くの迫害された信者たちが、自分の苦悩をこれらの詩篇の言葉の中に見つけたことでしょう。迫害されたイエス・キリスト、そしてキリスト教の殉教者の口に適切な言葉を残すためにこそ、ダビデは青春時代に迫害されなければならなかったのです。そうです、若いダビデの悲しみは一つも無駄にはなりませんでした。読者のみなさん、あなたも自分の悲しみを主の手に差し出すことができれば、それも無駄になることはありません。

ケイラでの落胆

ある日ダビデは、ペリシテが近隣の町ケイラを急襲しようとしているという知らせを受けた。¹⁹ 若いゲリラの首領は、常に敵兵による略奪と強姦の脅威にさらされている、部族の兄弟姉妹たちを気の毒に思っていた。彼はケイラを助けに行くべきかどうかを、ウリムとトンム二つの石で主に伺いを立てた。答えは「行くべき」だった。

ダビデにしてはめずらしく、彼の部下たちは熟練していなかったようで、ケイラを助けに行くという気狂いじみた計画に強く反抗した。ペリシテ人の感情が悪化して戦争を誘発するということがないようにする、というのは彼らには不可能だった。とは言え、わずか数百人の貧弱な武器しか持たない男たちが、どうやったら鉄の武器で装備した軍隊を打ち負かせるのだろうか？

¹⁹ (19) ケイラ (現在のキルベル・キラ) は、もともとユダ族の街だったが、あとで、ペリシテ人の領域に代わってしまった。(ヨシ 15 : 44)。

しかしダビデは経験を積んだ戦士の目で、物事を違ったように見ていた。彼は力の比を計って自分たちは勝てる判断した。部下たちをなだめるため、彼が主に伺いを立てて出た肯定の答えで、彼らは納得した。結局、ダビデと家来たちはペリシテを攻撃して打ち負かし、ユダヤ人の町を開放した。同時に多くの家畜を戦利品として獲得した。このときゲリラ隊員たちは、護衛の役目としてケイラに留まれると思って喜んだ。また屋根の下で家族と暮らせる場所を得ることには、さぞ心引かれただろう。荒れ野に隠れ住むのは、もう終わる。

しかし、この出来事を聞いたサウルは、神がダビデを自分の手に渡されたのだと思った。彼らが降参を拒めばケイラを包囲して、住人を餓死させるのは簡単だ。しかし神は「サウル軍が来ればケイラの人々はダビデをサウルに引き渡す」と告げた。そのため、ゲリラ隊長は選択の余地なく、町を捨てて再び荒れ野をさまよい続けることになった。ダビデの‘荒れ野学校’はなかなか終わらない。それどころか始まったばかりだった。

恩知らずのケイラの住民は、ダビデと家来たちの心を痛める元となったにちがいない。ゲリラたちは命をかけて町が捕囚となることから救ったというのに、受けた代償は何だったのか？何もなかった。

ふたりの友の最後の出会い

この出来事のあと、ダビデはユダの山岳地帯から南へ移動した。“ダビデは荒野や要害に宿ったり、ジフの荒野の山地に宿ったりした。サウルはいつもダビデを追ったが、神はダビデをサウルの手に渡されなかった。ダビデは、サウルが自分のいのちをねらって出て来たので恐れていた。そのときダビデはジフの荒野のホレシュにいた。”（1サム 23：14－15）²⁰

離れていた間にダビデとヨナタンが何度会うことができたか、わからない。おそらくほとんど会えなかっただろう。しかしある日、ヨナタンは友に会いに行きたいという強い衝動に駆られた。ちょうどその時、サウルは精鋭兵にダビデを追わせていたから、王子はだれにも気付かれずに宮廷を抜け出すことができた。

ジフの山地でダビデを突き止めるのは、言うほどたやすくはない。王子が友の隠れている場所を探し出し、護衛兵たちをなだめ、宿営までたどり着くまでに、どれだけの秘かな戦略が必要だったか！なんと言っても、ヨナタンはダビデのゲリラたちにとっては敵なのだ。

²⁰ (20) ジフの街、今日のテルジフは、ヘブロンから約 10km 南にある。ダビデはこの街を囲む山中に隠れていた。

聖書は二人の友の最後の出会いについて、少ない言葉で描いている。“サウルの子ヨナタンは、ホレシュのダビデのところに来て、神の御名によってダビデを力づけた。彼はダビデに言った。「恐れることはありません。私の父サウルの手があなたの身に及ぶことはないからです。あなたこそ、イスラエルの王となり、私はあなたの次に立つ者となるでしょう。私の父サウルもまた、そうなることを確かに知っているのです。”（1サム 23：16-17）

ここでヨナタンは、ずっと以前から二人が知っていたことを口に出した—ダビデがイスラエルの次の王になることを。ヨナタンは、自分は彼の次の地位にいることが幸せだとダビデに言うために、彼を捜したと思われる。そのころ、ヨナタンの最

初で唯一人の息子メフィボシェテが生まれた（子どもの名前はメリブ・パールから取られた）。²¹ 父親になったとき、ヨナタンはそんなに若くなく、たぶん 35 歳前後だった。彼がダビデのために王冠を手放すと決心したとき、自分の息子を王の後継者にはしないということも決めた。

ユダの山の上でのダビデの生活は容易ではなかったが、妄想狂の父親と暮らすヨナタンの宮廷生活はもっと大変だっただろう。王は疑い深く、何をするかわからないし、常に‘エッサイの息子’の悪口を言う。しかし幸いなことにヨナタンには自分の小さな家族がいた。彼はきっと、妻や幼いメフィボシェテとの幸せな時を味わったことだろう。

若者たちは、もう一度友情の誓いを確認しました。“ダビデはホレシュにとどまり、ヨナタンは自分の家へ帰った。”（1サム 23：18）このあとどうなるか、二人は知らなかったことですが、聖書の読者は知っています。ヨナタンはそのわずか数年後に死ぬのです。親しんだ姿が道を曲がって見えなくなるのをじっと見守っていたとき、ダビデは恐れが混じった予感を感じたかもしれません。もう二度と彼に会えないのだろうか？しかし二人は、自分たちの友情はたとえどちらかが死んでも、この世界から消えてなくなることはない、確信していました（1コリ 13：8）。

「私はあなたの次に立つ者」はヨナタンがダビデに予言したことです。この予言は実現しませんでした、本当でした。「離れたときに、一番近くにいる」²²とされているように、ヨナタンは死んでからも、ダビデの最良の友のままでした。ダビデが王座にある間中、あの友なら今こんなときにはどう言って、どうするだろうと、彼は何度となく自分に問いかけたことでしょう。ヨナタンの思い出は、その後のダビデにとってどれほど大切だったか。彼の心を底まで知り尽くし、わかってくれる人が、この世にいたのです。

²¹ (21) パールという言葉はダビデの時代、“主人”という一般的な意味を持っていた。のちに、この言葉はパール崇拜を強く意味するようになったので、聖書では名前を変えた。

²² (22) スウェーデンのことわざ

恐れと勇気

ダビデはホレシュには長くいられなかった。なぜなら、また住人のだれかが「ダビデは私たちのところに隠れている」と、サウル王に教えたからだ。ダビデがどこに隠れても、日和見主義者が一人はいて、宮廷のご機嫌取りのためにゲリラの動きを王に知らせた。詩篇 54 篇で、ダビデは裏切りに会ったときのことを描写している。

神よ。御名によって、私をお救いください。

あなたの権威によって、私を弁護してください。(1)

見知らぬ者たちが、私に立ち向かい、

横暴な者たちが私のいのちを求めます。

彼らは自分の前に神を置いていないからです。セラ(3)

まことに、神は私を助ける方、主は私のいのちをささえる方です。(4)

神は、私を待ち伏せている者どもに

わざわざを報いられます。

あなたの真実をもって、彼らを滅ぼしてください。(5)

私は、進んでささげるささげ物をもって、

あなたにいけにえをささげます。

主よ。いつくしみ深いあなたの御名に、感謝します。(6)

神はすべての苦難から私を救い出し、

私の目が私の敵をながめるようになったからです。(7) (詩 54)

サウルのような歪んだ性格の者は、周りの人がお互いを攻撃し合うように、たえずし向ける。彼のせいで、それまでの友達が何人もダビデに背いてきた。だれかが自分のことで嘘をついているとか、自分の言葉をゆがめて人に伝えていると知ると、それをがまんするのは易しくない。裏切りがわかっているダビデは、ときどき心底絶望に陥ったが、そんなとき、彼は自分の悩みを主に打ち明けた。

神よ。私の祈りを耳に入れ、

私の切なる願いから、身を隠さないでください。

私に御心を留め、私に答えてください。

私は苦しんで、心にうめき、泣きわめいています。

それは敵の叫びと、悪者の迫害のためです。

彼らは私にわざわざを投げかけ、

激しい怒りをもって私に恨みをいただいています。
私の心は、うちにもだえ、
死の恐怖が、私を襲っています。
恐れとおののきが私に臨み、
戦慄が私を包みました。(詩 55：1-5)

ダビデの勇気は恐れを知らないからではないと、私たちにも分かる。実際、彼は時に王の憎しみに怯えた一怖くて震えるほどだった。どんな恐れも感じない人には勇気は要らない。本当の英雄とは、恐れに震えるようなときでも正しく行動する人のことだ。いくらサウルが悪口を言おうと、いつまでもその嘘が正されないまま、罰せられないままではすまないだろうという、ダビデの確信は揺るがなかった。

筆者には、ダビデが敵について非常に多くを語っていることが、驚きでした。実際、彼はほとんどの詩篇の中で敵のことを記述していますが、このテーマが今のキリスト教会の中で取り上げられていないことは不思議です。ヨーロッパ系のクリスチャンは、迫害されないのが当たり前でしたが、それは急速に変わってきつつあります。昨今はキリスト教信仰のあら探しをしたり、キリスト教徒の評判を落としたりすることが普通になってきています。正当な理由のときもありますが、そうでないことの方が多いようです。

迫害されると、私たちは心に恨みを抱き、心の中で復讐しようとしみます。私たちの人生で最もつらい戦いは、外側の敵に対するものではありません。一番激しい戦いは、自分自身の心の中から湧いて出る憎しみや悔しさ、恐れを相手とする戦いです。

もしあなたが、敵対する相手の行動や言葉を何度も何度も考えるようなら、そのことがあなたを支配している敵対者なのです。皆さんがそんな状況にあるときは、筆者自身の経験から生まれた勧めをどうぞ受け入れてください。まず、自分に問いかけてください。だれがあなたの行く道に敵を置いたのか。答えは‘神ご自身’です。次に問うのは、神がこのやっかいな人をあなたの行く手に置かれたのは、なぜか。答えは‘たとえ不条理に迫害されても、それはあなたが神を信頼するようになるため’です。

敵の憎しみは、イエス様の翼の下に避難する人を害することはできません。避難者が助けを求めて、その御名を呼ぶようにさせるのです。敵は結局、価値ある訓練をあなたに提供しているだけなのです。そしていつかは、主があなたに関して広がった嘘を正し、あなたが指一本動かすことなく迫害者を罰してくださいませ。

荒れ野の誘惑

ダビデの軍隊はだんだん大きくなっていった。最初の数年間はわずか 400 人だったが、最後には 600 人の兵士が彼に従うようになった。そのうちの多くは家族連れだった。女性がいると、当然子供が生まれる。このような雑多な集団の安全と扶養を担う主導者の責任は、重くなっていった。こんなに大きな集団の食料を日ごとに調達するのは、大変な負担だ。その上、敵の軍隊の急襲があれば、どうやって逃げるのだ？

サウル王は、3000 人の精鋭部隊を抱え、元義理の息子についての情報が入るたびに、ダビデの追跡を命じた。しかしダビデは、神に油そそがれた王とその兵士に刃を向けることはしなかった。サウルが攻撃しかけると、ダビデはかわした。ときに状況が行き詰まっても、最後の瞬間には主がいつもダビデを助けられた。一度、ペリシテ人が自分の国を攻撃したと聞いて、サウルが追跡を中断せざるを得なかったことがあった。

若いゲリラ隊長の評判は、ユダ族に、そして他の部族の間にまで広がっていった。いい評判が多かった。たとえば、ダビデは部下が周辺の村から食べ物を略奪することを許さなかった。ときには、食料が贈られてくるまで飢えることがあったが、彼は辛抱強く待った。外国との戦いで戦利品があったときは、兄弟部族にも平等に分配した。

主は二度、サウルをダビデの手に置かれた。裁きが委ねられたと思って、狂った王を殺しなさいと、部下が説得しようとしたときは、誘惑だった。一度目は死海の西岸にあるエン・ゲディでの出来事だった。その辺りは洞穴だらけで水の便もよく、ゲリラ軍には理想的な隠れ場所だった。

ダビデを追って山の中に迷い込んだとき、サウルは洞穴の一つに用を足すために入った。まさにその洞穴に、ダビデが部下たちと一緒に隠れていたのだ。その場面は、どこか喜劇的だったが、ゲリラたちから笑い声は立たなかった。かわりに彼らは仕草で、気狂い王を殺す許可を求めた。全能の神がそのためにサウルを自分たちの手に渡されたのだと、堅く確信したからだ。

剣をわずか一振りするだけで、今の苦境から解放され、家族の元へ帰ることができる。ダビデが王になって恐怖の統治が終わり、国中が安堵の息をつく。剣の一振りから、たくさんの良いことが出てくる。しかしダビデは「だめだ」と言った。このような状況下で、若い主導者が部下を抑えられたことは、彼に権威と統率力が備わっている証拠だ。

サウルを襲う代わりに、ダビデは彼の背後に忍び寄って、彼の上着の端を剣で切り取った。彼は、それ以上のことをしようかと、一瞬でも自分と闘ったかもしれない。しかしどんな場合でも、悪をもって悪に報いてはならない、法の権威を剣で切り捨ててはならないと、ダビデの良心は強く訴えた。彼と部下たちは神の時を待ち、敵に勝る神の力に依り頼むしかなかった。サウル

は神がお許しになる間だけ、彼らを迫害することができる。もし自分の手で復讐すれば、彼が神の公正な裁きを信じていないということになる。

サウルが洞穴から出ていくと、ダビデは続いて出ていき、後ろから声をかけた。“わが父よ。どうか、私の手にあるあなたの上着のすそをよくご覧ください。私はあなたの上着のすそを切り取りましたが、あなたを殺しはしませんでした。それによって私に悪いこともそむきの罪もないことを、確かに認めてください。私はあなたに罪を犯さなかったのに、あなたは私のいのちを取ろうとつけねらっておられます。どうか、主が、私とあなたの間をさばき、主が私の仇を、あなたに報いられますように。私はあなたを手にかけることはしません。”（1サム 24：11-12）

いい機会だったのに勝手に制裁を加えなかったことを、ダビデはサウルに明かした。そして、これからも同様にすると書いた。王と彼の家来たちは驚きで口を開けたまま、彼の言うことを聞いたことだろう。ダビデが見せた道義をわきまえた気質は、敵味方なく勇気ある兵士たちに強い印象を与えたに違いない。

実際、ダビデはサウルについて否定的な言葉は言わなかった。このときも彼はサウルをわが父と呼んだ。（知ってのとおり、サウルは彼の元妻と親友の父親だった。）父親を殺して王冠を奪っておいて、どうしてダビデはミカルとヨナタンの目を見ることができただろう。そんなことになったら世の中全部が、ダビデは神の助けを信じていない、あるいは彼には助けを待つだけの忍耐がないと、見てしまったことだろう。ダビデは自分を抑制することで、王国がほしいのではないということを、敵にも味方にも証明した。王国の方が、彼を求めているのだ。

ダビデの 32 代目の子は、自分に跪くだけで、この世の王国すべてを与えると言ったサタンの、これと同じ誘惑に打ち勝たれました。イエス様は父なる神の右の座に昇るまで、神の時を待ち、苦しい十字架への道を歩まれました。

後に王座の重荷がダビデの肩にかかりましたが、王座は強奪したものではないと、彼は常に自分に言うことができたのです。王位は神から与えられたものです。その筋への働きかけや作戦を用いて主導権を得ようとする人は全て、この確信が欠けています。

みなさん、主が扉を開くと決められたら、世のどんな力もその扉を閉ざすことはできないと、信じますか？王国はあなたをも求めています。そして王様はあなたにふさわしい働きを与えられるのです。悪魔が、もっと出世するために聖書を無視するようにと主張しても、信用してはいけません。教会ででも社会ででも、扉を開け閉めされるのは主だからです。主が閉ざされる限り、扉は開きません。足が痛くなるほど扉を蹴り続けた、この筆者の言うことをどうぞ信じてください。

ダビデの寛容さは、狂った王の心さえ動かした。サウルは涙を流して言った。“あなたは私より正しい。あなたは私に良くしてくれたのに、私はあなたに悪いしうちをした・・・あなたがきょう、私にしてくれた事の報いとして、主があなたに幸いを与えられるように。あなたが必ず王になり、あなたの手によってイスラエル王国が確立することを、私は今、確かに知った。”（1サム 24：17-20）

サウルは狂っていたけれど、義理の息子は自分の百倍も優れていると認めた。そこで彼はダビデに、王座に着いても自分の子孫を滅ぼさないと誓ってほしいと頼んだ。ダビデは彼の望み通りに誓った。サウルが彼と家族を追い込んだ状況を考えると、それを受け入れたダビデがとても寛大だったということだ。

しばらくはゲリラたちは穏やかに過ごしたが、またサウルの追跡が再開し、以前より激しくなった。そのころダビデは新しい詩を創った。

ダビデがサウルからのがれて洞窟にいたときに

神よ。私をあわれんでください。

私をあわれんでください。

私のたましいはあなたに身を避けていますから。

まことに、滅びが過ぎ去るまで、

私は御翼の陰に身を避けます。

私はいと高き方、神に呼ばわれます。

私のために、すべてを成し遂げてくださる神に。

神は、天からの送りで、私を救われます。

神は私を踏みつける者どもを、責めておられます。セラ

神は恵みとまことを送られるのです。（詩 57：1-3）

紀元前 1050 年頃、靈的指導者として 70 年間働いた後、サムエルは死んだ。彼がダビデにイスラエルの王として油をそそいでから、10 年ほどが経っていた。ダビデは‘ナヨテ預言者学校’以来、サムエルに会っていなかった。彼と部下たちだけが偉大な預言者の葬儀にイスラエルの人たちと一緒に参加できなかったのは、つらかったことだろう。ダビデは、年老いたサムエルが毎日毎日自分のために祈ってくれていることを知っていた。この偉大な執り成し者が去ったいま、今度は誰が代わりとなるのだろうか？

ダビデの2番目の妻、と、3番目の妻

逃亡を始めたころ、ダビデは衝撃的な知らせを聞いた。彼の大切なミカルが、ほかの男と結婚させられたのだ。彼女は、再び結ばれるまで待つがまんができなかったのか？それとも結婚を強制されたのか？この疑問のため、見捨てられた夫は幾晩も眠れなかったに違いない。ほかの男に抱かれているミカルを想像すると、ダビデは嫉妬という毒を飲み込まなければならなかった。若い時に妻を失ったことが、彼の後の人生での女性関係を混乱させてしまったのかもしれない。

次に起こることは簡単に想像できる。若くてハンサムなロビンフッドは、喜んで彼の軍隊の宿営に入って彼と共に逃亡生活をするという女性を見つけた。私たちが知っているのは、彼女の名前がアヒノアムで、息子の名前はアムノンということだけだ。ところで、若いときのダビデの最初の妻への愛は消えたのだろうか。人が思い出を切り変えるのは、連れ合いを替えるほどたやすくはない。この前夫はミカルを夢で見たり、ぼんやりしているとき空想したりしたのではないだろうか。

しばらくの間はダビデはアヒノアムに夢中になったかもしれないが、心の深い結びつきがなかったので、次の妻が出てくるのは当然だった。ダビデは創世記にある神の、結婚についての御心、はっきりした告知を無視したわけだ。一人の男と一人の女が結ばれ、一体となる（創2：24）。これ以外の組み合わせは全部、人の人生や心を壊したことはダビデも知っているはずだった。モーセだけでなくイエス様もこの事実を強調しておられる（マタ19：4-6）。

ダビデが3番目の妻と出会った経緯は次の通りだった。マオンの荒れ地のはずれにナバルという名の金持ちの男が住んでいた（ちなみに、この名の意味は“愚か者”という）。当時は家畜を100頭持っていたら、比較的裕福なほうだった。ところがナバルは羊3000頭と山羊1000頭を持っていた。部下たちがナバルの羊飼いたちと同じ地域を歩き回っていたので、ダビデは噂でこの桁違いの金持ちを知っていた。

前にも述べたように、彼の家来たちの振る舞いは、ほかのゲリラのようではなかった。彼らは目こぼし料を請求したり村人の所有地から強奪したりしなかった。ナバルの羊飼いたちはダビデの兵士たちについて次のように言っている。“あの人たちは私たちにたいへん良くしてくれたのです。私たちは恥ずかしい思いをさせられたこともなく、私たちが彼らと野でいっしょにいて行動を共にしていた間中、何もなくしませんでした。私たちが彼らといっしょに羊を飼っている間は、昼も夜も、あの人たちは私たちのために城壁となってくれました。”（1サム25：15-16）

近隣の人たちみんなの手を借りて、3000頭の羊と1000頭の山羊の毛を刈る日が来た。当時の習慣で、手伝いの人たちのための宴会が開かれた。たっぷり飲んで食べるのだ。このとき、ダビデ

は兵士を何人かナバルのところに送って、彼に寄与したことの報酬をもらいたいと頼んだ。彼は力づくで宴会の分け前を要求できたが、礼儀正しく申し出た。“あなたに平安がありますように。あなたの家に平安がありますように。また、あなたのすべてのものに平安がありますように。・・・この若者たちに親切にしてやってください。私たちは祝いの日にきたのですから。どうか、このしもべたちと、あなたの子ダビデに、何かあなたの手もとにある物を与えてください。”
(1サム 25：6、8) これ以上の丁寧な挨拶があるだろうか？

ナバルの答えは無愛想でにべもないものだった。彼はダビデをただの逃亡奴隷と決めつけ、食べ物を与えるつもりも無いと言った。これはゲリラ隊長にとってはひどすぎる扱いだった。あまりのことにダビデは激怒して報復しようとした。彼がナバルの家へ向かう途中、ナバルの美しい妻が出てきて彼と話をしなかったら、きっと恐ろしい流血沙汰になっていたことだろう。

美しく賢明なアビガイルは言った。“今、ご主人さま。あなたが血を流しに行かれるのをとどめ、ご自分の手を下して復讐なことをとどめられた主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。・・・主が、あなたについて約束されたすべての良いことを、ご主人さまに成し遂げ、あなたをイスラエルの君主に任じられたとき、むだに血を流したり、ご主人さま自身で復讐されたりしたことが、あなたのつまずきとなり、ご主人さまの心の妨げとなりませんように。” (1サム 25：26、30-31)

本当にそうだ！知られてはまずい事、世間の目から死にものぐるいで隠そうとする恥ずかしい秘密を抱えている主導者がどんなに多いか！アビガイルは心からダビデを賞賛していたので、彼にそんなことが起きて欲しくなかった。一方、ダビデはたとえ女性が言うことであっても、行き届いた助言を受け入れる度量があった。アビガイルの警告を聞いて彼の目が開き、自分はなんと恐ろしいことをしようとしていたか、に気がついた。

ダビデの家来たちは必ずしもアビガイルに同調しなかった。その多くはナバルに仕返しをしたいと思っていたかもしれない。しかしダビデは顔をつぶすより、罪を犯すことを恐れ、兵士たちに引き返すよう命じた。そして彼は、その賢い主婦からもたらされたおいしい食べ物を、喜んで受けた。

アビガイルは夫に内緒で、ダビデに会う画策をしたのだった。帰る道々、みんなの前で自分が裏切られたことを知れば、あの愚か者はどんなことでもしかねないと、彼女は気付いた。このとき、神が直接介入された。妻が黙ってしたことを聞いて、ナバルは石のようになった。血の壺が頭の中ではじけて麻痺を起こし、数日後に彼は死んだ。飲み過ぎ食べ過ぎの上に、妻の裏切りという衝撃が発作を引き起こしたのだろう。

アビガイルが未亡人になったことを知ると、ダビデはそれほどためらうことなく、使いを送って彼女に結婚を申し込んだ。美しい未亡人は二度も言わせず受け入れた。実は彼女は、たとえ奴隷となったとしてもその家から去って、ダビデの元へ行くつもりだったのだ。アビガイルは豊かな生活を、山中の洞穴の生活とためらいなく取り替えた。それほどに、英雄で詩人であるダビデの魅力は強烈だった。

それだけに、宿営にはすでにダビデの妻がいることを知ったとき、アビガイルはどんなに衝撃を受けたでしょう？彼の天幕を、その女と分けなければならないのです。また、かわいそうなアヒノアムはダビデが他の女を宿営に連れてきたとき、どう感じたでしょう？ミカルはどうでしょう。若い頃に愛した人が、一人どころか二人も妻を娶ったと聞けば、彼女はどう思ったでしょう？3人ともが幸せではありません。それはダビデも同様です。

もしダビデがアヒノアムを心底愛していたなら、どうしてアビガイルを必要と思ったのですか？三角関係には、一人の男と一人の女が結びつく単婚でだけ生まれる、親密な関係が育ちません。だから、3人がみな孤独になるのです。

ダビデはヨナタンに心の奥底を打ち明けていますが、女たちの前ではそれができなかったようです。三角関係は事を難しくしてしまいます。夫が、本音を打ち明けるほどアヒノアムを信頼していると知れば、アビガイルは嫉妬に狂うでしょう。その逆も同じです。だからダビデは、黙ったままで、夢や悲しみや気持ちの奥底を、女たちに話さない方がいいと悟ったのです。その結果として、ダビデの結婚は、心からの親しい交わりに欠けたものになりました。

現在、一生一人だけとの結婚を取りやめて、絶えず代わる関係を結んだために、孤独に泣いている人がどれだけいることでしょう。

三度目の誘惑とペリシテへの逃亡

主は、ダビデが運命を自分で決めるかどうかを見るため、もう一度試そうとされた。(ああ主よ、あなたはご自分の子に、易しいものをお与えになりません。)再び、密告者がダビデの居所をサウルに知らせ、サウルは彼を追って急いで荒野へ行った。ある夜突然、ゲリラ隊長はその追跡者の野営地に行き逢った。なんと！兵士、衛兵もみんな、王の周りでぐっすりと眠り込んでいた。

ダビデは甥のアビシャイと一緒に、こっそりと野営地に忍び込んだ。王を中にして眠っている一団を見て、甥は叔父にささやいた。“神はきょう、あなたの敵をあなたの手に渡されました。どうぞ

私に、あの槍で彼を一気に地に刺し殺させてください。二度することはありません”。（1サム 26：8）²³

今度は、ダビデが甥の言葉に同意しても、非難するイスラエル人はほとんどいないだろう。しかしダビデは神の戒めを知っていた。“あなたの父と母を敬え”“殺してはならない”そこで彼はアビシヤイに答えた。“主は生きておられる。主は必ず彼を打たれる。彼はその生涯の終わりに死ぬか、戦いに下ったときに滅ぼされるかだ。私が、主に油そそがれた方に手を下すなど、主の前に絶対にできないことだ。さあ、今は、あの枕もとにある槍と水差しとを取って行くことにしよう。”（1サム 26：10-11）

次の言葉は、ダビデがサウル王の野営地を見下ろす丘の上に立って、みんなに聞かせた、二度目の信仰告白だった。“きょう、私があなたのいのちをたいせつにしたように、主は私のいのちをたいせつにして、すべての苦しみから私を救い出してくださいます。”（1サム 26：24）このときも、ダビデの言葉はサウルの頑なな心に届いて、反目するのは止めると、再び約束した。しかしダビデはサウルは嘘だと言うことを知っていた。悪魔はサウルが死ぬまで、ダビデへの迫害を止めさせなかった。

ダビデはこれまでの8年間、逃げ回っていた。20代の若者には長い時間だ。彼の集団は大勢になり、それに伴う責任も大きくなった。この年月を通して、ダビデははっきりと自分の良心を貫いて、法を自分に都合のいいように曲げることもしなかった。また、彼のことを密告した者やサウル王側で闘った者に仕返しもしなかった。ユダヤの民族はみんな、このゲリラ隊長が自分たちに害するつもりがないのがわかった。そうとなれば、彼らがだれの側に立つか、疑問の余地はないだろう。

ダビデは最後まで国を離れることを避けようとした。ユダから出て行けば、自分と家来たちの信仰に重大な結果をもたらすことが、分かっていたからだ。もしユダを離れると、自分に対抗している王の軍に入らなければならないだろう。もっと悪くすれば、いつかその王がイスラエルと戦争を始めるかもしれない。

それだけではなかった。当時の規定は「郷にいれば郷に従え」というものだった。ひどい場合、ダビデと家来たちは新しい国の神々を拝むように強制されるだろう。このことをダビデがよく把握していたことは、彼がサウルに向かって叫んだ言葉で分かる。“彼らはきょう、私を追い払って、主のゆずりの地にあずからせず、行ってほかの神々に仕えよ、と言っているからです。どうか今、私が主の前から去って、この血を地面に流すことがありませんように。”（1サム 26：19-20）

²³ (23) ダビデの甥の名前が聖書に登場するのはこれが初めてだが、決して最後ではない。

ダビデには、‘恵みの手段’すなわち、神の言葉、幕屋、祭壇の生贄から離れることは、神から離れることだと分かっていた。

しかし、大きくなったゲリラ村の維持は、リーダーにとって耐え難いほどだった。何百人という部下と女、子供を食べさせるのは、ほとんど不可能だし、同じように、素早くあちこちと移動することも無理だった。飢えか、虐殺に不意打ちされるかもしれない。女や子供の安全は絶えず脅かされている。サウルが生きていた、この状態は変わらず、いつ終わるかわからなかった。残された道は、外国への亡命しかない。

このときダビデが、逃亡生活はあと残り 16 ヶ月ほどで、それで終わりにになると知ってさえいれば・・・しかし主は彼にそのことをお教えになりませんでした。私たちにも同じです。こんなふうに主は、見ないで信じることを、私たちに教えられるのです。結果としては、辛抱強く待つことができるようになった者は、そのときが来れば最も適切に行動するのです。

そういうことで、ゲリラたちにはただ一つの選択しかなかった。つまり、国境を越えて、ペリシテへ行くことだ。ダビデはどんな思いでガテの門を叩いたのだろうか。同じ門から、彼が気狂いを装って逃れ出て以来 10 年も経っていなかった。今度は、どんなことが彼を待ち受けているのだろうか。

ダビデはガテの王に嘘をつくしかなかった。つまり、とうとう味方に付く側を替えた、もう自分の国の者とは一緒になにもしたくない、と。アキシュ王は、優れた傭兵が必要なのではないか？ダビデはそれを 600 人提供できるのだ。たしかにアキシュは兵士が欲しかった。ダビデが勇壮なゲリラのリーダーだという評判はペリシテにも広がっていて、アキシュは、そんな戦争の英雄を、彼の勇猛な兵士たちをも一緒に自分の要職に加えられるのを、幸運だと喜んだ。

その 15 年前にダビデがアキシュ王の優秀な兵士たちを殺し、その 5 年後にはガテで気狂いを装ったことを考えると、王が大手を広げてダビデを歓迎したのは信じられないことだった。²⁴それどころか、アキシュはダビデの誠実さを無条件で信用したので、なにも考えずに彼を採用した。この出来事は、ダビデの魅力とカリスマ性がどれほど強かったかを表している。

これだけでは十分でないというように、アキシュはダビデとゲリラ隊に、ガテの南 25 キロのところにある小さな町ツィケラグを贈ると申し出た。この町はヨシュアがユダ族のために取り分けるつもりでいたのだが、後にはペリシテがそこを占領していた（ヨシ 15：31）。ツィケラグは、荒野近郊にある小さな村だったので、兵士たちには楽園に思えた。そこなら、妻や子供たち

²⁴ (24) ガテの王は 10 年前と同一人物のアキシュか、あるいはその息子だった。当時の王族は父から子へ、同じ名前を付けた。

と本物の家に落ち着くことができ、比較的普通の家庭生活ができるからだ。この協定のため、偶像礼拝のことは問題にならなかった。

ギベアの宮廷では、ヨナタンがほっとしていた。彼の友は、安住の地を得た。そしてサウルはペリシテの領域にまで打って出られなかったので、しぶしぶ追跡をあきらめた。彼にできたのは、ペリシテ人が元義理の息子を殺すのを期待することだけだった。過去 10 年間、サウルはダビデを追跡することに精力の多くを費やして、自分の軍隊を訓練する時間はなかった。間もなく、この怠慢はサウル的一家と国民に決定的な結果をもたらすこととなった。

ツィケラグへの移住民が、少しずつ流れ込んできた。イスラエルの全部族からの男たちで、彼らはサウルに失望して集まってきたのだった（1 歴 12）。しかし、ダビデはどうやって大きくなった自分の一族を食べさせることができるだろう？ 秘かに味方してくれるユダヤ人農家も、もはや彼に貢ぐことができなくなっている。残る道はひとつ、荒れ地に住む異教の部族を襲撃することだ。“ダビデは、これらの地方を打つと、男も女も生かしてはおかず、羊、牛、ろば、らくだ、それに着物などを奪った。”（1 サム 27：9）

生き残った目撃者がガテの王にダビデの行動を報告する者がいないように、一人残らず殺した。そしてダビデは、自分の国の村々を襲ったのだと、アキシュに嘘を言った。王は、その盟友が自分の後ろの橋を全部焼き落として、二度と自分の国へ帰らないだろうと、徐々に思うようになった。

ダビデのこの時の行動をおかしいと思いませんか？ ばかのナバルを殺したなら、彼の良心にいつまでもひっかかっていたらどうだろうというのに、荒れ野の異教徒を殺すことは平気だったなんて。その理由は、ナバルはダビデの同胞で、さらに彼と同族でもありましたが、それとは違って、異邦人は彼にとって隣人ではなかったからです。

このとき、神は襲撃を直接には禁じられなかった。しかし、あとでもわかるように、それはダビデの後の人生に悪い結果をもたらした。主はダビデが多くの血を流したことを理由に、彼が神殿を建てることを禁じられたのだ。ダビデは荒々しく強靱な戦士である一方、詩には深い心と感性を持っていたので、荒れ野での虐殺は心理的な意味でも、確かに彼の心に傷を残しただろう。²⁵

²⁵ (25) 聖書は暴力を奨励しているのでしょうか？ 大虐殺を正当化しているのでしょうか？ 子供たちに聖書を読んで聞かせてもいいですか？ ドン・カーソン著の「How Long, O Lord」を読んでください。聖書が血なまぐさい本だと思える人が、たいがい、妊娠中絶を血なまぐさい処置だと思っていないというのは、変なことだと思いませんか？ もし、聖書が教えているように、胎児が人間だというなら、私たちフィンランド人は過去 40 年以上、ダビデよりひどい虐殺をしてきたことになりす。

このような旧約聖書の戦争の物語を聞いたあとでは、新約聖書の中の、ダビデの子の言葉を読むと、なんと素晴らしいことかと思えます。“剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。”（マタ 26：52）、“あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行ないなさい。”（ル 6：27）そしてまたイエス様は「よきサマリア人」のたとえ話で、地上のすべての人はみな私たちの隣人だと言っておられます。

軍隊遠征とその結果

ある日、ダビデが国を出た時に一番心配したことが本当になった。イスラエルとペリシテの戦争が始まったのだ。ダビデは厳しい選択を迫られた。女子供みんなを引き連れて再び山に逃げるべきか、アキシュに従って戦うべきか？ダビデの集団はあまりに大きくなりすぎて、山に隠れることはもうできなかったのだから、ダビデにはアキシュに従う道しかなかった。

ガテの愚直な王は、無条件でヘブル人の将校を信用して、彼に言った。“「あなたと、あなたの部下は、私といっしょに出陣することになっているのを、よく承知してもらいたい。」ダビデはアキシュに言った。「よろしゅうございます。このしもべが、どうするか、おわかりになるでしょう。」アキシュはダビデに言った。「よろしい。あなたをいつまでも、私の護衛に任命しておこう。」”（1サム 28：1-2）

ペリシテの大軍が戦場への 100 キロを北に向かって進軍しているあいだ、ダビデのゲリラ隊はその後ろからついて行った。イズレエルの平原の西にあるアフエクが彼らの目的地だった。一方サウルは自分の軍勢を、その平原の東にあるギルボア山脈に集めた。

北へ3日間進軍するあいだ、ダビデは何を考えていたのだろうか。今の窮地について思いめぐらせていたに違いない。戦いの渦の中で、自分は以前の部下たちを殺さざるを得ないのだろうか。ヨナタンもその中にいるのだ！だめだ！自分には同胞を殺すことは絶対にできない。しかしまた、もしダビデの兵士たちがペリシテに向かって武器を向ければ、ツィケラグの家族はどうなるのだろうか。むごい殺戮がきっと起こって、最後の避難場所を失うだろう。だめだ、それもできない。それなら、どんな道があるのだ？

ダビデの兵士たちも同じ葛藤を思いめぐらしながら、黙ってリーダーのあとを歩いていました。軍勢の最後尾を歩いていたのは、最近、自領を離れてゲリラ隊に加わったマナセの男たちでした（1歴 12）。ダビデの部下たちが、亡命生活がもうすぐ終わることを知ってさえいれば……。私たちも同じです—私たちの信仰の前途も時に暗くなる必要があります。そうでないと、なぜ信仰が必要なのですか？確かに、この時点ではダビデと兵士たちの道は真っ暗でした。彼らは、主がなんらかの解決を用意してくださることに望みをかけるしかなかったのです。

戦争の結果についての心配は、ダビデの心に重くのしかかった。彼はペリシテ軍の強さを知っていたからだ。サウルは 70 歳、本当に戦えるのか？ イスラエルが負けて、ペリシテに占領されたら？ 敵の兵士たちは、敗戦相手によくむごいことをする。特に女たちに。

ダビデが知らないことだったが、困難に直面したサウルは亡くなった預言者サムエルの助言が欲しくて、心霊術に頼ることを決心した。このことを知っていたら、ダビデの心配は増していただろう。心霊術の結果はサウルに大変な恐れを与えた。そのため、彼は統率力も失くしてしまった。

ダビデの詩篇 31 は、もしかしたら、このアフЕКへの旅のことだったかもしれません。ダビデの子も 1000 年後、十字架に掛けられたときにこれを引用しておられます。

主よ。私はあなたに身を避けています。

私が決して恥を見ないようにしてください。

あなたの義によって、私を助け出してください。

私に耳を傾け、早く私を救い出してください。

私の力の岩となり、強いつりでとなって、

私を救ってください。

あなたこそ、私の巖、私のとりです。

あなたの御名のゆえに、

私を導き、私を伴ってください。

私をねらってひそかに張られた網から、

私を引き出してください。

あなたは私の力ですから。

私のたましいを御手にゆだねます。

真実の神、主よ。

あなたは私を贖い出してくださいました。(詩 31 : 1-5、参ルカ 23 : 46)

主はダビデの叫びを聞いて、救いに来られた。アフЕКに到着してから、ペリシテの領主 4 人が、ダビデが軍勢のあとから行軍してきたことに気付いた。彼らは自分たちの見たことが信じられなかった。アキシユは最前線で戦うのに、外国人の軍隊を頼りにするほど間抜けなのか？ これは、ゴリヤテに勝ったのでイスラエルの女たちが歌にした、あのダビデではないか？ とんでもない！ダビデを戦いに加えないで、ただちに来たところへ戻すべきだと彼らは主張した。

サムエル記はこの状況を目撃者の目で、詳しく鮮やかに描いています。預言者ガドが、筆記者だったに違いありません。次の記録を書いているとき、彼は面白がっていたように感じます。

アキシュはダビデを呼び出して言った。“「主は生きておられる。あなたは正しい人だ。私は、あなたに陣営で、私と行動を共にしてもらいたかった。あなたが私のところに来てから今日まで、私はあなたに何の悪いところも見つけないから。しかし、あの領主たちは、あなたを良いと思っていない。だから今のところ、穏やかに帰ってくれ。ペリシテ人の領主たちの、気に入らないことはしないでくれ。」ダビデはアキシュに言った。「私が何をしたというのでしょうか。私があなたに仕えた日から今日まで、このしもべに何か、あやまちでもあったのでしょうか。王さまの敵と戦うために私が出陣できないとは。」アキシュはダビデに答えて言った。「私は、あなたが神の使いのように正しいということを知っている。だが、ペリシテ人の首長たちが、『彼はわれわれといっしょに戦いに行ってはならない。』と言ったのだ。さあ、あなたは、いっしょに来たあなたの主君のしもべたちと、あしたの朝、早く起きなさい。朝早く起きて、明るくなったら出かけなさい。」”(1サム 29：6-10)

大きな安堵と感謝とともに、ダビデと兵士たちはツィケラグへ引き返す3日間の旅をした。

逃亡の日々 最後の試練

その一週間、ツィケラグの家族たちは無防備だった。先の荒れ野への急襲では、ダビデは女や子供を守るために兵士を幾人か残していたが、今回、アキシュ王はその手はずをすることを許さなかった。村を離れている間中、ダビデや兵士たちの思いはツィケラグに残してきた愛する者のことに、絶えず戻っていったに違いない。何か危険なことが起こってはいないだろうか。

しかし、兵士がいないときに恐ろしいことが町を襲った。略奪で生活しているどう猛な流浪の民、アマレク人がらくだに乗って砂漠からやってきて、ツィケラグを急襲したのだ。彼らはすべてを奪い、家を焼き、捕虜として女子供を全部さらって行った。

帰還した兵士たちの受けた衝撃は、言葉で言い表せないほどだった。男たちは捕虜がどんな目に遭うか、よく知っていた。奴隷か情婦かという、つらい運命が待っているのだ。打ちのめされたゲリラたちは、二度と愛する者に会えないものと思った。愛しい者たちが殺されたり、強姦されたりすることを考えて、男たちは苦しんだ。

“ダビデも、彼といっしょにいた者たちも、声をあげて泣き、ついには泣く力もなくなった。”(1サム 30：4) 衝撃が強くて耐え難いほどだった。これが起こったとき、神はどこにおられたのだ。神は私たちを愛しておられるのか、憎んでおられるのか？神を呪って死ぬしかないのか？この時、そんな思いと恐れが、ダビデの部下たちを満たしたに違いない。

この時、彼らの若いリーダーはどうだったろう？彼はどう反応したのだろう。彼の兵士たちは主への恨みを叫んだかもしれないが、ダビデはそうしなかった。聖書には、彼が神について、また神に向かって悪い言葉を使うところは一カ所もない。確かに彼は泣き、嘆き悲しみ、詩篇の中で「なぜですか」と訴えているが、主を呪うことはなかった。

この場合、泣くことはゲリラたちとリーダーには、つらさを解放する最良の方法でした。ダビデは部下たちに嘆きを隠そうともしませんでした。彼にとって涙は弱さの表れではありません。聖書の多くの偉大な英雄たちは、みんなの前で存分に泣いたり叫んだりしています。ヨセフ、ダビデ、エレミア、ペテロ、パウロ、そして救い主ご自身。聖書の中には、真の男は涙を見せないという考えはありません。神は私たちの感情をお造りになりました。それは表現されるためにあるのです。

状況はすでに耐え難いところまで迫った。しかしさらにまた悲劇が起こった。それはダビデを完全に打ちのめした。やけになった兵士たちが、つらい思いを上官に向け出したのだ。“ダビデは非常に悩んだ。民がみな、自分たちの息子、娘たちのことで心を悩まし、ダビデを石で打ち殺そうと言いだしたからである。”（1サム 30：6） 非難がダビデに投げつけられた—アキシュについてあの戦争に行ったのは、本当に必要だったのか？その代わりに山へ逃げるべきだったのではないか？どうして・・・どうして・・・？

男たちはダビデに投げ付けようと、石を拾い始めた。彼らの激しい行動は、悲惨な攻撃を受けたことからすると、理解できる。とはいえ、それはダビデにとって非常に辛いことだったに違いない。そのときまでは、彼は部下の忠誠を 100 パーセント信じていた。以前は、兵士たちはリーダーを偉大な英雄だと思い、いつでも彼のために死ぬ意思を表していた。仲間意識は強かった。戦友を戦場に置き去りにしなかった。しかし今、ダビデを支える人がみな消えてしまって、彼はひとり取り残された。いや、完全にひとりではない。彼のそばには誠実な友が一人、残っていた。主、ご自身だ。もう一度、ダビデは苦悶の中で、彼の見えない友に向き直った。聖書は“ダビデは彼の神、主によって奮い立った。”（1サム 30：6b）と述べている。

結局信仰とは、困ったときやつらいときに主に向き直すことにほかならない。ダビデが祭司エブヤタルに聖なる石を出してくるよう頼んだことは、彼の信仰の表れだった。この方法で、彼はアマレク人を追うべきかどうかを神に尋ねた。ご自分に向き直るのを待っておられた主は、すぐにお答えになった。“追え。必ず追いつくことができる。必ず救い出すことができる。”（1サム 30：8b）

それを聞いたダビデはもはやためらわなかった。彼にはまだ、広大な砂漠の中で、どうやってアマレク人を見つけ戦うか、考えつかなかった。彼は、その流浪の民が完全に武装していること、3日前に出発していること、彼の兵隊より数で大きく勝っていることを知っていた。ダビデの疲れ

切った兵士たちが、らくだに乗ったどう猛な砂漠の戦士に歩いて追いつくことなど、どうやればできるのだろう。もし追いついても、はたして彼らを打ち負かせるのか？人間的には不可能のように思える。しかしダビデは主からの約束を受けたので、それをもとに部下たちをなだめることができ、彼らはダビデを殺すことを止めにした。

すでに、ゲリラたちは 200 キロの距離を歩いていた。その上に家族が奪い去られたという酷い衝撃を受けたので、彼らには少しの力しか残っていない。そのような中で、流浪の民の領域へ行くために南の砂漠の方角に向かうことになった。

ツィケラグから 20~30 キロのところのベソル川で、最初の問題が起こった。²⁶峡谷を下ってまたよじ登るのは、まして疲れ切った兵士には不可能だった。それで、弱っている 200 人が川の土手に残り、少なくなった軍団が追跡を続けた。

人里離れたところで、ダビデの部下が死にかけた男を見つけた。水と干しぶどうの菓子で生き返った男はエジプト人で、アマレク人の奴隷だったが、病気のために置き去りにされたと話した。彼はツィケラグの虐殺の目撃者で、流浪民が宿営している場所を知っていた。そのエジプト人は、元の主人のところに戻さないという条件で、ダビデの一团をそこへ案内することになった。

ダビデと兵士たちは不意を突いて、アマレク人の宿営に襲いかかった。そして虐殺が繰り広げられた。若い流浪民 400 人が逃げたが、ダビデたちは、同胞をみんな救うことができた。女たち、子どもたち全員、ひとりも欠けず、だれも負傷しないで。報償として、ダビデの軍勢はアマレク人が集めていた戦利品をすべて奪い取った。無数の牛、羊、山羊など。焼き払われたツィケラグの町に戻る道では、彼らの喜びが大きかっただろう。

ベソル川まで引き返したところで、新たな問題が起こった。疲れたために戦いに加われなかった者に、戦利品をどれだけ分けるか？「逃亡者」は、妻や子のほかには何ももらえないはずだと言う兵士たちがいたが、ダビデはここで再び優れた統率力を発揮した。すぐに彼はその状況に聖書を当てはめた。“「兄弟たちよ。主が私たちに賜った物を、そのようにしてはならない。主が私たちを守り、私たちを襲った略奪隊を私たちの手に渡されたのだ。だれが、このことについて、あなたがたの言うことを聞くだろうか。戦いに下って行った者への分け前も、荷物のそばにとどまっていた者への分け前も同じだ。共に同じく分け合わなければならない。」その日以来、ダビデはこれをイスラエルのおきてとし、定めとした。今日もそうである。”（1サム 30：23-25、参；民 31：26-、ヨシ 22：8）

²⁶ (26) ベソル川は、ネゲブを横切ったところでガザから地中海に注いでいる。

このようにして、神の民の大敵アマレク人が討たれ、彼らに対して燃え上がっていた主の怒りは鎮まった。サウルがし残した使命を、ダビデは果たした。²⁷その上、戦利品が膨大だったので、ユダヤの荒れ野に住む親族に感謝をこめた返礼をすることができた。彼らは8年という長い間、気前よくダビデと兵士たちを養ってくれたのだ。

サウルとヨナタンの死

ツィケラグでの数日後、アマレク人の伝令が北からダビデの宿営にたどり着いた。髪には泥がはねあがり、着物は裂けているという有様だった。²⁸ダビデが恐れていたように、ペリシテがイスラエルに完全に勝利したのだ。それだけではなく、王と3人の息子が戦いで死んだという。

そのアマレク人は、ダビデに良い知らせを持ってきたつもりだったが、驚いたことに、ゲリラ隊長が服を引き裂いて泣き出すのを見た。知らせはダビデを心底まで打ちのめした。サウルが死んだ？ヨナタンも死んだ？うそだ！本当のはずがない！彼ら—ダビデとヨナタンは一緒にイスラエルを治めるはずだったではないか。それなのに、友が逝ってしまった。永久に行ってしまった。自分はもう二度と彼の顔を見ることも声を聞くこともできないのだ。

ダビデはその使者に、もっと詳しい話をするようにと言った。出来事は本当に彼が説明した通りだったのか？そのとおり。使者は自分の目でサウルの死を目撃しただけでなく実は、彼がサウルにとどめを刺したのだった。証拠として、彼はサウルの王冠を持ってきていた。使者は、褒美が欲しかったのだが、それは間違いだった。ダビデは10年間、神が油そそがれたサウル王に刃向かうことを拒んできた。だれかが刃向かったとしても、その不運な男に死の宣告をした。²⁹

ヨナタンは、悲惨な最後まで父親の側に残って同じ戦いで死んだ。槍が、または矢が心臓を貫く直前、彼は最後に何を考えたのだろう。おそらくこうだろう。「兄弟ダビデよ、君はひとりで国を治めなければならない。私は君の次官にはなれないんだ」。それとも、「お互いが戦い合うことにならなくて、人生を過ごせた」と安堵したのだろうか。それとも、幼くして孤児になる一人息子のことと、将来も子孫を守ると、ダビデと交わした契約を思い出していただろうか？ダビデがそれを知ることができさえすれば！

²⁷ (27) アマレク人は、荒れ野のあの旅以来イスラエルの喉元にいるので、神が怒りを燃やしておられた（申25：17－19）。サウルは、彼らを滅ぼすことを主から任命されたが、自分の罪のせいで実現できなかった。

²⁸ (28) 明らかに、この男は砂漠にいるほかのアマレク人が働いた略奪のことは、何も知らなかった。

²⁹ (29) 1サムエル31には、サウルの死は自殺だったと書いてある。使者は、王が死んでいるのを見つけて報酬をもらうために話をこしらえたのかもしれない。この出来事は聖書は安楽死を受け入れないということを行っている。

ダビデは、逃亡生活が終わったというのに、悲しい涙を流した。悲嘆の中で、彼はサウルとヨナタンのことを嘆いた歌を作った。この“弓の歌”で、友にだけでなく、ヨナタンの父にも英雄としての賛辞を贈った。このことからするとダビデは、サウルがどんなふうに関自分の青春時代を損なったか、妻から引き離し、10年という

長い間、自分を山の中の獣のように追い回したことなどは、まるで覚えていないかのようだ。しかもなお、ダビデの悲しみに満ちた言葉は賛辞で飾られている。明らかに、彼はサウルの全てを赦し、恨みはいだいていない。ダビデの歌を味わってみよう。

弓の歌

イスラエルの誉れは、
おまえの高き所で殺された。
ああ、勇士たちは倒れた。
ただ、殺された者の血、
勇士たちのあぶらのほかは。
ヨナタンの弓は、退いたことがなく、
サウルの剣は、むなしく帰ったことがなかった。
サウルもヨナタンも、
愛される、りっぱな人だった。
生きているときにも、
死ぬときにも離れることなく、
わしよりも速く、雄獅子よりも強かった。
ああ、勇士たちは戦いのさなかに倒れた。
ヨナタンはおまえの高き所で殺された。
あなたのために私は悲しむ。
私の兄弟ヨナタンよ。
あなたは私を大いに喜ばせ、
あなたの私への愛は、
女の愛にもまさって、すばらしかった。(2サム1:19、22-23、25-26)

その日までは、ダビデはヨナタンが同じ空に下で動き、呼吸し、そして自分のために祈ってくれていると感じていることで慰められていた。いつか友と再会して、長く離れていた間の出来事を話し合うという期待が、ダビデの喜びだった。でもヨナタンは死んだ、死んでしまった！彼の遺体は辱

められ、首を切られた体がベテ・シャンの城壁につるされている。ダビデがひどく泣いたのは当然のことだった。

同性愛ではなく

ダビデの生涯を描くハリウッド映画が、新しく作られる場合のことを、ちょっと想像してみてください。彼とヨナタンの関係は同性愛以外のものとして描かれるでしょうか？いいえ、そんなことは絶対にありません。今日の西洋では、親しい友達関係は性的なことを含むのが当然とする傾向があります。人が、性的欲求と無関係な深い友情があるという理解を失ってしまうのは、本当に悲しいことです。心の友はもう無くなったのでしょうか？自分を愛するように相手を愛する無性の関係はありえないのでしょうか？

旧約聖書の文化は第三千年期の、性に溢れる西洋文化とは全く違います。イスラエルでは、同性愛関係はほとんど知られていない概念でした。異教徒には常習でしたが、神の民は嫌悪していました。モーセの律法はこういう関係を厳しく非難しています。“あなたは女と寝るように、男と寝てはならない。これは忌みきらうべきことである。・・一あなたがたより先にいたこの地の人々は、これらすべての忌みきらうべきことを行なったので、その地は汚れた。一あなたがたがこの地を汚すことによって、この地が、あなたがたより先にいた国民を吐き出したように、あなたがたを吐き出すことのないためである。”（レビ 18：22、27、28）

聖書によると、偶像礼拝と勝手な性認識は、それこそ主がカナン人を国から追放された理由だったのです。預言者たちは、もしそれに相当する罪を犯せばイスラエルにも同じことが起こると、警告していました。みんながこのことを知っていました。性的嗜好は単に個人的な問題ではなく、国全体の命運に重大な影響を及ぼします。それは現代でも変わりません。

もし王子が義理の兄弟と同性愛関係にあったのなら、この関係は極秘のうちでしか成立しなかったでしょう。ほんのわずかでも疑われると、社会的、政治的両面での抹殺を意味します。それを限りにヨナタンもダビデも、イスラエルの王座に昇る夢を捨てざるを得なかったでしょう。もし彼らの同性愛関係の証拠が見つければ、二人は石撃ちの刑を受けたに違いありません。³⁰

³⁰ (30) 今日では、同性愛者の教会結婚式に反対する人が、なぜ死刑にも反対しないのかと問う人がいます。姦淫、殺人、親を罵る、同性愛関係、近親相姦、獣姦は旧約聖書では死に値する罪だというのは事実です。罪の報酬は死です。そのため、イエス様は十字架の上で死ななければなりません。しかしイエス様は、姦淫したことで捕らえられた女に石を投げつけようとした者たちに、「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい」（ヨハ 8：7）と言われました。これは、主から離れると、主の律法を破らない者はだれもない、ということをおられるのです。実際、私たちは皆、死に値します。自分の罪

しかしダビデとヨナタンが二人の関係をうまく隠して、だれにも知られなかったらどうだったでしょう。そうだとしたら、嘆きの中で誠実な愛の告白を詩に書いたダビデとは、ぴったりしません。“あなたの私への愛は、女の愛にもまさって、すばらしかった。”（2サム 1：26c）

ダビデがもし、ヨナタンとの同性愛の欲求とか関係を隠そうとしたのなら、こんなことは絶対に書かなかったでしょう。さらに、私たちはダビデの良心がどんなに繊細であるかは、サウルの上着を切り取ったことで、自分を責めていることからも見ました(1サム 24:6)。同じ人物が、昼も夜も心の中で大きくなっていく良心との闘いを覚えることなく、神の律法に反する関係を結ぶことができたでしょうか？

弓の歌は、国中に広がりました。この嘆きの詩を詠ったすべてのイスラエル人は、サウルが10年ものあいだ迫害していたのに、ダビデは彼に恨みを残していないと分かりました。さらにわかるのは、ダビデは王子と権力を争ったのではなく、ヨナタンを大切な兄弟だと思っていたことです。

ダビデが王国を求めたのではなく、王国が彼を求めたのです。³¹

を告白すること、それを十字架へ持って行くことで赦されるのです。そうしない者は皆、最後の審判で自身の死の宣告を受けなければならないでしょう。しかし私たちは、ホモ嫌悪とか同性愛を憎むこともまた、罪であることを覚えておかなくてはなりません。

³¹ (31)サムエル記の1と2は、最初是一个のものだった。紀元前3世紀に旧約聖書のギリシャ語訳で2部に分けられた。

3章 義なるイスラエル王

あなたは私の頭に油をそそいでくださいます。

私の杯は、あふれています。

紀元前 1010 年、ダビデは 30 歳になった。過去 10 年以上、彼は身を低く保ち、支持者たちが早く彼を王位に就かせようとするのを、思いとどまらせてきた。彼の 32 代目の子も、同じような経験をしたことが思い起こされます。5000 人に食べさせた奇跡のあと、人々はイエス様をイスラエルの王にしようとしたが、イエス様は受け入れられませんでした。

サウル王の死後、ダビデは王座に上るときが来たと思った。ほとんどの人々が彼を支持したが、王家が代わるのに反対の人々もいた。特にベニヤミン族は一族の絆が強く、サウルが死んだ後も彼の一家への忠誠心を持ち続けた。

サウルの首都ギベアとペリシテ領で過ごした数年間を除いて、宮廷から逃げ出して以来、ダビデは自分の一族であるユダの領内に隠れていた。その間、多くのユダの一族は彼とその英雄的行ないを知るようになって、秘かに彼を援助していた。今やダビデの逃亡生活は終わりを迎え、主は彼が祖先たちの町ヘブロンへ行くことをお許しになった。ほどなくユダの首長たちが集まって、彼に王の油を注いだ。

しかし、イスラエルの 10 部族がユダのこの動きに同調しなかったことに、おそらくダビデはがっかりしたことだろう。彼はこのことも受け入れて、神の時を待つしかなかった。すでに 15 年という長い間、神の約束が実現するのを待っていたのだから、もう少し待つぐらいどうということはない。このようなダビデの大らかさは、主への深い信仰と同様、周辺の人々に伝わった。結局、ダビデは二度目の即位まで、あと 7 年半、待つことになる。³²

戦争では、サウルの 3 人の息子が死んだが、4 人目の息子イシュ・ボシェテは生き残った。この王子がなぜ、父や兄弟と一緒に戦いに加わらなかったのか、分からない。もし 70 歳のサウルが戦えたなら、この 40 歳の息子に戦えないはずはない。この男には何かわからないところがある。もしかして、肉体的に弱かったのか、戦うことのできない病気かなにか、それとも素性のことで差

³² (32) ダビデがヘブロンでユダを統治したのは 2 年間ではなく、7 年間だったと主張する評論がある。もしそうならば、彼はエルサレムで全イスラエルを 33 年間治めたことになる。(New Bible Commentary) イシュ・ボシェテとダビデの統治は一緒にはならない。しかし、1 歴 29:27 を参照のこと。

し障りがあったのか。イシュ・ボシェテという名前は‘恥の男’という意味で、王位継承権の名簿から外されていたようだ。³³

サウルの従兄弟で彼の将軍アブネルは、イシュ・ボシェテを北の部族の王にしようと考えた。アブネルはダビデが神に選ばれていることを知りながら、計画を進めた（2サム3：17-18）。老練な最高司令官の彼は権力に貪欲だったので、イシュ・ボシェテの陰で10部族に君臨しようとした。ところが実際は、イシュ・ボシェテはヨルダン川の西岸と東岸のいくばくかの地域を支配しただけだった。イスラエルの他の部分はペリシテが占有していた。首都でさえギベアからヨルダンの東のマハナインムへ移された。

ダビデは最初にヤベシュ・ギルアデの人たちに、サウルとヨナタンの首のない屍を葬ってくれたことに感謝をあらわした。³⁴40年前、サウルがアモン人の過酷な支配から、ヨルダン川の向こうのその町を救ったのだが、町の人たちは彼がしてくれたことを忘れなかったのだ。

真夜中に、ヤベシュの男たちはベテ・シャンまで歩いて行き、城壁によじ登ってサウルとヨナタンの死体を下ろした。そして20キロほど遺骸を運んで、夜明け前、ヤベシュまで戻った。勇敢な男たちは腐った死体を焼き、その灰を大きなギョリュウの木の下に埋めた。儀式は正式な葬儀ではなかったが、少なくともサウルと息子たちは地に埋められ、野犬に食べられて終わることは避けられた。

ダビデは、ヤベシュ・ギルアデの勇気ある男たちに感謝を表した。このようにしてユダの新しい王は、前の王に仕えた人々に対してどのような悪意もないことを、全イスラエルに知らせたかったのだ。

内戦とアブネルの殺人

ダビデ家とサウル家の闘いは偶然に始まった。ダビデには戦争をするつもりはなかった。だから、彼の名前はこの出来事に関しての記録には出てこない。事実上、二人の将軍の間の妬みが原因だった。アブネル（サウル軍の司令官）とヨアブ（ダビデの甥、彼の司令官になることを目指していた）は、二つのグループの若者たちを一騎打ちさせようと企んだ。³⁵二人は双方が12人ずつ、15

³³ (33) サウルの息子たちについては、1サム14：49、31：2、1歴8：33を参照。イシュ・ボシェテの元の名前はエシュ・パール。息子はなかった。

³⁴ (34) 1歴10によると、ヤベシュ・ギルアデの男たちはサウルの3人の息子全部を埋葬した。

³⁵ (35) ヨアブ、アビシャイ、アサエルは、ダビデの姉ツェルヤの息子たちで、この後、イスラエルの歴史の中で大きな役割を果たす。明らかに、王は甥たちと同じ年頃だった。母のツェルヤはエッサイの娘ではなかった。母親の最初の結婚で生まれたと思われる。

年前にダビデがゴリヤテと対戦したように、それぞれ一対一で闘うように命じた。しかし、その結果はひどいものだった。24人全部が死に、屍がむごたらしく山となって積み上がった。

暴力の炎が燃え上がり、双方の軍隊はお互いを攻撃した。ユダが優勢で、アブネルはその同じ日の夕方には停戦を申し入れなければならなかった。闘いの最中に、後に大きな影響を与える事件が起きた。ダビデの姉ツェルヤの末息子アサエルが、敵軍の司令官を殺して手柄にしようとしたのだ。³⁶

“アサエルはアブネルのあとを追った。右にも左にもそれずに、アブネルを追った。アブネルは振り向いて言った。「おまえはアサエルか。」彼は答えた。「そうだ。」アブネルは彼に言った。「右か左にそれて、若者のひとりをつらえ、その者からはぎ取れ。」しかしアサエルは、アブネルを追うのをやめず、ほかへ行こうとしなかった。アブネルはもう一度アサエルに言った。「私を追うのをやめて、ほかへ行け。なんでおまえを地に打ち倒すことができよう。どうしておまえの兄弟ヨアブに顔向けができよう。それでもアサエルは、ほかへ行こうとしなかった。それでアブネルは、槍の石突きで彼の下腹を突き刺した。槍はアサエルを突き抜けた。アサエルはその場に倒れて、そこで死んだ。”（2サム2：19-23）

アサエルは戦闘中に兵士として死んだのに、ヨアブは弟の死のことでアブネルを終生赦さなかった。アサエルはベツレヘムの父の墓に葬られた。おかしなことに、彼の父親の名前は知られていない。聖書には一貫して、男たちに関してはダビデの甥のように、母親の名前が出てくるだけだ。ツェルヤはだれかの妻だったに違いないのに、聖書には夫の名前が書かれていない。なぜなのかはだれにもわからない。

聖書には、ヨアブの名前はダビデのヘブロンでの即位の後から出てくる。なぜ彼の兄弟たちのように、ダビデの逃亡時代からの勇士のリストに名前がないのだろうか（2サム23）。その理由として、初期のころヨアブはダビデの下士官に加わっていなかったからということも考えられる。若い叔父が、お尋ね者としてユダの山中をさまよっている間は、ヨアブは自分の人生を危ない目に賭けたくなかったのだろうか？彼はサウル側にいたが、階級が上がる見込みが出てきたときに、叔父の軍に加わったのかもしれない。これは単なる推測だが、たぶん当たっているだろう。

ある時イシュ・ボシェテは、アブネルが、亡父のそばめと関係したことで彼をなじった。アブネルは激怒して、操り人形の王の面前で怒鳴った。“今、私はあなたの父上サウルの家と、その兄弟と友人たちとに真実を尽くして、あなたをダビデの手に渡さないでいるのに、今、あなたは、あの女のことで私をとがめるのですか。”（2サム3：8）攻撃は最良の防御かもしれない。いずれにせ

³⁶ (36) 出てくる名前がややこしくなったら、巻末の五十音順の表を参照してください。

よ、アブネルは（罪があろうがなかろうが）イシュ・ボシェテにはうんざりしていたので、10部族全部を連れてダビデの側へ移ろうと思っていた。

一方ヨアブはダビデの司令官になりたかった。古株の将校アブネルの次のままでいることをいやがっていた。しかも彼は弟の死んだことで、アブネルを責めていた。そして12部族が団結する交渉が進められているあいだに、ついにヨアブは当のライバルを殺した。彼はヘブロンの方のところでアブネルを待ち受け、友達顔で抱擁するふりをして、槍を彼の腹に突き刺したのだ。アブネルの死とアサエルの死の大きな違いは、平和な時に殺されたか、戦争中に殺されたかである。だから、ヨアブは殺人を犯したことになる。

なぜ、新しく即位した王は、サウルを殺した者を罰したように、サウルの指揮官を殺した者を罰しなかったのだろうか。モーセの律法によれば、死罪にするべきだった。しかし驚いたことに、何もしなかった。ダビデが、甥をそのままにしておいたように、支配力の手綱を緩めたのは初めてのことだったが、これが最後ではなかった。殺人を罰するのが王の任務なのにそうしなかったので、イスラエルの多くの人々は、ダビデがアブネル暗殺にかかわったのだろうかかと不審に思った。

ダビデは彼の支持者にも反対者にも、暗殺でライバルを追い払ったと思われなくなかった。だからみんなの前でアブネルの死を悼み、彼の墓の前で声を上げて泣き、断食して墓碑を建てた。そしてヨアブを葬儀に参列させ、彼の背後にいて、恐ろしい言葉で呪った。“私にも私の王国にも、ネルの子アブネルの血については、主の前にとこしえまでも罪はない。それは、ヨアブの頭と彼の父の全家にふりかかるように。またヨアブの家に、漏出を病む者、らい病人、糸巻きをつかむ者、剣で倒れる者、食に飢える者が絶えないように。”（2サム3：28-29）

このことは、ユダの人々を喜ばせた。なぜなら自分たちの新しい王は、信頼するにふさわしいと確信したからだ。「我らのダビデ王は、暗殺や秘密の取引といったこととは無関係で、主の時と救いを待つだけの忍耐があるのだ」。

しかしヨアブは、公に罰せられなかったので、その後は好きに振る舞ってもいいのだと思った。二人の甥に関して、王はどうすることもできないと感じた。“この私は油そそがれた王であるが、今はまだ力が足りない。ツェルヤの子らであるこれらの人々は、私にとっては手ごわすぎる。主が、悪を行う者には、その悪にしたがって報いてくださるように。”（2サム3：39）こんな言葉は支配者らしくない。ダビデは国の指導者だったので、親族の振る舞いにも責任を負わなければならなかったというのに。結局はこの無抵抗の罪は、王にも彼の一家にも国全体にも、高くつくことになった。

ダビデの女たち

即位ののち、ダビデは二人の妻たちをヘブロンに連れてきて、それぞれに家庭を与えた。間もなくアヒノアムはアムノンという名の男の子を産んだ。美しい子供で、みんなが彼を王位の後継者として扱った。この物語の中で、これから何度か彼が登場することになる。ナバルの妻からダビデの妻となったアビガイルも、男の子を産んだ。名前をキルアブというが、1歴3:1の系譜ではダニエルになっている。彼についてはこの箇所には記述がないので、おそらく長くは生きていなかったものと思われる。

しかし間もなく、ダビデは二人の妻では満足しなくなったので、となりの国々の王たちに倣ってハーレムを作ろうと考えた。彼は美男子だったので、候補者はきっと数え切れなかっただろう。まず、ダビデは異教徒ゲシュルの王女マアカと政略結婚することにした。このアラムの小さな王国は、ガリラヤ湖の北東端、イシュ・ボシェテの首都の北に位置していた。おそらくダビデはイシュ・ボシェテがゲシュル王と同盟を結ばないようにしたかったのだろう。この結婚で生まれた子供がアブシャロムで、彼は聖書の中で一番の美男に成長した。

これで終わりではなかった。非難されることがなかったので、ダビデはヘブロンにいた7年間に、もう3人の妻を娶った。結局、1年おきに若い女がハーレムに加えられた。この妻たちはみんな、息子一人を産んだだけだった。ということは、後からの女たちは、1年くらい寵愛された後、ハーレムの単なる飾りになったということのようだ。

ハーレムの女たちは宮廷の中で、お互いにけんかするなどして怠惰な生活を送っていたことだろう。彼女たちは性的に欲求不満になって嫉妬しあい、もう一度妊娠したいと願って、王の訪れを狂おしく待っていた。ダビデは、性のこととは別に、この婦人たちと共有するものが何かあったのだろうか？ほとんどなかったようだ。おそらく、彼女たちといっしょに祈ることさえしなかっただろう。

周辺国と比べると、ダビデ王のハーレムはまだ控えめだった。しかし彼は隣国の宮廷に合わせるのではなく、主のみ言葉に従うべきだった。もう一人妻を迎えてもいいかどうか、ダビデは神に尋ねたことがあったらどうか？いや、なかったようだ。当時の風俗習慣が身に染みている彼にとって、ハーレムは些細なことに過ぎず、家来たちも当たり前だと思っていたようだ。また王が多くの子を欲しがっていたのも、一つの言い訳になっていたことだろう。

ここで、預言者ガドがなぜ、王に複婚のことで警告しなかったのだろう、という疑問が出てきます。祭司エブヤタルは、モーセの律法は王でも複婚を禁じられている（申17:17）という部分を、ダビデに読んで聞かせなかったのでしょうか？この点で、イエス様は先祖のダビデとは正反対

でした。神の御心であれば、男性は生涯一人の女性もなしで生きていけるということを、イエス様は示されました。

ダビデの物語は複婚の問題を、ほかにないほどはっきりと見せています。一人以上の妻を持っているなら、男たちの半分以上はそうするでしょう。一人の男に一人の女で十分でないのなら、何人だったら満足するのですか？ 限度はどれくらいですか？ ソロモン王や多くのドン・ファンたちの場合、1000人ほどの女性が彼らのものとなりましたが、終わりのころには彼ら自身も年を取って男らしさを失い、初めて限界が見えたのです。

ハーレムを持つような者は、不運にも、自制することを身につける必要がありません。自分を抑制することのできない男は、いつまでも成長しない部分があります。この点が、ダビデにも当てはまります。そうなのです。多くの妻をもったからといって、それで男が優れた支配者になったわけではありません。返って逆のことが起こったのです。

王になってすぐ、ダビデはサウルの娘ミカルに、彼のところに戻るよう強要しました。彼女は10年前、パルティエルという名前の他の男と結婚させられました。ダビデがこの要求をした理由は何だったのでしょうか？ 嫉妬からでしょうか、プライドでしょうか、それとも国民に自分や自分の力を誇示するためだったのでしょうか。たぶん、若い頃の恋愛に対する単純な懐かしさも混ざっていたでしょう。

この時アブネルはまだ生きていて、ミカルを最初の夫に戻すことに同意しました。ミカル自身がこのことについてどう思ったかはわかりません。おそらく、だれも尋ねることがなかったでしょう。しかし聖書はパルティエルの悲痛な思いを描写しています。“その夫は泣きながら彼女についてバフリムまで来た。”（2サム3：16）アブネルはオリーブ山の麓から、妻がいなくなった家にパルティエルを帰らせました。ミカルが、心の底から自分を愛していたパルティエルを見たのは、おそらくそれが最後でした。

ミカルはパルティエルのところに留まって、唯一人の妻としての立場に甘んじた方がいいという考えが、どうしてダビデの中に浮かばなかったのでしょうか。それはおそらく、ダビデがサウルに2倍の結納を払っていたからだと思われます。

ヘブロンに近づくと、ミカルの胸は高鳴りました。どんな再会になるのだろうか？ 10数年前、二人は数か月間夫婦として暮らし、お互いに誠実に愛し合っていました。その後、二人の間に数人の女と一人の男が割り込んだのです。（これはダビデが王になった初期のころだったので、彼のハーレムは比較的小さかったのです。）

ミカルは王の娘で誇り高かったので、2人目、3人目の妻と、夫を共有することは受け入れられませんでした。そのような状況で、夫と妻の思いが一致するのはほとんど不可能です。ダビデはミカルを、単にハーレムの飾りとして取り戻したのかもしれませんが。その後、彼らの間には性的な関係はなかったようです。³⁷

いずれにせよ、彼女はダビデの子を身ごもりませんでした。不幸なミカルは、夫のハーレムがどんどん大きくなっていくを見ながら、残りの人生を過ごさなければならなりません。彼女が年を取るに従って気難しくなっても、無理のないことです。

頂点にいる男は孤独です。そばにいて、順風のときも逆境のときも、重荷を分かち合ってくれる忠実な妻がいる支配者は幸せです。ダビデはそのような関係を知りませんでした。‘花から花へ飛び回る’男はだれも同じです。もしダビデに、心の底まですべてを分かち合う妻が一人だけいれば、彼の人生はどんなに違ったものになっていたことでしょうか。安定した家庭を得ることができたはずですが。しかし、徐々に膨らんでいくハーレムには、ダビデの心の深い渴望を満たすことのできる女性は、一人もいなかったとわかります。哀れな王！彼は大きくなっていくハーレムの中でひとりぼっちでした。

今日では、花から花へ飛び回るのには実に簡単になりました。インターネットでポルノのところをクリックするだけ。なんと恐ろしい悪魔の罠！ポルノは、見るだけだから無害だというものではありません。それは、ハーレムがダビデに与えたのと同じ害を男性にもたらします。ポルノを習慣的に見るようになると、満足するためにどんどん度が増していきます。ポルノを見る男性にとって、女性は単なる消費財で、比較の対象でしかないのです。コンピューターの中で、余るほど女性を利用できると知ってしまうと、一人の女性だけで満足することはひどく難しくなります。

では、ダビデの女性に関する屈折はどこから来るのでしょうか？エッサイの妻は最初の夫との間に二人の娘をもうけ、その後二番目の夫で8人の息子を産みました。末息子のダビデが生まれたときには、彼女はかなりの年になっていたはずですが。

エッサイの家庭生活は、妻の前夫の娘たち、ツェルヤとアビゲルに始終かき回されていました。どういうやり方か、ツェルヤは弟を自分の支配下に置いていました。ダビデは戦場では勇者ですが、家庭の中では弱者でした。彼はゴリヤテを恐れませんでした、姉は怖かった。死をもものもしない戦闘の英雄が、どういうわけか自分の家族のことでは気弱でした（1列 1：6）。その結果

³⁷ (37) モーセの律法は、前に妻であっても、彼女が別の男と結婚していたら、性関係を持つことを禁じている。申命記 24：1-4 参照

として、彼の兄弟姉妹、甥たちそして息子たちまでが、宮廷の事に余計な口出しをするようになったのです。

ダビデに弟コンプレックスがなかったら、どんなにすばらしい英雄になっていたことか！

全イスラエルの王となるダビデがユダを7年ほど統治していた時、二人の荒くれた様子の男たちがイシュ・ボシェテの首を手にとって、ヘブロン宮廷へ乗り込んできた。彼らは明らかに、ユダの王が競争相手の死を喜んで、たっぷり褒美をくれると思っていたようだ。

ところが、ダビデはサウルの息子を殺した者たちに怒り狂った。“私のいのちをあらゆる苦難から救い出してくださった主はいきておられる。かつて私に、『ご覧ください。サウルは死にました。』と告げて、自分自身では、良い知らせをもたらしたつもりでいた者を、私は捕らえて、ツイケラグで殺した。それが、その良い知らせの報いであった。まして、この悪者どもが、ひとりの正しい人を、その家の中の、しかも寝床の上で殺したときはなおのこと、今、私は彼の血の責任をおまえたちに問い、この地からおまえたちを除きさらないでおられようか。”（2サム4：9-11）殺人者たちは死罪となり、イシュ・ボシェテにはふさわしい葬儀が行われました。

ついにサウルの直系は、ヨナタンの息子メフィボシェテ一人となりました。でも彼は、2つの理由で王の継承者ではありませんでした。若いこと（10代前半）と、足が不自由だったことです。そこでイスラエルの全長老がヘブロンダビデのもとに来て、主の前に彼と契約を結び、ダビデに油を注いでイスラエルの王としました（2サム5：3）。

老預言者サムエルが羊飼いの少年にイスラエルの王として油を注いでから、いつしか20年ほどが過ぎていました。そして今、彼は3度目に王と宣言されたのです。おめでとう、ダビデ！あなたには神の時を待つ忍耐がありました。待っただけの値打ちはあったでしょう？良心に責められることのない状態で統治を始めるというのは、すばらしいことです。あなたはサウルから王国を奪い取ったのではなく、王国があなたを求めたのだということ、自分の目で見ることができます。

この3度目の即位は、国を挙げての大規模な祭りとなった。12部族全部から何万人もがご馳走を持ってヘブロンに集まった。その上に近くの部族は3日間の祝宴に十分なだけの食料を提供した（1歴12：40）。その後、ダビデは北と南の部族を一つにする、最強の要となった。

この3度目の戴冠のときダビデは37歳で、男の最高の時だった。今や自分が、イスラエルが一致して賞賛し愛する対象であることをはっきり理解して、彼は実に幸せだった。しかし、それより肝心なことは、ダビデが自分に王冠を与えたのが誰だかを、知っていたことだった。その後も、重

責を担っている間中、このことは忘れなかった。彼が自分で王座に上ったのではなく、主ご自身がなされたのだ。その時ダビデは次の詩を書いた。

主よ。王はあなたの御力を、喜びましょう。
あなたの御救いをどんなに楽しむことでしょうか。
あなたは彼の心の願いをかなえ、
彼のくちびるの願いを、退けられません。セラ
あなたは彼を迎えてすばらしい祝福を与え、
彼のかしらに純金の冠を置かれます。
彼はあなたに、いのちを請い求めました。
あなたは彼に、
とこしえまでの長い日々を与えられました。
御救いによって彼の栄光は、大きい。
あなたは、尊厳と威光を彼の上に置かれます。
あなたは、とこしえに彼を祝福し、
御前の喜びで彼を楽しませてくださいます。
まことに、王は主に信頼し、
いと高き方の恵みによってゆるがないでしょう。(詩 21 : 1-7)

ペリシテとの戦いとエルサレム征服

ついにダビデは、イスラエルの全 12 部族の王となった。しかしそれで平穩になったというわけに
いかなかった。ペリシテはダビデがユダだけを統治していた 7 年間は放っておいたが、イスラエル
が統一されると、話は別だった。大きくなった国は、彼らにとって脅威となったからだ。“ペリシ
テ人は、ダビデが油をそそがれてイスラエルの王となったことを聞いた。そこでペリシテ人はみ
な、ダビデをねらって上って来た。ダビデはそれと聞き、要害に下って行った。”(2 サム 5 :
17)

ダビデ王はアドラムの、前にも使った砦に、自分の軍隊を集めることにした。戦いが二度あった
が、イスラエルは主から具体的な指示を受けて、二度とも圧倒的な勝利を収めた。ペリシテの領
主たちは降参し、そののち彼らの侵攻と脅威は止んだ。このようにしてペリシテの問題は解決し
た。³⁸

³⁸ (38) サムエル記には、ペリシテとの戦いの記述は 2 か所しかない。(2 サム 21 : 15-22、23 : 9-17) その
中で、4 回の戦いに巨人が参加したと記されている。

このころに、ガテと周辺の村はイスラエルに占領された。そのときアキシュ王は、自分は皮肉にも、ダビデの家来なのだと気づいた。

ペリシテと戦っているとき、ダビデの主導者としての力が明らかになった、伝説的な出来事があった。“そのとき、ダビデは要害におり、ペリシテ人の先陣はそのとき、ベツレヘムにあった。ダビデはしきりに望んで言った。「だれか、ベツレヘムの門にある井戸の水を飲ませてくれたらなあ。」すると三人の勇士は、ペリシテ人の陣営を突き抜けて、ベツレヘムの門にある井戸から水を汲み、それを携えてダビデのところに持って来た。ダビデは、それを飲もうとはせず、それを注いで主にささげて、言った。「主よ。私がこれを飲むなど、絶対にできません。いのちをかけて行った人たちの血ではありませんか。」彼は、それを飲もうとはしなかった。”（2サム 23：14-17）

この出来事で、ダビデがどれほど人気があったかがわかる。元ゲリラ兵たちは、イスラエル軍で主導的地位に上げられて、自分たちの王を誰よりも愛していた。だから上記に登場した3人は、ダビデの渴きを癒すためには死ぬ覚悟だったのだ。その彼らへの感謝の表し方が、ダビデの人気をさらに増したにちがいない。

ダビデは神への信仰によって、羊飼いの少年時代にライオンや熊と戦ったときから今まで、全ての戦いに勝った。勝利のとき重要なのは、力ではなく主の助けだった。ダビデにはそのことがよく分かっていて、自分の軍人としての成功を神の栄光としていることが、次の詩でよくわかる。

この神こそ、私の力強いとりで、
私の道を完全に探り出される。
戦いのために私の手を鍛え、
私の腕を青銅の弓でも引けるようにされる。
こうしてあなたは、御救いの盾を私に下さいました。
あなたの謙遜は、私を大きくされます。
あなたは、戦いのために、私に力を帯びさせ、
私に立ち向かう者を私のもとにひれ伏させました。
また、敵が私に背を見せるようにされたので、
私は私を憎む者を滅ぼしました。（2サム 22：33、35-36、40-41、参照 詩 18）

ペリシテとの戦いの間、ダビデはまだヘブロンに住んでいた。しかし彼はベツレヘムにいた少年のころから‘エブス人の丘’を見て憧れていた。イスラエル人はその丘の歴史を知っていた。祖先の時代、そこにはシャレムという町があって、アブラハムはその王から祝福を受けたが、その後彼は神の試みに遭って、その山の上で息子を犠牲にする祭壇を築いた。後に、町の名前はエルサレ

ムと変えられた。ヨシュアはその町をベニヤミン族のものにするつもりだったが、彼らはそこを征服できなかったのだ。

ダビデは北と南の部族の間にあるこの山が、戦略的に重要だということがわかっていた。エブス人の丘は、神の住まいのある首都とするのに、素晴らしい地になるだろう。主はモーセに、神の名前は約束の地だけに留まると言われた（申 12：4-7）。他の国々には、生け贄を捧げる丘や神殿の場所がたくさんあったが、主の民にとってはそうであってはならなかった。

はたして、鉄壁のシオンの砦をイスラエル人のものにできるだろうか？だが、ダビデはペリシテ戦の直後にエルサレムを攻撃して、ヨシュアが失敗した所で成功した。ダビデ軍がやすやすと攻撃できたのは、明らかに、町の水利設備の弱点を突いたからだ。彼は、水路という隠しトンネルを探り当て、そこを通過して難攻不落といわれるシオンの要塞まで入ったと思われる。町を陥落させたとき大喜びして、ダビデはエルサレムを祝福する詩を書いた。

エルサレムよ。

私たちの足は、おまえの門のうちに立っている。

エルサレム、それは、

よくまとめられた町として建てられている。

そこに、多くの部族、主の部族が上って来る。

イスラエルのあかしとして、

主の御名に感謝するために。

そこには、さばきの座、

ダビデの王座があったからだ。

エルサレムの平和のために祈れ。

「おまえを愛する人々が栄えるように。

おまえの城壁のうちには、平和があるように。

おまえの宮殿のうちには、繁栄があるように。」（詩 122：2-7）

エルサレム陥落に際して、ヨアブは全イスラエル軍の司令長官になった。それは行きがかり上のことだった。“ダビデは言った。「だれでも真先にエブス人を打つ者をかしらとし、つかさとしよう。」ツェルヤの子ヨアブが真先に上って行ったので、彼がかしらとなった。”（1歴 11：6）

ヨアブは誰もが認める勇敢な男だったが、法に逆らってサウルの指揮官アブネルを殺した。それが理由で、おそらくダビデは姉の息子を主要な将官にするつもりはなかったのだ。しかし、王として

の面目を失いたくなかったので、約束を果たさざるをえなかった。そこでヨアブは重要な権力の地位に就いて、続く 30 年間、揺るぎない支配力を振るった。³⁹

ツロの王ヒラムは、王になったダビデに最初に使者を送った外国元首だった。また彼は、レバノン杉材と世界に知られた名大工や名石工を、ダビデの宮殿建設を援助するために送った。イスラエルはその返礼にツロに食べ物を売り、商人が国内を自由に通行できる許可を与えた。ヒラムとダビデは生涯同盟を結び、お互いに武力攻撃することはなかった。

当初、ダビデはシオンの要塞に住んでいたが、間もなく、立派な杉の宮殿が出来上がり、彼と家族はそこへ移って行った。宮殿は、王室は言うに及ばず、彼の増え続けるハーレムと子供たちに十分な広さだった。⁴⁰続いて、王と軍司令官は、大きくなっていく新しい首都エルサレム整備に熱意を注ぎ、シオンの要塞の外側にも広げようとした。イスラエルの支配を受け入れたエブス人たちは、町に留まることが許された。

このようにして、主はご自分の名前のために町を選ばれました。赤ちゃんのイエス様が生後 40 日のときに連れてこられたのが、この町でした。主は地上での命が最後というときここに來られて、町のために涙を流されました。主が十字架に掛けられたのは、この城壁の外でした。そしていつか主はこの町へ勝利者として戻られ、そのあと新しいエルサレムが、天国から新しく創られた地上へ降ります。預言者イザヤの言葉が成就するのです。“そこに住む者は、だれも「私は病気だ。」とは言わず、そこに住む民の罪は赦される。”（イザ 33：24）

契約の箱の場所

サウルは契約の箱にはあまり興味を示さなかった。ただ一度だけ、彼はそれを一種のお守りとして、戦場に持って行った（1サム 14：18）。神の箱には、主が十の戒めを指で書いてモーセに与えられた、2枚の石の板が入っていた。贖いの日には、大祭司によって、生け贄の血がその覆いに振りかけられた。

³⁹ (39) 町の東に、今もヨブの井戸がある。ある考古学者によると、その名前は元々「ヨアブの井戸」で、ここからヨアブが侵入して町を陥落した。

⁴⁰ (40) 最近のことだが、2009年にイスラエルの考古学者エイラ・マゾルが、3000年前の宮殿の基礎をエルサレムで発見し、それはダビデの宮殿跡だと推測した。ダビデとソロモン時代のもとのされる陶器の破片が、この考古学の地所から掘り出された。その時代には、最近まで表面に表れなかったが、考古学的に刺激的な成果がある。聖書以外で、最初にダビデの名前が出てきたのは、北イスラエルのダンの発掘だった。小さな石の板に、「ダビデー家」を征服したと、だれかが自慢して書いていた。ユダヤ人の古い書類の中には、もちろんダビデの名前はたびたび出てくる。

しかし神の箱は今、キルヤテ・エアリムの民家にあった。サムエルが若いころに、ペリシテ人が仮小屋を焼き払ったとき、そこに残されたのだ。その後、サムエルは 20 年間裁き人として働き、サウルは 40 年間、王であった。ダビデ統治の初期の年月がこの数字に加えられると、神の箱の‘バビロン捕囚’が 70 年ほど続いたことになる。

そのように、イスラエル人は長い間、罪の贖いのための場所も手段もないままだった。彼らはどうしていたのだろうか？生け贄はいろんな所で献げられたが、贖罪の大事な日を祝うことができなかった。しかしダビデは、当時のイスラエル人のほとんどが思っていなかったことを理解していた。主を礼拝するのは、どこでも、いつでも、どんな方法でも人間の自由にしていけないのではない、ということだ。主はご自分が約束された場所にだけおられる、つまり恵みの手段の中におられる。⁴¹

エルサレムを落としたあと、ダビデは神の箱を都に運んでこようと決めた。優れた支配者である彼は、人々をその事業に参加させるため、全司令官や他のリーダーたちを集めて相談した。ダビデは一同を励まして言った。“「もしも、このことが、あなたがたによく、私たちの神、主の御旨から出たことなら、イスラエル全土に残っている私たちの同胞にいっせいに使者を送ろう。彼らのうちには、放牧地のある町々の祭司やレビ人もいる。彼らを私たちのもとに集めよう。私たちの神の箱を私たちのもとに持ち帰ろう。私たちは、サウルの時代には、これを顧みなかったから。」すると全集団は、そうしようと言った。すべての民がそのことを正しいと見たからである。”（1 歴 13：2-4）

当時の最も重要な生け贄の祭壇は、ベニヤミンの領域にあるギベオンの丘の上にあった。新しい首都から 10 キロメートル足らず離れたところだった。この丘の頂に、昔の幕屋を模したものが立っていて、ここで祭司が全焼の生け贄を献げていた。なぜダビデはギベオンではなく、エルサレムを神の箱の安置所と考えたのだろうか？彼は神の座が自分の王座の近くにあることを望んだのかもしれない。結局、イスラエルの真の支配者は、主ご自身以外の誰でもなく、王は主の家臣に過ぎないのだ。エルサレムには神殿がなかったので、ダビデは神の箱を杉造りの自分の宮殿に置くと決めた。

当日の夜明け、12 部族から 3 万人の招待客が祝典に集まった。ヨルダンの向こう岸の部族も多くの使節を送ってきた。エルサレムから 10 キロメートル丘を上がったところにあるアビナダブの家から神の箱を運ぶため、雄牛が引く車が作られた。しかし聖なる神の箱が、歓呼する見物人の間を通っていたとき、大変なことが起こった。牛がつかずいたので、アビナダブの孫の祭司ウザが、

⁴¹ (41) 旧約の時代は、み言葉、生け贄、幕屋あるいは神殿が「恵みの手段」だった。新約時代は、み言葉、洗礼、聖餐式が恵みの手段である。

溝に落ちるのを防ごうとして、神の箱に手を添えて支えた。たちまち主がウザを打って、彼は倒れて死んでしまった。

祝典は中断し、できなくなってしまった。怯えた人々は散って、急いで家に帰って行った。衝撃を受けた王は、もう自分の宮殿に神の箱を運ぼうとはしなかった。彼はそれを近くのオベデ・エドムの家に移した。ダビデは、なぜ神がこんな恐ろしいやり方で、気の毒にもウザを罰せられたのか分からなかった。若い祭司は、単に役に立とうとただけだったのに。彼に悪意はなかったのに。

あとになって、ダビデは何がいけなかったのか、気付いた。つまり、箱を動かす時の特別な方法について、彼は祭司たちと相談しなかったことだ。正しくは、モーセの律法では、神の箱は担い棒でレビ人が肩に担いで運ぶようにと、規定していた。聖なる神の箱に触れる者はだれでも死ぬ（出 25：12-14；民 4：5-6、15）。

今なら、聖書を読んでいる人の多くはこれに反発するでしょう。神はそんなに細かいことまでやかましく言えるのですか？ 答えは、「しかり」です。この出来事が顕わしている神の姿は、近年、教会の中でも外でも、私たちが常に聞いている「神は愛なり」とは、一致しないようです。しかし聖書によると、実際の神は優しく愛情深いだけでなく、浄くて厳しくもあるのです。ダビデは苦勞してこのことを学びました。

神の箱 エルサレムに

間もなく宮廷に、ある噂が伝わった。神の箱がオベデ・エドムの家に大きな祝福をもたらしているということだ。そこでダビデは、神の箱をエルサレムに運んでくることに決めた。今回はしっかり学んでいた。二度目に神の箱を運ぶ計画をしたとき、彼はレビ人に話した。“最初の時には、あなたがたがいなかったため、私たちの神、主が、私たちに怒りを発せられたのです。私たちがこの方を定めのおりに求めなかったからです。”（1 歴 15：13）そうこうしている間に、ダビデはもうひとつのことが分かってきた。神の箱を、自分の住まいに持ってくることはできないということだ。神の箱には、神の箱だけのための場所が必要なのだ。そこで彼は自分の住まいの近くに、神の座のために簡素な幕屋を建てた。

先の災厄からわずか3ヵ月後、また迎え入れの祝典をすることを、ダビデが人々に同意させたのは、驚くべきことだ。幸いに、今度はモーセの律法を細かく調べて、すべてのことがその指示に従って行われた。レビ人が担い棒で神の箱を運んだ。彼らがオベデ・エドムの家から6歩離れた

とき、ダビデは雄牛と肥えた子牛を生け贄に献げた。エルサレムに着いた時にも、同じように生贄を捧げた。

祭司とレビ人 882 人が、上等の麻の上着を着て参列した。そのうちの 288 人が大合唱団として、アサフの指揮で、様々な楽器と共に喜びの歌を歌った。(ちなみに、聖書にアサフの名前が出てくるのは、この箇所が最初だが、最後ではない。)

レビ人の合唱隊が歌う。

天は喜び、地は、こおどりせよ。

国々の中で言え。主は王である。

海とそれに満ちているものは鳴りとどろけ。

野とその中にあるものはみな、勝ち誇れ。

そのとき、森の木々も、

主の御前で、喜び歌おう。

確かに、主は地をさばくためにこられる。

主に感謝せよ。

主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。(1 歴 16 : 31-34)

亜麻布のローブを着て、王は行列の先頭を歩き、伝統のダンス‘ホーラ’を踊りました。踊るのは体力がいります。特にシオンの山に登るときには。大多数の支配者たちは威厳を保つことにこだわりますが、ダビデは気にしませんでした。暑くなったので、彼は途中で服を少し脱いでしまいました。彼が踊る目的は、神の箱を町に迎える言い尽くせない喜びを表すことでした。

ダビデの妻ミカルは、宮殿の窓から夫が踊るのを蔑んだ目で見ている。彼女は、何年か前に父親がナイオテの預言者の前で、裸で暴れ回ったという話を思い出して、そのときの恥が戻った気持ちがしたのかもしれない。ミカルの冷ややかな批判は、彼女が夫と価値観や夢を共有していなかったことを示している。彼女は、神の恵みの手段をそれまで必要としなかったもので、その価値があまりわからなかったようだ。だから、型破りな方法で自分の喜びを表現するダビデに共感できなかったのだ。

ダビデはもはや、ミカルが憧れたような男ではなかった。王というものは、古ぼけた箱なんかよりもっと大事なことを喜ぶべきではないのか？ 3 ヶ月前、彼は莫大な費用をかけて民の半分を都に呼び寄せたが、すべてがひどい結果になったではないか。そして今また、彼は自分を愚か者になっている。ミカルは心の中でダビデを軽蔑した。

この出来事から、失敗は必ずしも罪ではないし、恥ずかしいことではないと、私たちは教えられます。私たちに、自分と神について最も大切なことを教えてくれるのは、まさに、失敗することなのです。最初に神の箱をエルサレムまで運ぶのに失敗したあと、ダビデは聖書をより注意深く読み始めました。彼は祭司とレビ人の任務がどれほど重要かも学びました。さらに彼は、神の箱は宮廷のどこかに置くのではなく、それだけのための建物が必要であることが分かりました。

ダビデの妻たちのなかで、この日が夫にとってどんなに大切か、彼の人生で実に最高に幸せな日なのだと、理解した者がいただろうか？ミカルは理解しなかった。ミカルのこの思いのために、神は彼女に子供を持つ喜びを与えられなかったのかもしれない。

“全イスラエルは、歓声をあげ、角笛、ラッパ、シンバルを鳴らし、十弦の琴と立琴とを響かせて、主の契約の箱を運び上った。”（1歴 15：28）祝典に参列した招待者はそれぞれ、パン、数切れの肉、蜂蜜菓子など献げ物のお裾分けを受け取りました。ダビデは祭司として、焼き尽くす生け贄を献げ、人々を祝福しました。サウルは同じようなことをして罰を受けています。神はなぜダビデにそれを許されたのでしょうか。私たちはこの争点に戻りましょう。

1000年後、生後40日の小さな男の子が、両親の腕に抱かれてエルサレムの神殿に連れてこられました。旧約の時代、神の箱が地上での神の住まいだったように、今はイエス様ご自身が神の箱です。“キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。”（コロ 2：9）神の箱は罪人の目から隠されていましたが、イエス様には、恐れることも死ぬこともなく、だれでもが見て触ることができます。

神の箱には十戒の石版が入っていましたが、イエス様の生涯はそれを全うする、生きた見本です。このときダビデがイスラエル人の罪の和解として、神の箱の覆いに動物の血を振りかけたように、イエス様は私たちの大祭司として、全世界の罪の贖いのために、天の神殿の贖罪所にご自分の血を振りかけられたのです。

ダビデの軍隊と治世

“こうして、ダビデの名声はあまねく全地に及んだ。主はすべての国々に、彼に対する恐怖を起こされた。”（1歴 14：17）

紀元前1000年ころ、ナイル川やユーフラテス川に沿った地域を統治していたのは、比較的弱い王たちだった。支配力の届かない隙間があるので、イスラエルはそこに入り込むことができた。ダビデの軍隊は規模は小さかったが、彼の王国はその地方で最強国の一つとなっていた。歴史的に見ると、他のどんな場合でもこんなことは不可能だった。

権力を手に入れると、ダビデはゲリラ隊員たちを軍の高官に昇格させた。イスラエルの軍は 12 部隊に分けられ、一部隊は 24,000 人だった。各部隊は 1 年に 1 月間の任務に就いた（1 歴 27）。⁴²軍の中核は「30 人」と呼ばれ、その精鋭グループの名簿は聖書の中に 3 回、少し異なった構成で出てくる（2 サム 23：1、1 歴 11、27）。名簿の最初は、ダビデのゲリラ時代のものだった。

30 人の中で特筆されているヤショブアム、エルアザル、シャマの 3 人は、それぞれ戦いの重要なときに形勢をひっくり返す働きをした。ペリシテとの戦いのとき、ダビデのためにベツレヘムの井戸から水を汲んでくるという冒険をしたのが、この 3 人だった。中核 30 人の名簿のあとに、ダビデの甥アビシャイとエホヤダの子ベナヤの名前が出てくる。ダビデの一番下の甥アサエルの名前も、30 人の勇士の名簿に出てくるが、ダビデの一番上の甥ヨアブの名前はそこに無い。そのことに付いては、あとで触れることにする。⁴³

ゲリラ時代からずっと付き従っていたベナヤは、ダビデが死ぬまで忠実に仕え、続けてソロモン王にも仕えた。とても勇敢で強い男だったベナヤの英雄的な行いは、聖書に何度か記録されている。彼の晩年は、王の外国人護衛兵の長官として知られ、ケレテ人とペレテ人の上に立つ者とされた。勇士の名簿には、2 人のヘテ人兵士の名が含まれているが、その一人がウリアである。

ダビデは勇敢な者なら出自も国も問わず、進んで受け入れた。しかし、イスラエル軍の中では偶像礼拝を禁じたので、外国人の兵士たちはまず、主を信じる者にならなければいけなかった。

ダビデはモーセの律法に加え、サムエルが王の権利と義務について書き記した事をしっかり学んだ（1 サム 10：25）。だれが自分に王座を与えたかをよく知り、そしてどのように権力を使ったかを、その方の前で説明しなくてはならないことも、わかった。“ダビデは、主が彼をイスラエルの王として堅く立て、ご自分の民イスラエルのために、彼の王国を盛んにされたのを知った。”（2 サム 5：12）

自分が立っている位置は、自分のためではなく人々のためという目的で与えられているのだということを、今の支配者の何人が自覚しているでしょう？ダビデのような公正な支配者であれば、国にとっても民にとっても本当に幸いです。ダビデが統治している間、イスラエルは黄金時代でした。道路や交易路が発達し、外国貿易は四方に開かれ、民の生活水準は急速に上がりました（1 歴 29：29）。歴史的な記録は、祭司や預言者たちによって残されました。彼らは、後の世代が心に

⁴² (42) このように計画されたが、それが実現したものかどうかはわからない。

⁴³ (43) アサエルはダビデがヘブロンで王になった後すぐに死んだ。だから 40 年後のイスラエルの勇者の名簿に、その息子と一緒に名前が出てくるのはおかしい。（1 歴 27:7）それは彼の兄アビシャイのまちがいでないかと、筆者は思っている。

刻むために、神の偉大な御業を書き記すという自分たちの任務が、どれほど重要であるかがよく分かっていたのです。

ところで、ダビデは行政の費用をどこから捻出していたのでしょうか？というの、彼は民からの税は取らなかったようだからです。近隣国の王たちや、のちのダビデの後継者たちは贅沢な生活をしましたが、彼自身はかなり質素な暮らしで満足していました。しかしダビデは多くの農場と家畜を持っていました。歴代誌には、彼のぶどう畑、オリーブやイチジク桑の叢、牛、羊、ラクダ、ロバについて詳しく記されています（1歴 27：24-31）。それらに加えて、戦利品、そして近隣国から払われる税と夫役がありました。

ダビデの高官たちは、聖書に数回列挙されている。たとえば“ツェルヤの子ヨアブは軍団長、アヒルデの子ヨシャパテは参議、・・ツァドクと・・アヒメレクは祭司、セラヤは書記”（2サム 8：16-17）、“ダビデのおじヨナタンは議官であり、英知の人で、彼は書記でもあった。ハクモニの子エヒエルは王の子らとともにいた。アヒトフェルは王の議官で、アルキ人フシャイは王の友であった。”（1歴 27：32-33）また、ダビデは息子たちが若いときから、彼らに行政の職務を習熟させたことも知られている。彼らは父親の食卓に就いて、彼の側近と呼ばれた（1歴 18：17）。

“主はダビデの行く先々で、彼に勝利を与えられた。”（1歴 18：13）大成功にもかかわらず、ダビデは全世界を自分に服従させようとする誇大妄想の暴君ではなかった。彼は主がイスラエルの境界をどこに置かれたかを、正しく認識していた。ゲリラとしての最後の年にアマレク人を降参させ、その後、王となってからペリシテ人、モアブ人、シリア人、エドム人、最後にアモン人を征服した。ダビデは同盟国には戦争をしなかったため、彼の統治の間、ハマスとツロとは争わなかった。アモン人がイスラエルと平和な関係でいる限り、ダビデも彼らを攻撃することはしなかった。

戦争が常にそうであるように、ダビデの戦争も酷いものでしたが、歴史的観点からすると当時では例外ではありません。戦争の原因を調べると、そのほとんどは防衛の戦いでした。私たち 21 世紀の‘人道的な’聖書の読者は、ダビデの戦争を現代の目で見ると、独善的に偏りがちです。しかしその結果として、イスラエルの民は歴史上初めて、安全になったのです。また、神には救い主が生まれるための地として、イスラエルが必要でした。ダビデが戦ったのは、イスラエルを海に追い落とそ

うとする、近隣諸国から守らなければならなかったからというのが、一つの理由でした。そうすると、ダビデの戦いは神の戦いだと言えます。⁴⁴

でもダビデの 32 代目の子、イエス・キリストによって、状況が変わりました。イエス様は平和の君としてこの世にお生まれになりました。神の言葉（御霊の剣）以外のどんな武器も持たず、弟子たちにも同じようにすることを勧められました。イエス様ご自身は他からの暴力を受けましたが、他人を同じ目に遭わせることは決してなさいませんでした。後の 2000 年間に起こった十字軍や宗教戦争は、イエス様の思いではなく悪魔が唆したものです。一方、自分の国を侵略者から守るのは間違いでないことは、はっきりしています。聖書がこのことを正当と認めています。

今日の事實的、現實的暴力のただ中では、クリスチャンは平和の君が再臨し、栄光の座に就かれるのを待ち望むしかありません。その日には、イザヤが予言したようにこの世の全ての流血事が止むのです。

戦場ではいたすべてのくつ、血にまみれた着物は、
焼かれて、火のえじきとなる。
その主権は増し加わり、その平和は限りなく、
ダビデの王座にある。（イザ 9：5、7）

ヨナタンの息子

ダビデは、最優先にすることを済ませると、20 年ほど前にヨナタンと交わした約束を思い出した。王はサウルの僕ツィバを王宮に呼び出して尋ねた。“「サウルの家の者で、まだ、だれかいないのか。私はその者に神の恵みを施したい。」ツィバは王に言った。「まだ、ヨナタンの子で足の不自由な方がおられます。」王は彼に言った。「彼は、どこにいるのか。」ツィバは王に言った。「今、ロ・デバルのアミエルの子マキルの家におられます。」そこでダビデ王は人をやり、ロ・デバルのアミエルの子マキルの家から彼を連れて来させた。”（2サム 9：3-5）

ヨナタンは、友が幼い息子の面倒を見てくれると信じて死んでいった。しかしヨナタンの息子メフィボシェテの世話ができないまま、20 年が経っていた。やっと今、彼に好意を表すことができる。幼いとき、ペリシテから乳母の腕に抱かれて逃げるとき、乳母が不注意に彼を落としてしまっ

⁴⁴ (44) アマレク人とペリシテ人が最初に攻撃してきたので、この戦争は防衛戦だと考えられる。アモン人は最初はダビデの同盟国だったが、彼の使者を辱めたので国の名誉を挽回しなければならなかった。アラム族がアモン人を防ぐことになった。エドムとモアブの場合だけは、どのように戦争が始まったかわからない。

た。その日、彼の父親も祖父も死に、幼い彼は両足のけががもとで不具となった。ギプスなどの医療手段もなく、彼は生涯びっこをひくことになった。

メフィボシェテは、ヨルダン川の向こうの、10部族の王である叔父の家に、叔父が生きの間、住んでいたと考えられる。メフィボシェテの母がどうなったかはわからない。彼が12歳ぐらいのとき、叔父が殺されて北部族の王冠がダビデのところへ運ばれてきた。その後、ヨナタンの息子はマキルという名の保護者の家に隠れて、生活していた。その家は、サウルの国ともダビデの王宮とも遠く離れたマハナインにあった。しかしながら、この若者には妻を娶るだけの魅力があった。なんといっても、彼はヨナタンの息子なのだから。

メフィボシェテは、父親とダビデの友情についてどこまで知っていたのだろうか？⁴⁵彼は父親が死んだとき、わずか5歳だった。そしてサウルの宮廷では、それについての話はきっとタブーだっただろう。当時の中東の国では、新しい王朝の最初の王が、前王の男の子孫を全部滅ぼしてしまうのは、よくあることだった。メフィボシェテも、ダビデの報復を恐れて都から遠く離れた所で、目立たないようにしていたのかもしれない。

ダビデの部下が彼をエルサレムに連れて行こうとやって来たとき、メフィボシェテはひどく驚いたにちがいない。王が、彼に害するのではなく良くしてくれるために王宮に招いたことがわかったとき、彼はどんなに大きく安堵したことだろう。メフィボシェテはそのとき20歳から25歳で、ダビデは40歳半ばだった。

ダビデが初めて出会ったとき、ヨナタンはこのときの自分の息子より少しだけ年上だった。王は若者の中に、親しんだ面影を見つけようとじっと見つめて、こう言って彼を安心させた。「恐れることはない。私は、あなたの父ヨナタンのために、あなたに恵みを施したい。あなたの祖父サウルの地所を全部あなたに返そう。あなたはいつも私の食卓で食事をしてよい。」彼は礼をして言った。「このしもべが何者だというので、あなたは、この死んだ犬のような私を顧みてくださるのですか。」”(2サム9:7-8)

ダビデの言葉はヨナタンの息子の人生をひっくり返した。彼は王やその高官たちや王女たちと同じ食卓に就くことになった。さらにサウルの広大な土地と富が彼に戻された。メフィボシェテは突然、裕福で尊敬される青年になった。

ヨナタンが誠実な友、イエス様のひな型であることは、すでに述べました。ここで、ダビデについても同じことが言えるとわかります。ヨナタンの息子に対してダビデが誠実だったように、イエス様は自分の友、あなたや私に対して誠実でおられます。ダビデが友情の誓いを覚えていたよう

⁴⁵ (45) 友情（ヘブル語で *hesed*）と訳された言葉は契約の用語で、誠実、慈悲、愛を意味する。

に、イエス様は洗礼のとき私たちに約束されたことを覚えておられます。不具のメフィボシュテが王の食卓に加えられたように、私たちも有りのままで、聖餐に加わることが許されているのです。

サウルの他の子孫たち

ダビデの治世のある時期、イスラエルは3年間、飢饉に見舞われた。王は主がご自身の民に怒られたのだろうかと思った。彼が干ばつについて主に尋ねた—おそらく預言者ガドを通して—ところ、答えは思いもよらないものだった。約束を破ったことが、この状態を引き起こしたという。

数世紀前、イスラエルの民が約束の地を手に入れたとき、ギブオンの人々はイスラエル人をだまして契約に持ち込んだ（詳細はヨシュア記9を参照）。ヨシュアと指導者たちは、穏やかにギブオン人をそのままにしておくことを、主の名において誓った。彼らは町から追われることなく、そこに住むイスラエル人の僕として残った。その後、契約は破られた。サウルが権力の座に就いたとき、かつて結ばれた取り決めに拘束力があることを認めなかった。彼は冷たくギブオン人を無法者とみなした。この‘民族追放’はギブオン人がイスラエルを呪う元となり、ダビデの時に飢饉を引き起こしたのだった。

何世紀も前にした約束に違反したことが、自然災害を引き起こすことなどできるでしょうか？迫害された民の恨みが雨の量を操作できるのでしょうか？神がイスラエルをどのように扱われたかという聖書の物語から、今日の気象変化には何か同じことがあるのではないかと、私たちは考えるべきではないでしょうか。もっと近年の例としては、白人が300年のあいだ土地を分捕り、その地の人々を奴隷にまでするなど、恐ろしく野蛮なやり方で他国を迫害しました。主は決してこの悪行をお

忘れにありません（ヤコ5：1-6）。しかも、私たちは約束を、特に結婚の誓いを、軽く考える世代となっています。もし神が、多くのこのような約束破りを、地球全体の大雨や気温変化という大災害の形で責めておられるのだとしたら・・・？

干ばつの原因に決着を付けようとして、ダビデはギブオン人たちを呼び出し、ひどい状況を正すにはどうすればいいのかを尋ねると、彼らが答えた。“「私たちが絶ち滅ぼそうとした者、私たちが滅ぼしてイスラエルの領土のどこにも、おらせないようにたくらんだ者、その者の子ども七人を、私たちに引き渡してください。私たちは、主の選ばれたサウルのギブアで、主のために、彼らをさらし者にします。」王は言った。「引き渡そう。」”（2サム21：5-6）

結果として、サウルの長女メラブの五人の息子と、そばめリツパの二人の息子が槍や矢で殺された(46)。⁴⁶この悲劇のあと、気の毒なりツパがコンドルや野獣がたかってこないように、7人の屍のそばに座って不寝番を始めました。それは6か月の間続きました。彼女がどうやってそんなことができたか、考えられません。ぐっすり眠ることはできないで、うとうとするぐらいだったのでしょうか。

マリアもリツパに似た苦しみを受けました。自分の愛する息子が十字架に釘付けにされるのを見ていました。この母親たちは苦しみました。天の父はご自分の一人子がローマ人の槍で刺されるのをご覧になって、もっと苦しかったことでしょう。約束を破る私たちに対する神の怒りを宥めるために、み子の死が必要だったのです。

リツパの嘆きを聞いたダビデは深く心を動かされた。その7人の死者だけでなく、ヤベシュに埋められていたサウルとヨナタンの骨のためにも、彼は正式な葬儀を調えることした。“ダビデがサウルの骨とその子ヨナタンの骨をそこから携えて上ると、人々は、さらし者にされた者たちの骨を集めた。こうして、彼らはサウルとその子ヨナタンの骨を、ベニヤミンの地のツェラにあるサウルの父キシユの墓に葬り、すべて王が命じたとおりにした。その後、神はこの国の祈りに心をうごかされた。”(2サム 21:13-14) ここではっきりさせるべきは、この7人の死はダビデの意志でなく、神の怒りをなだめるためだったということだ。

次の秋、季節通りに雨が降り、飢饉は治まった。リツパの誠実な母の愛は、息子たちを取り戻すことはなかったけれど、そのおかげで、彼らや父親たちのための立派な葬儀をすることができた。この出来事のあと、サウル一家に残された男系は、メフィボシエテとその幼い息子ミカだけになった。

旧約の最も大事なメシヤの預言

このころ、ダビデはある事を気に病むようになった。自分の王宮と神の箱の粗末な安置所を比べてのことだった。周辺の国は自分の神のために神殿を建てているが、イスラエル人は自分たちの神は幕屋に住むことを望んでおられると考えてきた。生ける神は本当に粗末な幕屋で満足なのだろうか、今はエルサレムの立派な建物に神の箱を置くべきだろうか？

ある日、ダビデは預言者ナタンとそれについて話した。“「ご覧ください。この私が杉材の家に住んでいるのに、神の箱は天幕の中にとどまっています。」すると、ナタンは王に言った。「さあ、あ

⁴⁶ (46) 槍での刑罰は、ダビデにとってモーセの律法でおなじみだった。荒れ野の彷徨のあいだ、偶像礼拝に対する主の怒りは、同じ方法で静まった。(民 25:4)

あなたの心にあることをみな行ないなさい。主があなたとともにおられるのですから。」（2サム7：2-3）ここで分かるのは、新しい預言者ナタンが王宮に居たことだ。ガドがダビデと荒れ野時代からいっしょにいて、年老いてきた。今はナタンが加わって、以来王に支援と指導をしている。しばらくの間、二人は宮廷預言者として一緒に働いた。

ダビデがナタンと話した次の夜、神が預言者のところに現れて、王への言葉を与えられた。神は、主の‘家’を建てるのはダビデの仕事ではないと言われた。反対に、主がダビデのために‘家’も神殿も建てられるのだ。

ナタンはこの言葉を王に伝えた。“さらに主は、あなたに告げる。『主はあなたのために一つの家を造る。』あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。”（2サム7：11b-13）

この言葉には、旧約の最も重要なメシヤの預言が含まれています。その言葉を通して、主はダビデとダビデの子に、変わる事のない約束をしておられます。神殿を建てるのはダビデの子です。地上のどの王国とも違い、彼の王国は永遠に残ります。それだけでなく、ダビデの子は同時に神の子でもあります。“わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。”（2サム7：14）

上記の言葉を見てください。旧約のギリシャ語訳、70人訳では、‘起こす’という動詞を‘復活させる’という動詞に訳しています。この言葉はイエス様以外のだれに当てはめられるでしょうか？

ナタンの預言はソロモン（まだ生まれていなかった）についてのことでしたが、それはダビデの32代目の子を指していました。イエス様はダビデと同じくベツレヘムにお生まれになりました。その喜びの知らせは、少年のダビデが羊の番をしていたその同じ野原の羊飼いたちに告げられました。クリスマスの物語の赤ん坊は‘ダビデの家系であり、その血でもある’ヨセフの家に生まれました。ここで言われた‘家系’という言葉に注目してください。ちなみに、「主よ。ダビデの子よ。私をあわれんでください」と叫んだ、盲人のバルテマイとカナン人の女はこの預言を表しています（マル10：47、マタ15：22）。

先に述べたように、ダビデの子は神の子そのものです。“これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ”（マタ3：17、17：5）これは、初めはイエス様が洗礼を受けられたときに、もう一度は変貌のときに、父なる神が天から言われた言葉です。イエス様は（隠された）王位と、ダビデの遺伝的な気質を半分受けておられるという意味では、ダビデの子です。イエス様のもう半分の遺伝子

は、天地の外から、マリアの胎にイエス様を身ごもらせた聖霊からもたらされました。神の一人子として、イエス様の実体は神と同じであり、神そのものなのです(47)。⁴⁷

イエス様は“ソロモンよりもまさった者”（マタ 12：42）でした。ダビデの次の世代の息子は7年で神殿を建てましたが、32代目の子はわずか3日で建てました（ヨハ 2：19-21）。ソロモンの神殿は、神に会う場所であって罪が償われる所のひな型でした。そしてキリストの体はこのひな型を完成させました。ソロモンの神殿は民の罪のために壊され、イエス様の体は全人類の罪のために壊されました。しかし3日後に甦られました。現代では本当の神殿はキリスト教会にあり、イエス様は最後の日まで教会のみ言葉と聖礼典の中におられるのです。

古い契約の時代のイスラエル人はだれも、このすばらしい約束が将来どのように果たされるかを理解できませんでした。ダビデがどの程度、ナタンの予言の大きさを理解したかは、分かりません。いずれにせよ、喜びと感謝がダビデを圧倒しました。彼は自分から、なにも主に願わなかったのに、大いなる約束が彼と彼の子孫に与えられました。その日以来、神のその約束は、最悪の日々にもダビデの信仰を支えたのです。彼はナタンの言葉を繰り返し反芻し、死の床でさえも口にしました。

感謝の心でダビデは神に応えました。“今、神、主よ。あなたこそ神であられます。あなたのおことはまことです。あなたは、このしもべに、この良いことを約束してくださいました。今、どうぞあなたのしもべの家を祝福して、とこしえに御前に続くようにしてください。神、主よ。あなたが、約束されました。あなたの祝福によって、あなたのしもべの家はとこしえに祝福されるのです。”（2サム 7：28-29）もしみなさんが、主が戻ってこられるまで、自分の子供や孫が世代から世代へ主に仕えるだろうという主からの約束を聞いたら、どう感じますか？それが想像できれば、ダビデの喜びが理解できるでしょう。

彼の子孫の実際の歴史は、ダビデが思い描いただろうものとは違っています。系図の研究で、ユダの王たちの中で賢明な、もしくは良い支配者だったのは多くなかったことが明らかになっています。事実、彼らの多くが墮落し、そのため主はエッサイの木（王国）を切り倒し、ユダの民をバビロンの捕囚とされました。それ以後、ダビデの子孫のだれも、イスラエルを支配する者はいませんでした。

⁴⁷(47) マルチン・ルターやほかの学者たちは、ルカ 3 章の系図はマリアの系図だと信じている。もしそうであれば、イエスは母親を通して（すなわちダビデの息子ナタンを通して）ダビデの遺伝子を受け継いでいる。しかしソロモンを通して受けた正当な王座は、養父ヨセフを経て受け継いだ。（マタ 1：1-16）

それでも神はこの契約に忠実で、ダビデに約束されたことはことごとく守られました。エッセイの木一株から見事な苗木、イエス様が萌え出ました。このダビデの子は、ロバの背に乗ってエルサレムに入城し、頭に茨の冠を着けてご自分の民のために死なれました。復活のあとダビデの王座は、天の父の右に移されました。

このことを通してわかるのは、主はダビデの一族が犯した罪にもかかわらず、約束を果たされるといことです。ときにはその罪を通してさえも、ご計画を成し遂げられます。同様に、不思議な方法で、神はあなたの、またあなたの愛する人たちの人生で、洗礼の契約を果たされるのです。

ダビデが加わらなかった戦い

ダビデは王になってからの 20 年、いたしかたなく多くの戦争をしたが、その終わりが見えてきた。ひとつだけ戦いが残っていた。アモン人の王国は数年、ダビデと友好を保っていたが、賢明なナハシュ王が年老いて死んだとき、彼の若くてばか

な息子ハヌンが、ダビデを辱めるという愚かな事をした。ハヌンは父親のお悔やみを持ってきたイスラエルの使者を侮辱した。もしダビデがこの無礼を黙っていたら、周辺の支配者たちはダビデを、名誉を守れない弱虫とみなすだろう。ダビデはそれを許すことができなかったので、戦いの準備をした。ハヌンは危険な状況に直面していることを察して、援護のためシリア人の軍隊を雇った。⁴⁸ 歴代誌によると、彼は総額 1000 タラント、あるいは銀 60 トンを援軍に支払わなければならなかった（1 歴 19：6）。

激しい戦いが二度あって、ヨアブは両方ともに勝利を収めた。イスラエルは戦利品の富と多くの馬を得たが、ダビデにはこの生き物をどうしたらいいのか、全くわからなかった。彼は馬や戦車や、当時中東で広がりつつある他の新しい物にはあまり興味がなかった。自分の見栄えも気にしなかったため、ロバやラバで満足だった。これはダビデの 32 代目の子にも同じ事が言えます。彼も、王として都へ入ったとき、ロバの背中に乗られて満足でした。

最初の戦いに破れたあと、シリア人はアモン人を守るのを止め、イスラエルに税を収めなければならなくなった。ダビデは軍隊の基地をダマスカスに設営して、その長を指名した。このころイスラエルの領土はほぼ最大に広がっていて、北はユーフラテス上流から南はエジプト国境の川まで伸びていた。これはアブラハムとモーセに約束されたものだった（創 15：18、出 23：31、申

⁴⁸ (48) シリヤ人はアラムひとのことです。

11：24)。このころがイスラエルの黄金時代で、ダビデとソロモンの治世を通して、およそ 70 年続いた(49)。⁴⁹

アモン人は降参したのではなかった。その代わりに反抗して自分たちの都ラバ（現在のアンマン）に撤退し、門を閉じてしまった。この先には、長引く城攻めが待っている。これまでダビデは一貫して軍の先頭を歩き、一番前に立って部下たちと同じつらさに耐えてきた。が、今回は家に残ることにした。城攻めは何か月続くかわからない。50 歳に近づいた王は、野営を味わう気分にならなかったからだ。

ダビデが出て行かなかったのは、ペリシテの国境での小競り合いの時に起こったことも理由かもしれない。聖書はそれを潤色なく簡単に記している。“ダビデは疲れていた”（2サム 21：15）もし、そのとき甥のアビシャイが助けに来なかったら、ダビデはペリシテ人の大男に打ち殺されていただろう。王の兵士たちはとても心配して言った。“あなたは、もうこれから、われわれといっしょに、戦いに出ないでください。あなたがイスラエルのともしびを消さないために。”（2サム 21：17）

ダビデの最初の戦いはペリシテの巨人とだったが、最後もそうだった。遠い昔、10 代のとき、彼は身長 3メートルの敵を簡単に倒した。今 40 代後半になって、彼はどんな英雄もいつか直面しなければならない事態に向き合っている。彼の反応は遅かった。頭の働きはもう鋭くなく、ときには、戦いの最中にうまい戦略を練るのもおぼつかなくなっている。彼の矢はもう、百発百中とはいかないし、足は以前のように進まなくなった。刺激的な冒険の時代や英雄的な働きは終わった。老いた勇士は、前戦で軍を指揮するのではなく、‘本部’から指揮するよう頼まれると、不本意に思ったに違いない。

扉を閉ざされることを敗北だと思ったら、年を取るのはつらくなります。しかし見えるものではなく、見えないものに目を向ける人には、閉ざされた扉は何か新しくてもっと良い事の始まりです。ダビデにも、この訓練が始まっただけなのです。

そこで、問題の春、ヨアブがラビの包囲に取りかかったとき、王は家族とともにエルサレムの城に残った。家族は数が増えて、多くの女子供を抱えていた。“ダビデはヘブロンから来て後、エルサレムで、さらにそばめたちと妻たちを娶った。ダビデにはさらに、息子、娘たちが生まれた。”（2サム 5：13）サムエル記によれば、ダビデには全部で 17 人の息子がいた。歴代誌によると 19

⁴⁹ (49) 「神は現在のイスラエルの境界線を定めたか？」とは、クリスチャンの意見が一致しない点だ。筆者個人としては、もし現在のイスラエルがユーフラテスとエジプト国境の川の間の土地を占領しようとするなら、それこそ悲劇だと思う。

人だが、ラビ包囲のときには、その内の何人かはまだ生まれていなかった。彼の上の息子たちはそのとき成人になっていただろう。娘の数は記されていないが、息子と同じくらいとすると、ダビデには 30 人を超える子供がいたことになる。

ダビデは、20 人の妻と 10 人ぐらいのそばめを持っていましたが、本物の男に成長できたのでしょうか？自分自身より妻の満足を優先できる男だけが、本物の男です。性欲を抑制できる男が、人生の最も厳しい戦いに打ち勝ったと言えるのです。ハーレムを持つような者は、その戦いをする必要がほとんどありません。そしておそらく、だれが自分の妻で、だれが他人の妻なのかを識別する目さえ、かすんでしまうのです。女性に関して、ダビデは 50 歳になってもまだ成熟していませんでした。そして大失敗をしてしまうことになります。

4章 心の中の敵⁵⁰

あなたが私とともにおられますから。

あなたのむちとあなたの杖、

それが私の慰めです。

50歳は男性にとって危機の時だと言われています。その年になると、男は自分が人生で何を成し遂げたか自問するようになります。もう間もなく、望むものに到達するには遅すぎるようになります。働くことが限界になったとき、あと一つ、男が自分の男らしさを証明する分野が残されています。それは女に関してです。50代になってボスとしてのセルフイメージを上げるのに、若い女を手に入れること以上のものがあるでしょうか？

女性はこの点で違います。女の中年（だいたい40代）の危機は、自分はこれまでどれくらい幸福と感じたかを測ることから始まります。夢を果たすことができたでしょうか？自分がだれかに、本当に愛されているのだろうか？歌や映画で描かれているようなすばらしい愛が、自分の人生にあったでしょうか？今あるすべてを捨てて、本当の自分や幸せを探すべきでしょうか？もし男も女も、結婚を壊すことなく中年の危機を通り抜ければ、彼らは子供や孫に囲まれて平穏な老年を迎えるのは可能です。ダビデは気の毒にもそれができませんでした(51)。⁵¹

すでに述べたが、聖書はダビデの最強の兵士30人を列挙している。そのリストの最後にヘテ人ウリヤの名がある（2サム23：39）(5²)。彼の両親がすでに改宗していることは、息子に「主（ヤハウエ）は私の光」という名を付けたことで明らかだ。どういう経緯でか、ウリヤはダビデの軍隊に入り、彼の近衛兵の一員となっていた。

ダビデの勇士の同じリストの中にエリアムの名がある。彼はウリヤの美しい妻バテ・シェバの父親であるとも考えられる（2サム11：3、23：34）。バテ・シェバとウリヤには子供がなかったので、結婚して間がないのかもしれない。ウリヤは妻よりやや年上と思われる。バテ・シェバはおそらく20歳前後だっただろう。

⁵⁰ (50) 2サムエル記11章と並んで1列王記2章に、ダビデの王宮の歴史全体について記述されているが、歴代誌の筆者は何か報告し落としている。この歴史は、王はただ崇められるだけという、他の古代の歴史書の中では例外的だ。内容が詳しいことから、その王宮史の記者は文筆の才能豊かな目撃者だろうと思われる。彼は王の側近に属していたにちがいない。一番考えられるのは預言者ナタンだが、あるいはダビデの二人の大祭司か、または彼らの息子であったかもしれない。

⁵¹ (51) この部分は、筆者の著書「旧約聖書の女たち」（2013年 幻冬舎）から引いた。

⁵² (52) ヘテ人は、昔イスラエル人が約束の地から追い出したはずの民族だった。

聖書はあとのほうで、ウリヤの妻への感情を次のように例えで表現しています；彼にとって彼女は、貧しい男の、心の底から愛しんでいるたった一匹の子羊のようだった（2サム 12：3）。夫に対するバテ・シェバの気持ちは書かれていません。この若い妻は、町の中でごく近くに住んでいる英雄の王に、密かな憧れを抱いていたとは考えられることです。

バテ・シェバは遠くから王を称賛していたかもしれません。全イスラエルの中でそうでない女性がいたでしょうか？ダビデは勇敢で賢く、美男子で正義漢、天才的な作曲家であり詩人でもあり、その分野の頂点にいて、さらに社会的に高い地位にありました。そのような人物に、バテ・シェバが通常の称賛を超えた感情を抱いたとは考えにくいことです。なぜなら第一に、彼女はダビデを個人的に知らなかったし、第二に彼女の夫は高官で、彼女の愛にふさわしい男性だったからです。

あとでは、ウリヤがお酒を飲んでいても自分を抑制できることがわかります。性欲をがまんすることができ男は、自分より妻の思いを優先させることもできます。バテ・シェバは、善良な男の「一匹だけの子羊」のままで満足だったでしょう。ダビデが手ひどく裏切った—最初は妻を奪い、次には命を奪った—相手は、実にこの誇り高い男でした。

暴行

ウリヤの若い妻は、たまたま王宮のとなりに住んでいました。“ある夕暮れ時、ダビデは床から起き上がり、王宮の屋上を歩いていると、ひとりの女が、からだを洗っているのが屋上から見えた。その女は非常に美しかった。”（2サム 11：2）その夜、バテ・シェバは生理が終わったので、中庭で入浴しようと思いました。けれどなぜ中庭だったのか？小さな部屋に浴槽が入らなかったからかもしれません。だから夜遅くまで待ったのだということも考えられます。その夜、王が眠れなくて、王宮の屋上から月光に照らされた彼女を見ることなど、彼女は決して予見できませんでした。

それはダビデの人生の、不運な瞬間でした。たまたま隣の中庭にいる裸の女が目についたのは、ダビデの落ち度ではありません。それでも、じっと蠱惑的な眺めを見続けるか、それに背を向けるか、彼はどちらでも選べました。その後ダビデは、過ぎ去ったその時の選択を、何度も悔やんだことと思います。しかし、してしまったことはしてしまったことです。その夜がダビデの人生を変え、家族を悲劇に投げ入れたのです。

“ダビデは人をやって、その女について調べたところ、「あれはヘテ人ウリヤの妻で、エリアムの娘バテ・シェバではありませんか。」との報告を受けた。”（2サム 11：3）王は、となりの美女が独り者ではなく、自分の高官と結婚していると知りました。しかしもう、ダビデの中に欲望が起こっ

ていたので、何に代えても、その若い女を自分のものにしたかった。ダビデは何十人もの女を自分のハーレムに抱えていましたが、夫から奪い取った者は一人もありませんでした。それまでは、彼は神を畏れて、結婚している女には手を出しませんでした。

当時、近隣の王たちは、相手が望むと望まないにかかわらず、どんな女でも自分の床に呼び出すことができましたが、その点で、イスラエルの王は違っていました。他のイスラエル人と同様、王も十戒を守らなければいけませんでした。この場合は第6の戒め“姦淫してはならない”です。(53)

53

しかしその夜のダビデは十戒をすべて忘れ、立ち止まって自分の行為がどんな結果になるか考えることをしませんでした。たとえば、自分の子どもたちにどんな見本を残すのか？自分の民のことも、国のためにアモン人と戦っているウリヤのことも考えず、ただその美女を手に入れたいという思いだけでした。

実のところ、ダビデのその思いというのは、彼女の内側を知らないままバテ・シェバの肉体を求める肉欲にほかなりません。二人がそれまでに知り合っているはずはないのですから。

となりの若い美女は、王宮へ呼ばれたのが真夜中だったのに、行かないということは少しも考えませんでした。ウリヤに何かあったのだろうか？ダビデが正しい人で、サウルの上着の端を切るだけでも悩むほど良心的だと、だれもが知っていました。だからバテ・シェバには、そのような人物が法に背くことなど想像もできなかつたと考えられます。“ダビデは使いの者をやって、その女を召し入れた。女が彼のところに来たので、彼はその女と寝た。一その女は月のものの汚れをきよめていた。一それから女は自分の家へ帰った。”(2サム 11:4)

この行為は、同等の立場にある大人二人が同意したものではありません。というのは、力の差と年の差が大きかったからです。バテ・シェバは実際的には姦淫を強要されたのです。状況は、尊敬されている先生が生徒を誘惑するとか、牧師と堅信礼を受ける女の子の場合とかと同じことです。このような場合、最近の「#ミートゥ運動」でわかるように、責任は元々誘惑した側にあります。今の時代なら、ダビデの行為は多くの国で有罪とされ、結果として、少なくとも仕事を失うこととなります。

しかしなぜバテ・シェバは、ダビデが何を思っているか知ったとき、逆らわなかったのでしょうか？もし彼女が、たたくとか蹴るとか、大声をあげるとかすれば、王宮全体が王の寝室で何が起きているか気付いたはずです。ところが彼女は、あまりにも若く、あまりにもうぶで、完全に

⁵³ (53) これはルター派の教理問答では6番目の戒めだが、ほかの多くの教派（ヘブル語の聖書でも）では、7番目になっている。

ダビデのなすがままでした。おまけに王はこの経験浅い女に、社会的、精神的な権威を振るうことができました。王に向かって「いや」と言うのは難しいことでした。彼の地位にある男は、暴力に頼らないで自分の思い通りにできますが、神の目からすると、その罪は強姦と同じです。

聖書ではそうではありませんが、世間はしばしば、誘惑された者に、誘惑した側と同じ罪の烙印を押します。それどころか、誘惑された者は誘惑者より重い罪になり、加えて報いをすべて負わなければならないときもあります。この世はそれほど不条理です。

妊娠と殺人

その夜眠りについたとき、ダビデがどんな気持ちだったのか、知りたいものです。新たな‘征服’に満足だったのか？また次に秘かに会うことを計画したのでしょうか？このような関係は、しばらくは恐ろしい強さで人を捕まえます。特に疑問に思うのは、ダビデはその夜、夕べの祈りをしたかどうかということです。もし王が夜ごと祈る習慣だったら、このときでさえ祈ったと考えられます。しかし祈ったとしても、それは心から起こる真摯な祈りではなく、上の空だったに違いありません。ダビデが祈ろうが祈るまいが、どちらにせよ、彼と主との関係はすでに断たれていました。神が沈黙されたことは、彼にとって初めてでした。おそらく、罪だと意識していなかったとしても、不愉快な感じが彼の心をかき回していたことでしょう。

聖書には、この二人の、ほかの密会については書かれていません。しかしダビデはおよそ一年間、自分にもバテ・シェバにも神にも、彼が犯した恐ろしい罪を認めようとはしませんでした。それは、サタンが彼にまだほかの罪を、さらにもっと重い罪を犯すように誘導することができるようにするためです。

私たちはこのことから何を学べますか？ひとつは、誘惑にあったときは、自分の気持ちを信用してはならないこと。激情は、私たちの意思をそちらへ引き寄せて、それまでは正しくないと思っていたことでも、正しいことのように見せます。誘惑にあったときは、聖書のみ言葉だけを信じること。それはイエス様も、荒野でサタンに誘惑されたときになさったことです（マタ 4：3-4）。

しかし、彼はまだ罪を認めなかったが、自分のしたことが知られているのではないかと、怖くなった。何人かは、バテ・シェバが秘かに来たことを知っていた。当時は結婚している女が一人で暮らすことはなく、夫の家族と暮らした。だから、バテ・シェバが真夜中に王宮に召し出されていなくなったことに、だれも気付かなかったとは、考えられないことだ。おまけに、宮廷の使い

の者が、一度ならず二度も王宮からウリヤの家まで行ったことは、当然、近所の召使いたちのうわさに上ったことだろう。

次にさらに最悪の事態が起こった。バテ・シェバが身ごもったのだ。いつか、家の年配の女が妊娠に気付いて、ウリヤに告げるにちがいないと、彼女は恐れた。罪を隠すことは、日ごとに難しくなっていた。すぐどうにかしなければ、バテ・シェバは石で打ち殺されると、ダビデは気付いた。モーセの律法ははっきりと言っている。“夫のある女と寝ている男が見つかった場合は、その女と寝ていた男もその女も、ふたりとも死ななければならない。あなたはイスラエルのうちから悪を除き去りなさい。”（申 22：22）王は石打ちを免れるだろうが、バテ・シェバの方は容赦されないだろう。

このことに焦って、ダビデは生まれてくる子供がウリヤの子供と思われるよう、画策した。バテ・シェバの夫を戦線からエルサレムに呼び戻し、二晩家に帰るように勧めたが、酔っていても、彼はダビデの思い通りにはしなかった。ウリヤは、休暇の特権をもらわなかった兵士仲間に誠実で、なぜそうするのか王に説明した。“神の箱も、イスラエルも、ユダも仮庵に住み、私の主人ヨアブも、私の主人の家来たちも戦場で野営しています。それなのに、私だけが家に帰り、飲み食いして、妻と寝ることができましようか。あなたの前に、あなたのたましいの前に誓います。私は決してそのようなことをいたしません。”（2サム 11：11）その通りだった。ウリヤは二晩とも王宮の召使い宿舎で眠った。

ウリヤは千人に一人もいないような男だったのだろうか。それとも、彼は妻と王との関係についての噂を聞いていたので、そうしたのだろうか？この種の噂が配偶者の耳に届くのは一番あとだというのが常だから、それはありそうもないが、ウリヤが本当のことを知っているのに、王の前でそれほど冷静で礼儀正しくいられるというのも、あり得ない。

ウリヤの若い妻は強姦され、夫に、世間に、神に対して耐え難い罪意識を持つことになりました。もしバテ・シェバが、夫の2日間の休暇中にエルサレムの街角で彼に出会っても、それがウリヤに会う最後のときだとは知らなかったでしょう。

王はウリヤを子供の父親にする状況が作れないとわかると、今度は彼を殺す作戦に出た。そして司令長官のヨアブに次のような手紙を書いた。“ウリヤを激戦の真正面に出し、彼を残してあなたがたは退き、彼が打たれて死ぬようにせよ。”（2サム 11：15）しかも彼は、その手紙をウリヤ自身に持って行かせることさえしたのだ。

一時の快楽の結果として、今やダビデは姦淫者で同時に殺人者となった。それ以来彼の手は、血で汚れたものとなった。ヨアブは王の命令を徹底的に実行し、ウリヤだけでなく多くの兵士が戦死

した。その結果、ダビデは甥を殺人者に変え、多くのイスラエル人女性を未亡人にした。ヨアブはそれ以来、王に対してさらに大きな影響力を持つようになった。

ダビデの罪を軽く見てはいけません。それは一時の激情による殺人ではなく、計画的殺人なのです。*「旧約聖書の女たち」からの引用はここで終わります。

ヘテ人ウリヤ

上の部分は 10 年前に書いたのですが、その後ウリヤの側からこの出来事について考えました。もしかしたら、ウリヤはダビデとバテ・シェバのことを知っていたかもしれません。少なくとも疑っていたと考えられます。家から遠く離れた戦場に駐屯して、心底愛している妻を日ごと夜ごと恋しがっている男のことを、想像してみてください。

この男に突然、休暇が出ます。それを知らされた彼の妻は、一番いい服を着て、おいしい料理を調えます。が、夫が家から 100 メートルほど離れたホテルで 2 晩過ごすなんて、どういうこと？野生の馬でも、妻の元へ帰る男を押しとどめることはできないといわれているのに。

ヨアブも彼の兵士仲間も、ウリヤが家へ帰らないなんて想像もしなかったことでしょう。しかし例えば、彼が出発するとき、仲間のだれかが「おまえは王のお気に入りか？こんなに手が足りないときに、どうして都へ呼ばれるんだ？伝言ぐらいに高官はいらない。そんなことは伝令の仕事だろう。王はなんのためにそんなに急におまえに用があるんだ？」と言ったと想像してみましよう。ウリヤが都に帰るよう急に呼び出された理由は、ヨアブにもちゃんと説明できませんでした。

きっとウリヤは、ラバからエルサレムまで 80 キロの道々、その謎についてよく考えたはずです。ダビデの王宮に入ったとき、もしかしたら、召使いたちの態度に何かおかしいと感じたかもしれません。意地の悪い召使いがいたら、「奥様がこの前の夜ここに来たことを、もう知っているのでしょうか」と言ったとも考えられます。もしウリヤがこんな言葉を耳にすれば、彼の心臓は張り裂け、全世界は崩れ落ちたでしょう。

ヘテ人であるのにイスラエル人の高官の美しい娘と結婚して、ウリヤは自分が特別で、幸せだと思っていたにちがいません。ところが今、疑いが彼を押しつぶしたのです。妻はほかの男を愛しているのか？相手は王なのか？よりによって、立派なダビデ王だということなのか？こんなときに、苦しみと嫉妬で裂けない胸があるのでしょうか？ほかのだれかが妻を横取りすることほど、男の自尊心を粉々にするものはありません。

ウリヤは、ダビデのような人物に仕えるのをことのほか誉れとっていました。ダビデはウリヤが知っている中で一番立派で正しい王でした。だから彼に限ってそんなことはないはずだ！それなのに、バテ・シェバは真夜中に王宮に行ったというのです。

その人のためにはいつ死んでもいいと考えていた王が、そんなあくどいやり方で、どうして自分の信頼を裏切ることができたのか、彼には理解できませんでした。ウリヤの正義感は強烈な衝撃を受けました。

この二日間、宮廷でウリヤのように振る舞うのは、優れた役者でなければできないことです。絶望や、王に対する圧倒的な失望を取り繕うのは、想像もできないほど苦しい努力だったでしょう。そして3日目、彼は自分を死に追いやる命令書を手にして、前戦へと送られたのです。

初めて、ダビデは自分の兵士一人の命を、なんの価値もないもののように扱いました。軍隊の中のひとりぐらい、まったく意味がないかのように。人間の歴史を見ると、人命に対するこのような態度はまぎれもない暴君の特徴です。これは、ダビデがサウルと同じ道に踏み込む、初めの一步でした。そのように、サタンはあの手この手を使って、ダビデを神から引き離そうとしました。

ヨアブはなぜ、殺人計画のことで王を諫めなかったのでしょうか？あとの話ですが、ダビデがイスラエルの人口調査をしようとしたことでは、彼はダビデを諫めました。ウリヤの場合、司令官ヨアブはエルサレムに使いを送って「このことについては、しばらく考えましょう。本当に王様は、我が軍の優秀な司令官ウリヤを殺せと言うのですか？こんなことをする理由を、私は知りたい。こんな秘密の処刑に関わるつもりはありません」と言うことも、できたはずです。

しかしヨアブは逆らわず、またウリヤも、ラバの城壁で確実に死ぬとわかっていながら、そこへ行くことを拒みませんでした。ウリヤは、ほかの兵士たちが危険な地点に彼をひとり残していなくなったことが、どういうことか分からないほど愚かではなかったはずですが、もはや彼は自分が死のうが生きようが、かまわなかったのです。自分の愛しい妻がほかの男の子供を身ごもっているのなら、生き残ることに何の意味があるのでしょうか？

神はしかし、この気高い男をお忘れになりませんでした。また、ウリヤの名前が忘れられるままにもされませんでした。サムエル記に記録されたことに加えて、ウリヤの名前は新約聖書の最初のページに書かれています。“ダビデに、ウリヤの妻によってソロモンが生まれた・・・”（マタ 1：6）神の目からすると、1000年経っても、バテ・シェバは依然としてウリヤの妻なのです。注目すべきは、新約聖書では彼の名前から‘ヘテ人’という表記が削除されていることです。イエス様のゆえに、ウリヤも神の民に加えられたからです。

みなさんは、ダビデのような冷酷な犯罪にはどんな罰がふさわしいと思いますか？ウリヤが酷使され、辱められ、裏切られ、見捨てられ、あげくに死刑を宣告されたのと同じようにされたらいいと思いませんか。

王の8番目の妻

来る日も来る日も、バテ・シェバは妊娠初期のつわりと、石で打ち殺される恐怖を、身内の目から隠していました。そうするうち、夫が戦争で殺されて二度と自分のところに戻ってこないと知らされたのです。彼女の嘆きと涙はどれほどのものだったのでしょうか。

葬儀のとき、そして喪に服しているあいだ、若い未亡人はどう考えていたのでしょうか？愛する人に死なれた者は皆、嘆き悲しみます。その人に悪いことをしたと知っていれば、なおさら痛恨は強くなります。死は、どんな自己防衛をも断ち切ってしまいます。伴侶の葬儀では、残された者は「あの人にもっと違うようにしてあげればよかった。あの人に感謝して、元気づけて、もっとほめてあげればよかった。あの人を批判したり、けなしたりすべきでなかった」など、考えたりします。あわれなバテ・シェバは、夫の死は自分せいだと考えて、どんなにみじめだったことでしょうか。

短くされた喪の期間が明けるとすぐ、バテ・シェバはダビデの王宮に移って、彼の数多い妻たちの一人となりました。懐妊のことだけでなく、ウリヤの死についての噂も、きっと宮廷中に、特にハーレムに広がっていたことでしょう。王に忠実な支持者でも、彼の行為を正当化するのは難しいとわかり、神の敵は喜びました。「言っただろ、信者とやらも他の者と同じ、いやもっと悪い。彼らは隠れてどんな悪いことでもする。そんなことを許す神など信じなくてもいい」。

ダビデの罪の最悪の点は、御言葉、つまり神をみくびったことです。王がそれをしたことで、十戒は重要ではないというメッセージを自分の民に送ったわけです。現在でも、浮気をするのは、家族や世間に同じメッセージを送っていることになります。

若い未亡人については・・・心の奥底で、新しい夫は死んだ夫の殺人者だったかもしれないという疑いを持ちました。姦淫と殺人を犯した人を尊敬できるだろうか？絶え間なく出てくるこんな疑いは、バテ・シェバのダビデに対する敬意を蝕んでいったにちがいません。公であれ内々であれ、結婚の誓いを破った人はみな、新しいパートナーの信頼を蝕むというジレンマに直面します。もし一人連れ合いを欺いたら、また次に同じことをするでしょう。

ほぼ1年が経った。王宮では、バテ・シェバが‘早産’の子供を産んで、ダビデの兄弟の名を取ってシムア（シャムア）と名付けられた（1歴3：5）。産まれたての赤ん坊に授乳しているあいだは、若い母親の心の痛みは少し鎮まったかもしれない。しかし子供の父親はその年、どうだったの

か？ダビデは良心の中に殺人と姦淫を抱えて、それで主の前に出られたのだろうか？彼は祈れたのか？焼き尽くす献げ物をし、賛美し、御言葉を読み、神の友として振る舞うことができたのだろうか？たぶん、外面的にはできただろう。しかし確かに、その年、ダビデは聖霊が働いた詩を一つも作らなかった。

ところがダビデは、のしかかる理性と感情、つまりやましい気持ちから逃れることができなかった。彼はのちに、このときのことについて次のように言い表した。

私は黙っていたときには、一日中、うめいて、
私の骨々は疲れ果てました。
それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、
私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。セラ（詩篇 32：3-4）

ダビデは惨めでした。罪の意識という恐ろしい重荷に生涯苦しむ人がどれほど多いことでしょうか？不貞、約束破り、子供に与えた苦しみなどが、昼も夜も心を重くします。そういう人は、憂鬱な気分の本当の原因に気付かないのかもしれませんが。現代に多いうつ病も、どれだけが罪の意識から来るものでしょう？

確かに、サタンは無能な策士ではありません。彼はだれを最初の火矢の的にすればいいか、よくわかっています。多くのクリスチャン指導者や牧師、治療専門家などがダビデと同じ罪に落ちます。するとどうなるでしょう？まず、彼らの教えから律法が消え、次には当然、福音も消えます。（罪が無視されたり否定されたりしていると、福音はいらなくなります。特に性的な事に関してはそうです。）最初、神学が本来の道筋から少し逸れて、それからだんだんと離れていきます。聖書の見方が徐々に変わり、それまでの伝統的なグループの友達がちっぽけで、なんというか非科学的に思えてきます。そしてこんなことが基となって、悲劇的な次の段階として、罪を認めないというようになります。

ウリヤの唯一の‘子羊’は、今はハーレムに住んでいます。好むと好まざるとにかかわらず、新参者は家のしきたりを学び、王のほかの妻たち一最年長者は、母親の年齢になっていた一と付き合っていかなければなりません。しかも、王の年長の子供は、彼女ぐらいの年です。

王の寵愛争奪戦は激烈でした。そしてだれもバテ・シェバに好意的ではないのはわかっています。年上の妻たちは、美しい新参者を競争相手、そして、特に彼女の先の結婚について王宮にはびこった噂から、男たらしとみなしました。

しかしバテ・シェバは、王妃たちのもう一つの競争の中で張り合わなければなりませんでした。つまり、だれの息子が王の跡継ぎになるのか？という競争です。女たちは、未来の王の異母兄弟に起こることも恐れました。生き残れるか、殺されるか？中東のハーレムには、そういうことがままあったのです。

だからバテ・シェバはいつも孤独だったにちがいありません。ハーレムのどのグループにも属さない彼女は、だれと一緒に日を過ごしたのでしょうか？けれど彼女は、権謀渦巻く宮廷の中であって、なんとか繊細で素朴なままでいました。このことは、20年後、間もなく新しい王が決まるというときに、分かります。

ラバ征服と人口調査

その間、ヨアブは‘水都’と言われるラバを攻撃した。この呼び名はおそらく一種の水路とトンネルからきたものだろう。その水道設備を破壊すると、都を征服するのにかかったのはわずか一週間たらずだった。ヨアブは王への忠誠を貫いて、手柄を王から奪うことはしなかった。都征服を完全なものにするため、彼はダビデを戦場へ招いた。

アモン人の王は、宝石で飾った34キロの黄金の王冠を被って、侵攻者たちに怯えて城にこもっていた(54)。ダビデは城に入ってから、この贅沢品を自分の頭におごそかに置いた。1000年後、彼の子孫が頭に載せられた茨の冠とは、なんという大きな違いだろう！

アモン人は、自分の国で強制労働させられたり、建設計画のためにイスラエルに連れてこられたりした。建設事業が、ダビデと周辺国との戦争が終わったことの現れとなった。アモン人がイスラエルに征服されて、ダビデの支配は今やユーフラテスからエジプト国境まで伸びていた。

素晴らしい成功を収めたとはいえ、新しい王冠を見せびらかすだけでは、ダビデには物足りなかった。彼は自分がどれほど強大な支配者になったかを、より具体的な形で証明したかったのだ。

それが、王国の人口調査を計画する元となった。歴代誌によると、この調査はラバ陥落の直後、あの罪がまだダビデの良心にのしかかっているときにもかわらず行われた(1歴20:21)。人口調査をしたいというのは、自分は主の前では“弱くてみじめ”だと常に思っている男の内面の現れと言える(詩35:10、40:17、70:5)。

ダビデの罪は統計に頼ることにあった。つまり、彼はイスラエルと周辺国の力の割合を、自分の国にはどれだけの戦士がいるか、どれくらいの税が集まるか比較することで、測定したかったのだ。主はアブラハムに、子孫を空の星のように増やすと約束された。同時に、常にご自分の民の

ために戦うと約束しておられる。ダビデにとって、この約束では不足だということだったのだろうか？良心の重荷になっている罪のため、彼が主の助けに信頼できないということが、ありえるだろうか？

教会や種々のキリスト教の組織は、構成員の意向に沿うため、み言葉をその都合にあわせるとき、同じ罪に陥ります。メンバーの数が教会や組織の実態を示すものではありません。危機のとき、御言葉に信頼して圧力に妥協しない人がどれくらいいるか、それが教会の本当の姿を語るのです。

歴代誌は、ダビデの人口調査は悪魔に唆されたのだと告げている。“ここに、サタンがイスラエルに逆らって立ち、ダビデを誘い込んで、イスラエルの人口を数えさせた。”（1歴 21：1）驚くことに、主は王に人口調査させる側だったと、サムエル記は言っている。“さて、再び主の怒りが、イスラエルに向かって燃え上がった。主は「さあ、イスラエルとユダの人口を数えよ。」と言って、ダビデを動かして彼らに向かわせた。”（2サム 24：1）

神は罪を犯すようにと、人を誘惑なさるでしょうか？それはあり得ません。聖なる神でありながら、どうして誰かが悪を犯すことを望まれるでしょうか？しかし、サタンが思う存分誰かを誘惑できるように、主が守りの手を引かれることもあります。それは国家全体にも起こり得ます。つまりこれが、上記の聖書箇所にある“主はダビデを動かした”ということです。

ダビデに起こったことがペテロにも起こりました。サタンの網にかかって、彼は主を否みました。しかし、想像してみましょう。もし主が守る手を彼から離されなくて、ペテロが罪の墓穴に落ちなかったとしたら、ペテロはどうなっていたでしょう。彼はあのおとき思ったように、イエス様は十字架の道を選ぶべきではなかったと、死ぬまで考えていたかもしれません（マタ 16：21－22）。ペテロが失敗して、この苦しい中で学んだのは、何千倍もよかったのではないですか。というのは、彼はその後半生、自分の罪の性質と、それを赦してくださる救い主が必要であることに気付いたからです。このように、主は悪魔の策略をご自身の良い目的のために用いられます。結局、サタンはこの世と主の民に対する主の計画を破壊することはできないのです。

ダビデの話に戻ります：戦争が終わるとヨアブは戦いの必要がなくなり、王は彼を人口調査の実行要員として呼び出した。ダビデは言った。“さあ、ベエル・シェバからダンに至るまでのイスラエルを数えなさい。そして、その人数を私に報告して、知らせてほしい。”ヨアブは信仰の模範者ではなかったが、その任務に不安を感じて、思わず言った。“主が、御民を今より百倍も増してくださいますように。王さま。彼らはみな、わが君のもの、そのしもべではないのでしょうか。なぜ、わが君はこんなことを要求なさるのですか。なぜ、イスラエルに対し罪過ある者となられる

のですか。”（1歴 21：2-3）しかし王が引き下がらないので、ヨアブは命令通りにするしかなかった。

それ以前では、イスラエルの人口調査は神の命令によってだけで行われた。それは危険なことだと考えられていて、災いを避けるために、登録された男は法で定められた身代金を払わなければならなかった（出 30：12）。人口調査で、ダビデは身代金に関しての規定を無視するように命令した。ヨアブと部下たちが割り当て分の調査を済ませるのに、9か月かかった。しかし彼らが都に戻る前に、城に重大な出来事が起こった。そしてそれは、事の流れを完全に変えてしまった。

再び ウリヤのただ一匹の羊

10年ほど前、預言者ナタンは、主が王とその子孫とに約束された永遠の契約について予言した。老預言者がダビデの姦淫の噂を耳にしたとき、彼は心底衝撃を受けたに違いない。このことは、国中の他のだれの場合より、ひどく彼を悩ませた。サウルと同じことを繰り返すのか？国はまた別の背教の王に支配されるのか？ナタンは言うべき言葉も、何をすればいいのかもわからなかった。彼は一年間、引きこもって主の指示を待った。

その年が過ぎて、子供が生まれた。しかもダビデに悔い改める様子はない。彼が自ら進んで間違いを告白し、悔い改めるまで、どれくらいかかるのだろうか？いったい、そんな日がくるのだろうか？ナタンが考えに耽っているとき、やっと主が来られ、預言者に、城へ行くように命じられた。“しかしダビデの行ったことは主のみこころをそこなった。主がナタンをダビデのところに遣わされた。”（2サム 11：27-12：1）(55)。⁵⁴

注目すべきは、預言者がバテ・シェバではなく、特にダビデに遣わされたことです。このようにして、主はだれが主犯かを明らかになさいます。この時ナタンは王の前に立って、悔い改めるようにという小言は言いませんでした。直接的な攻撃が、正当化の言い訳以外のものをもたらすことはほとんどありません。たとえば、「そうするしかなかった・・・あの人が運命の人だった・・・あれは世紀の恋・・・あの人なしでは本当の私ではないし、本当の幸せではなかった」など。最悪の言い訳は「神がこのすばらしい人を、私の人生に送ってくださった」。

⁵⁴ (55) この時点までに、ダビデの姦淫とウリヤ殺害が町や王宮で知れ渡っていたことが、どうしてわかったのか。それはそのことを知っている人がとても多いから。バテ・シェバの家族、ダビデの召使いたち、ヨアブの兵士たち。この種の噂は、秘密を保つにはあまりにも脆い。さらに、聖書には主の敵たちが、ダビデの罪のことで嘲笑っていると記している。2サム 12：14 参照。

しかしナタンは、王に同情の言葉も言わなかった。もし頑固な人に福音を説いても、その人は心を閉ざすだけだということを、彼は知っていた。彼の考えたとおりに、ダビデは最初は自分に死刑宣告するよう誘導されたが、そのあと、自分の罪の重さを直視するよう導かれた。さもないければ、ダビデはその日以来、彼の家族や国が直面する厄災のことで、神を非難していたことだろう。

面と向かって王を非難せず、ナタンは彼が解決すべき法廷例を持ち出した。持っているのは一匹の子羊だけという貧しい男の話をした。彼と彼の子どもたちは、その小さなかわいい子羊を家族のように大事にしていた。ところが、悲劇が彼らの上に襲いかかった。となりの金持ちの家に客が来たが、金持ちは勝手な理由でたくさん持っている自分の羊を料理したくなかった。おそらく下手な言い訳を連ねて、貧しい家族の一匹だけの子羊を奪い、それを屠って客の食事にした。

ダビデはその話を実際に起きた悲劇と受け取って、その犠牲者に代わって怒った。羊飼いだっただけの若いとき、彼は羊たちをそれぞれ個性あるものとして、彼らのためには命を賭けるまでに愛した。今、彼は国の最高裁判官として、その金持ちのような冷酷な男は死刑にすると言い渡した。さらに、悪人はその貧しい家族に子羊の4倍分を弁済するべきだと断罪した。

だがしかし、ダビデが自分に有罪判決を下す意見を言ったあと、ナタンは、その話が実はだれのことかを聞かせた。“あなたがその男です。イスラエルの神、主はこう仰せられる。『…それなのに、どうしてあなたは主のことばをさげすみ、わたしの目の前に悪を行なったのか。あなたはヘテ人ウリヤを剣で打ち、その妻を自分の妻にした。あなたが彼をアモン人の剣で切り殺したのだ。』（2サム 12：7、9）

今やダビデの目が開かれ、新しい光が、あの恋愛事件がいかに汚いかを悟らせた。自分は何ということをしてしまったのだ一姦淫し、人殺しをした。主は本当にこんな恐ろしい言葉を使って、彼の行為を言い表されたのか？ そうなのだ。モーセの律法は、この両方ともに死刑を宣告している。ダビデはそれに十分値することに気がついた。実のところ、主が御顔を彼から永久に逸れさせても、当然のことだ。

しかしダビデにはまだ口を開くことは許されなかった。彼はまずナタンの言葉の続き—自分の罪の結果についての恐ろしい預言—を聞かなければならなかった。“『今や剣は、いつまでもあなたの家から離れない。…』主はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行なおう。』（2サム 12：10-12）

神の律法をそのまま示すことは、常に人の罪の結果をあばくことを伴います。その結果は、罪が赦されたとしても、単に罪人の人生から消えるわけではありません。恵みは、原因と結果の法則を取り除くものではありませんが、神の赦しを受けることは、自分がした悪い行いのせいで苦しんだ自分にも、ほかの人たちにも救いとなります。たいてい、罪のしっぺ返しはどのようなわけか、その罪と同じものになるようです。殺人はさらに殺人を生み出し、姦淫はまた次の姦淫を引き起こします。そのように、先祖の罪は、主に背いた者の3代、4代後の世代にまで及んで罰せられるのです（出 34：6-7）。

ナタンが話し終わったとき、ダビデはやっと言った。「私は主に対して罪を犯した」（2サム 12：13）。言い訳も、反論も、状況の弁解も、異議も言わなかった。ダビデは自身の目で、もう自分は立派な男ではないと見て取った。そうなのだ。自分は世界一みじめな罪人で、頭の上には神の怒りが載っている。しかしながら、一言も言い返さないでモーセの律法に示された死の宣告を受け入れたことで、ダビデの信仰が顕わになった。

王の罪の告白のあと、ナタンは無条件の赦免を言い渡した。“主もまた、あなたの罪を見過ごしてください。あなたは死なない。”（2サム 12：13）。「見過ごす」という動詞はヘブル語で‘覆う’と‘取り去る’の両方を意味する。主がダビデの罪を取り去られたので、彼は律法に規定されている死罪を受けなくて済んだ（レビ 20：10、24：17）。ずっと後に、似てはいますがナタンの言葉と対照的に、神はご自身の愛する子に「おまえは死ななければならない。おまえの先祖のダビデが犯した姦淫と殺人の混じった杯を飲まなければならない」と宣言されなければなりませんでした。

ウリヤは唯一の‘子羊’を失いましたが、父なる神もダビデの罪が赦される前に、唯一の愛しい息子を失うこととなります。

ダビデの悔い改めの詩

ナタンに罪と向き合わされたすぐあと、落ち込んだ王は詩篇 51 を書いた。表題は“指揮者のために。ダビデの賛歌。ダビデがバテ・シェバのもとに通ったのちに、預言者ナタンが彼のもとに来たとき”。そのときまで、ダビデは自分の敵が加える大きな苦しみについて詩を書いていた。今彼は、自分自身の心の中にある最悪の敵に気付いたのだ。

神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、
あなたの豊かなあわれみによって、
私のそむきの罪をぬぐい去ってください。
どうか私の咎を、私から全く洗い去り、

私の罪から、私をきよめてください。
まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。
私の罪は、いつも私の目の前にあります。
私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、
あなたの御目に悪であることを行ないました。
それゆえ、
あなたが宣告される時、あなたは正しく、
さばかれる時、あなたはきよくあられます。
ああ、私は咎ある者として生まれ、
罪ある者として母は私をみごもりました。
ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。
それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。
ヒソプをもって私の罪を除いてきよめてください。
そうすれば、私はきよくなりましょう。
私を洗ってください。
そうすれば、私は雪よりも白くなりましょう。(詩 51：1-7)

ダビデは自己弁護しないで言った。「私の罪、私の犯罪、私の悪行」。彼は明らかに自分が罪人であることを知っていたが、どれほどひどい罪人であるかは、本当のところわからなかった。このときには、ダビデは自分が罪の中で胎にやどって、母の胎にいたときから罪があることを自覚していた。もし主がご自分の前から彼を放り出し、聖霊を取り去られても、それは正当で当然だったのだ。

それでもダビデは神の慈愛に望みを賭け、自分に対する恵みと憐れみを願った。彼は、自分に純粋な心を造り、魂を新しく、しっかりしたものにしてくださいと、主に切望した。押しつぶされた心を、神がお見捨てにならないようにと、彼は願った。これは、サウルが墮落したときに示したのとは違う信仰であることを表している。主に背いた王は、預言者サムエルから神の審判を聞いた時から、神の慈しみを信じなかった。

以前に戻るには神の力強い御業のほか道はないと、ダビデは悟った。罪から解放されるには、自分の力は助けにはならない。主の働きが必要だ。しかし、何を根拠にして主が働かれるのか？正しい神は、単に優しいだけで彼をお赦しになることはない。ウリヤは死んでしまった。バテ・シェバの人生は破滅してしまった。ダビデは自分の民と家族に、おぞましい手本を曝してしまった。誰かが死ななければならなかった。彼の罪が赦されるには、血のほかに足るものはない。彼のよ

うな罪人は、生け贄の子羊の血に浸したヒソプで清めなければならない。そうしてはじめて、血の宿恨の束縛から解放される(56)。⁵⁵

ナタンが王に罪の免除を言い渡したとき、こう言いました“「その主があなたの罪を取り除かれる」”。ダビデの罪は彼から“取り除かれ”、神の子羊の上に置かれました。それからずっと後に、子羊はそれを自分の身に負って、十字架へと進まれることになります。ダビデの罪はその子羊の血によって“覆われる”のです。身代わりが死に、それによって罪人は生きながらえる。神はダビデの罪の赦しのため、この高い代価を払わなければなりませんでした。

王が赦しの言葉を聞いたとき、巨大な重石が彼の良心から落ちていきました。漠とした恐ろしい苦悩は消え去りました。彼は再び主と語り、主の声を聞けるようになりました。もはや彼の心は自分を咎めることもなく、彼の祈りが、隠した悪行に邪魔されることもありません。主は再びダビデに近寄られ、主の愛は以前にも増して素晴らしく思えました。

“しかし、罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました”（ロマ5：20）。憎むべき罪に落ちて後に悔い改めた者は、自分と神を新しい目で見えるようになります。その人は神の恵みの深さ、高さ、長さ、広さがわかり始めます。このようにして、神はご自分の子供たちの罪でさえ、真の祝福に変える事がおできになるのです。この恵みは、他の罪人たちにそのことを伝えたいと願う、新しい望みがダビデの心にあふれるという、計り知れない奇跡をもたらしました。

私は、そむく者たちに、
あなたの道を教えましょう。
そうすれば、罪人は、あなたのもとに帰りましょう。
主よ。私のくちびるを開いてください。
そうすれば、私の口は、
あなたの誉れを告げるでしょう。（詩 51：13、15）

墮落する前には、ダビデにこのような思いは持っていなかったようです。しかしこのあと、彼は惨めな罪びとに神の恵みを宣べ伝えるようになりました。

バテ・シェバの子どもたち

⁵⁵ (56) ヒソプは茎の先端に房のある芦で、祭司が罪を赦してほしい人に、生け贄の血を振りかけるのに使った。

物語はまだ終わりではありません。ナタンは王宮を去る前に、王にもうひとつの厳しい言葉を告げました。“・・・しかし、あなたはこのことによって、主の敵に大いに侮りの心を起こさせたので、あなたに生まれる子は必ず死ぬ。”（2サム 12：14）ダビデの罪のせいで、主の御名がイスラエルの内外で嘲りの的となりました。嘲る人々は、神がダビデの悪い行いを赦さないということを見せたいのです。王の存在は抑止力として働かなければなりません。ダビデの罪から離れなさい。そうでなければ、彼が被ったものをあなたも受けなければならない、と。

このため、公人が犯した罪は常に公にされるのです。教職者は、性的な罪に誘惑されたり、だれかを誘い込んだりするとき、このことを覚悟する必要があります。カトリック教会は、長い間、隠そうとしていましたが、小児愛者の祭司の悪行を隠しおおせませんでした。近年、プロテスタント教会の牧師館の醜聞が一つずつ、やはり白日の下に曝されました。このようなスキャンダルは、公衆の目に映るキリスト教への信用を傷つける一方、メディアが主の御名を嘲るもととなります。だから神は、このような罪を不可とすることを公にしなければならないのです。犠牲者を黙らせた、悪行をなかったことにする教会を、神は祝福されることはありません。

もしあなたに隠している罪があるなら、できるだけすぐに十字架へ持って行きなさい。言い訳してはいけません。告白し、はっきりと罪を認めて、現在起こっている結果を謙虚に受け入れなさい。そうしないなら、あなたの恥は屋根の上から（今ならメディアに）大声で叫ばれ、皆が聞くこととなります。もしあなたが生きていないとしても、死後または最後の審判のときにそうなります。

あの夜ダビデは、将校の美しい妻と別れることは無理だと思いました。禁じられた情熱に捕らわれると、それを手放しては生きていけないと、単純に思うものです。もし情熱の方を選べば、あとで自分や子どもたちにどんなことが起こるかわかりません。おまけにいろんな苦しみが予告なしにやって来ます。結婚が破綻すると常に心は傷つけられ、子どもたちの心は大きな危機の中に置かれます。

ナタンが予言したことがダビデに起こりました。主は彼の小さな子供を打たれたのです。あなたは、神がそんなことをなさるのだろうか、という疑問を持つかもしれません。両親の罪のために、主は罪のない子供を打たれるのですか？そのとおり、この国（フィンランド）の何百何千というアルコールや離婚の犠牲者から分かるように、主はそれを実行されます。笑い始めたかわいい赤ん坊、小さいシメアがひどい病気になりました。バテ・シェバは耐え難い苦痛で顔をこわばらせて、赤ん坊のベッドの側に一週間座り続けました。

この間、子供の父親はなにも食べず、飲まず、王宮の床に横たわっていた。召使いたちは心配した。王様はひどい病気なのだろうか？もう若くないのだから。王様がご自分に何かしたら、どう

しよう？しかしダビデは、彼らがどんなに言っても、起きようとしなかった。小さなシメアのベッドの横にいて、幼子が弱っていくのを見、そしてバテ・シェバの恐ろしい苦痛を見ていることは、彼には耐えられなかったに違いない。これは、ダビデにもたらされた、子供のことでの初めての大きな悲しみだった。しかし、これから先にはもっと悪いことが待っていたのだ。

1000年後、父なる神は、ダビデと同じ嘆きを耐えられました。御子が十字架の上で苦しんでおられる間、父なる神が天の神殿の床に横たわっておられるのを、想像することができます。

ダビデは子供が病気のあいだ、御心を変えてくださるよう神に頼みました。“主が私をあわれみ、子どもが生きるかもしれない、と思ったからだ。”（2サム 12：22）しかし一週間後、赤ん坊のシメアは死にました。次にはなにが起こるのだろうと、宮廷中が恐れましたが、ダビデは起き上がって聖所へ行って祈り、きちんと食事をして皆を驚かせました。彼のしたことは、サウルと違って、自分は神の御心に従うのだということを表したのです。

しかし子供を亡くしたのはダビデだけではありません。バテ・シェバも亡くしたのです。ダビデは彼女にどんな慰めが言えたでしょう？彼女は一年という短い期間に、夫も子供も失いました。両方ともダビデの罪のせいでした。バテ・シェバは夫の面前で「どうして私を誘惑したの？私をウリヤから取り上げるなんて！あなたは人殺しよ。私は知っているのだから！」と、叫びたくなかったのでしょうか。女は自分の夫を殺した男を、そのことを知っていながら、愛することができるのでしょうか？あなたはどう思いますか？

もし彼らが問題の夜の出来事について話し合うことがなかったなら、お互いの心底からの交わりは生み出されません。バテ・シェバはダビデに「私はあの人を愛していました。彼は信義を重んずる人でした」と言う機会を見つけるべきでした。そしてダビデは妻に、単刀直入に赦しを乞うべきでした。彼らはそういう会話をしたのでしょうか？

詳しく伝えられた内容から、彼らが話し合ったこと、後にはお互いの関係が深まっていったことがうかがえます。ダビデのハーレムの女たちが、それぞれ息子一人を産んだだけに引きかえ、バテ・シェバは息子4人を産んでいますし、娘も同じくらい産んだようです。彼女はダビデが最後に娶った妻で、彼女のあとには新しい女はハーレムに入れられなかったようです(57)。⁵⁶ 詩篇 51 が礼拝で歌われるのを聞いたとき、バテ・シェバは夫の生まれ変わった心をかいま見ることができました。彼の真っ直ぐで誠実な信仰が分かったことで、彼の過去の悪い行いを赦せるようになったに違いありません。

“ダビデは妻バテ・シェバを慰め、彼女のところにはいり、彼女と寝た。”（2サム 12：24）バテ・シェバがまたすぐに身ごもって男の子を産んだとき、父はその子をソロモン（‘平和’という意味）と名付けた。赤ん坊にその名をつけたとき、ダビデはすでに、主が神殿を建てる者としてソロモンを選ばれたことを知っていた。（1歴 22：9-10）

“彼女が男の子を産んだとき、彼はその名をソロモンと名づけた。主はその子を愛されたので、預言者ナタンを遣わして、主のために、その名をエディデヤと名づけさせた。”（2サム 12：24b-25）この愛称は、両親の慰めになったにちがいない。ダビデの罪が、彼らの愛する息子に仇することはないだろう(58)。⁵⁷

ナタンはソロモンの宗教教育をするために招かれ、彼を通してその母親も御言葉から多くの真実を学んだようだ。王妃と預言者は生涯の友となった。彼らは数十年後、ダビデの死の枕辺に一緒にいた。ダビデはこの二人だけに、主がソロモンの将来について話されたことを打ち明けた。そしてダビデは妻に、彼女の息子に彼の王座を継がせると誓った。他の者たちはその後何年も、この経緯を知らないでいた。

母親が違う 19 人のダビデの息子の中から、醜聞にまみれて生まれた男子が選ばれたのは、受けるに値しない者への主の恵みの現れです。このことから、受胎すれば、神の目から見るといらない子供はないのだ、ということがわかります。小さなシメアも、胎に宿ったときから神に愛された特別な者でした。彼の短い生涯にも、大きな意義があったのです。

ダビデとバテ・シェバは、3番目の息子に、誠実な預言者への心からの感謝を表して、ナタンと名付けた。王は、自分の罪を指摘したからといって、彼に恨みを持つことはなかったのです。彼らの4番目の息子に関して分かっているのは、名前がショバブであることだけです。（2サム 5：13-14、1歴 3：5、14：3-4）ハーレムでの生活は相変わらずやかいでしたが、これ以後、バテ・シェバの時間と関心は、子供たちの世話に向けられたことでしょう。

神殿の地が見つかる

ヨアブと部下たちは 10 か月近くかかって国を巡り、エルサレムに戻って人口調査の結果を報告した。イスラエルの 9 部族の地域には、80 万人の強い男たちがいた。彼らは剣を使うことができ

⁵⁷ (58) エディデヤという名前にはダビデの名前と同じ子音がある。

て、軍隊に入るに十分な男たちだった。ユダだけで、50万人だった(59)。⁵⁸ 10部族のあいだでは、その報告についての疑いと、強大な軍事力を誇示するユダ族に対する妬みがあった。

ダビデがまた後悔の念に襲われて、主に詫びた。“私は、このようなことをして、大きな罪を犯しました。主よ。今、あなたのしもべの咎を見のがしてください。私はほんとうに愚かなことをしました。”(2サム 24:10) 翌朝、老預言者ガドが、神の言葉を伝えに宮廷を訪れた。人口調査は神の民に深刻な結果を及ぼすだろう(60)。⁵⁹ そして王に3つの選択肢が提示された。“七年間のききんが、あなたの国に来るのがよいか。三か月間、あなたは仇の前を逃げ、仇があなたを追うのがよいか。三日間、あなたの国に疫病があるのがよいか。”(2サム 24:13)

これらの3つ厄災はすべて、申命記の「呪いのリスト」にある。主は其中で、背教に落ちた民を、戦いと飢饉と疫病で脅しておられる(申 28)。今、その厄災の一つが神の民の上に落とされようとしているのだ。王はどれかを選ばなければならない。なんと恐ろしい選択だ！ダビデは10年ほど敵に追われ、3年間の飢饉を耐えた経験がある。ついに彼は、人の手にかかるのではなく主の手にかかりたいと答えた。彼が言いたかったのは、疫病を選ぶか、神にすっかりおまかせするかどちらかということだった。

そこで主はイスラエルに疫病を送られた。第一日目には‘ダンからベエルシェバまで’、イスラエルの北から南の境までで7万人の人が死んだ。その結果、ダビデが勢力を誇示したために始めた人口調査だったが、疫病のためにその数が大きく違ってしまった。

最初の日、流行病はエルサレムまでは届かなかった。二日目、ダビデは粗布を着て、イスラエルの長老たちに囲まれてシオンの山に立った。突然、ダビデは空の上に神の御使いを見た。御使いは、剣を手にしてエルサレムに近づいていく。そのとき、昔あった出来事が再び同じように起こった。ダビデは地に体を投げ出して、熱心に祈った。“民を数えよと命じたのは私ではありませんか。罪を犯したのは、はなはだしい悪を行なったのは、この私です。この羊の群れがいったい何をしたというのでしょうか。わが神、主よ。どうか、あなたの御手を、私と私の一家に下してください。あなたの民は、疫病に渡さないでください。”(1歴 21:17) (61)⁶⁰ 天の国で神が言われた。「もう十分だ」。ここで、先ほどの‘昔あった出来事’というのを確かめましょう。死の御使いが

⁵⁸ (59) この数字はサムエル記からのもので、歴代誌によると、ユダは47万人で、イスラエルは110万人(1歴 21:5)となっている。違いは僅かだ。税と軍役が免除されていたレビ人は含まれていない。なぜか、ベニヤミンも人口調査から外されている。

⁵⁹ (60) ダビデの歴史のこの部分にガドの名前があるのは、人口調査はラバ征服から間もなく行われたことを明らかにしている。ガドは、ほぼ30年前にダビデがアダラムの洞窟に行って以来、彼の一団と一緒にいた。これは、老預言者の最後の働きだったようだ。

⁶⁰ (61) 家族という言葉の代わりに、ユダヤ人は‘家/部屋’という言葉を使う。

エルサレムに近づいている真下に、エブス人のアラウナが息子たちと一緒に小麦の打穀をしていた(62)。⁶¹ そこはシオン砦の後ろの頂きにあつて、モリヤ山と呼ばれていた。そのてっぺんは比較的平らだったので、穀打ち場として整備さ

れていた。風が吹いて、実から殻をよく吹き飛ばす。アラウナと息子たちは御使いを見て驚いて、洞穴に隠れた(63)⁶²

まさにその山の頂は、かつてアブラハムが自分の一人息子を神に捧げるため、ナイフを振り上げた所でした。同じ場所で、主の御使いが「もう十分だ」と彼に叫び

ました。主が二度、同じ場所で生け贄を止められたとは、なんと驚くべきことでしょう！ダビデの嘆願で、神は疫病を止められました。「どうか、あなたの御手を、私と私の一家に下してください。」—1000年後、ダビデの32代目の子、イエス様はこれに似た祈りを父なる神に祈られました。「彼らは羊にすぎません。神よ、あなたの御手を彼らの代わりに私に下してください。」そしてイエス様は、ダビデの罪と全世界の罪を十字架まで負って行かれました。それは、その山で起こった出来事と同じでした。

預言者ガドはすぐに、もうひとつの言葉—「ダビデは上って行って、エブス人オルナンの打ち場に、主のために祭壇を築かなければならない」(1歴21:18)—を伝えに、その場所へと急いだ。ダビデもそこに祭壇を立てるつもりだった。王は一瞬もためらわず、アラウナから麦打ち場と雄牛を買い取った。彼はさっそくそこに祭壇を立て、生け贄を屠った。すると突然、天から火が降って生け贄を焼き尽くした。このことで、神はダビデの生け贄を受け入れたことを、お見せになった。そのとき、疫病は止み、エルサレムは厄災から解放された(64)。⁶³

主はこのようにして、ダビデに未来の神殿の地を示された。“そのとき、ダビデは主がエブス人オルナンの打ち場で彼に答えられたのを見て、そこでいけにえをささげた。モーセが荒野で造った主の幕屋と全焼のいけにえの祭壇は、その時、ギブオンの高き所にあった。ダビデは神を求め

⁶¹ (62) エブス人はダビデが征服する以前からエルサレムに住んでいる人々である。アラウナはヘテ人の名前だが、エブス人といわれている。アラウナは貴族を意味する。彼は元はエルサレムの支配階級に属していたようだ。彼の名前は、よく間違えて‘オルナン’と発音される(1歴21:18)。多くのヘテ人がイスラエルに住んでいて、ウリヤもその一人だった。

⁶² (63) 伝説によると、洞窟の上の岩は、後に至聖所となった。その岩はまだ岩のドームの下にあると主張する人がいる。

⁶³ (64) 2サムエル24では、打ち場の値段は銀50シェケルということだが、それとも1歴代誌21で言われるように、金600シェケルだったのだろうか？ダビデは最初、打ち場だけをそれより低い値で買ったが、その後で頂上全部を高額で買い取った。注目すべきは、王は臣民(イスラエルに住む外国人でさえ)から土地や家畜を決して没収することなく、その所有者に全額支払ったことだ。

て、その前に出て行くことができなかった。主の使いの剣を恐れたからである。そこで、ダビデは言った。「これこそ、神である主の宮だ。これこそイスラエルの全焼のいけにえの祭壇だ。」”

(1 歴 21 : 28 – 22 : 1) 後にソロモンがこの地に神殿を建てた、と書かれている。“こうして、ソロモンは、主がその父ダビデにご自身を現された所、すなわちエルサレムのモリヤ山上で主の家の建設に取りかかった。彼はそのため、エブス人オルナンの打ち場にある、ダビデの指定した所に、場所を定めた。” (2 歴 3 : 1)

歴史的なあの日、ダビデの子が架かって死なれた十字架が、同じモリヤ山の上に立てられました。イエス様はアブラハムとダビデが祭壇を立てた、その山で死なれました。カルバリはその神殿からあまり離れていません。

モリヤ山でのダビデの最初の生け贄は、疫病を止めました。千年後の最後の生け贄もそうです。御使いの剣は、イサクを打ちませんでした。それはイスラエルを打つことも止めましたが、イエス様に全力を振るいました。神の怒りは、モリヤ山の上で、完全な生け贄のイエス様を攻め、その代わりに人間は恐ろしい呪い、地獄の炎から解放されたのです。

ここで、だれがダビデを人口調査に駆り立てたのか、という疑問が出てきます。主なのか、サタンなのか？ (2 サム 24 : 1、1 歴 21 : 1) 最後の結果を見ると、そこには主の御手があったことを認めざるを得ません。主は善なる御手で事を導き、悪魔の悪賢い陰謀やダビデの墮落をも、ついには主の永遠の王国の益に変えられるのです。自分が破滅した時、罪を認めて神に告白し、主の救いの力と恵みに依り頼むとき、私たちにもこの事が実現します。

神殿用具の調達

神のために働くという王の熱意は、彼が罪に落ちてからも冷めなかった。むしろその反対だった。国境を定めて都を建てる計画は、統治を始めてから 20 年で彼の思うように運んだ。礼拝の改正と神殿建設の計画は、次の 20 年間、彼が情熱を注ぐものとなった。老いていく王は、この2つの事業に全身全霊を傾けた。

ダビデは子供のときから、主の家を大切にしていました。彼は詩篇 23 に、いつまでも主の家にあこがれる思いを、感動的に書いています (詩 23)。神の恵みに対する同じ気持ちは、彼のほかの詩の多くにも詠われています。つぎの詩を読んで、あなた自身と主の家、教会との関係についてよく考えてみてください。

主よ。私は、あなたのおられる家と、
あなたの栄光の住まう所を愛します。(詩 26:8)

私は一つのことを主に願った。
私はそれを求めている。
私の命の日の限り、主の家に住むことを。
主の麗しさを仰ぎ見、
その宮で、思いにふける、そのために。(詩 27 : 4)

さいわいなことよ。
あなたが選び、近寄せられた人、
あなたの大庭に住むその人は。
私たちは、あなたの家、あなたの聖なる宮の
良いもので満ちたりるでしょう。(詩 65 : 4)

私は苦しみの中に主を呼び求め、
わが神に叫んだ。
主はその宮で私の声を聞かれ、
私の叫びは、御耳に届いた。(2サム 22 : 7)

すでに、ダビデは恵みの手段の重要性を理解していました。み言葉が語られ、生け贄が献げられるために、神殿と礼拝が必要であることが、彼には分かっていました。彼の一番の夢は、自分の民が主と会うために、すばらしい神殿をエルサレムに建てることでした。

しかし、そうにはなりませんでした。王は息子ソロモンに自分の夢を次のように語っています“わが子よ。私は、わが神、主の御名のために宮を建てようとする志を持ち続けてきた。ある時、私に次のような主のことばがあった。『あなたは多くの血を流し、大きな戦いをしてきた。あなたはわたしの名のために家を建ててはならない。あなたは、わたしの前に多くの血を地に流してきたからである。見よ。あなたにひとりの子が生まれる。彼は穏やかな人になり、わたしは、彼に安息を与えて、回りのすべての敵に煩わされないようにする。彼の名がソロモンと呼ばれるのはそのためである。彼の世に、わたしはイスラエルに平和と平穩を与えよう。彼がわたしの名のために家を建てる。彼はわたしにとって子となり、わたしは彼にとって父となる。わたしはイスラエルの上に彼の王座をとこしえまでも堅く立てる。』”(1歴 22 : 7-10)

主はそれまでは、戦争や侵略でダビデの果たした役割について、何も言われませんでした。今、ダビデの血まみれの手が‘平和の主’の神殿を建てることは許さないと言われます。その禁止の命令は、ダビデには思いがけなかったようで、彼の生涯最大の失望だったかもしれません。

このような禁止の言葉を聞くと、ほかの支配者は、単に「それなら、私の息子にさせてください。私はこの事業から手を引きます」という者もあるかもしれません。しかしダビデはそうではありませんでした。彼は、自分が生きている間に神殿が建つのを見られないことは受け入れましたが、青写真や神聖な宗教工芸品についての準備は続けました。用具を調えることについてはどうでしょうか？それは禁じられませんでした。そこでダビデは、息子が建物を建てるのが容易になるよう、可能な限りの準備をすることを決意しました。

歴代誌によると、神殿の建築材料を集め始めた時には、すでにダビデの財宝蔵は戦利品でいっぱいでした。宝石、金、銀に青銅などその量は、計り知れないほどでした。蔵には、征服した国の偶像はありません。それらは即座に壊されていたのです（1歴 14：12）。王はその戦利品を全て神殿事業のために献げました。

“そして、ダビデは命じて、イスラエルの地にいる在留異国人を招集し、神の宮を建てるため石材を切り出す石切り工を任命した。ダビデは、門のとびらの釘および留め金用の鉄をたくさん用意し、青銅も、量りきれないほどおびただしく用意した。また、杉の木も数えきれないほど用意した。シドン人とツロ人がダビデのもとに杉の木をおびただしく運んで来たからである。”（1歴 22：2-4）

20年後、準備が完了したとき、ダビデは言った。“見なさい。私は困難な中にも主の家のために、金十萬タラント、銀百万タラントを用意した。また、青銅と鉄はあまりに多くて量りきれない。それに、木材と石材も用意した。あなたが、これらにもっと加えてほしい。”（1歴 22：14）本当に王は、そんなに大量のものを戦利品で集めたのでしょうか？それともこの写本が書かれたとき、ゼロの数を間違えて多く書いたのでしょうか？

礼拝の改正(65)⁶⁴

当時イスラエルの礼拝は、主にギベオンとエルサレムの二カ所で行われていた。一カ所は、首都から 10 キロほど離れたギベオンの丘の上に立っている、古い幕屋だった。それは元のものではなく、おそらくモーセが立てたテントを模したものだ。ツアドクという大祭司がそこで生け贄

⁶⁴ (65) 歴代誌の記者は、ダビデの行政のことより、礼拝所改正に関する記述について、はるかに多くの部分を割いている。歴代誌は、紀元前 6 世紀のバビロン捕囚のあいだに、さらに古い資料から集約された。

を献げていた。またエルサレムには、これのほかにもう一つ、ダビデが契約の箱を置いたテントがあって、ダビデの老預言者エブヤタルがここに仕えていた(66)。⁶⁵

今ダビデは、かつて“預言者学校”でサムエルから受けた指導に従って、モーセの律法を基に礼拝全体を編成し直そうと決めた。そのときにはサムエルが亡くなって 20 年経っているのに、改革の背後に彼がいることがどうしてわかるのか、というと、これに関した事柄の中に彼の名前が出てくるからだ。(1 歴 9 : 22)

神殿が完成してからダビデが気づいたことは、職務改正のためには、小さな移動式幕屋で礼拝していたときより、さらに多くの手が必要だということだった。そこでレビ人の仕事を再編成すると、改正はうまくいった。ユダヤ人が幕屋を運びながら荒れ野をあちこちさまよっていた間、モーセの律法はレビ人の仕事を分割していた。今は礼拝するための建物があるのだから、それらの職務は以前に戻されなければならなかった。

荒れ野では、レビ人は 30 歳になってから職務に就いていたが、このときは年齢を 10 歳低くされた。そこで礼拝の仕事をする人数が 38,000 人に増えた。ダビデは言った。“そのうち、主の宮の仕事指揮する者は二万四千、つかさとさばきつかさは六千、そして、四千人は門衛となり、四千人は私が賛美するために作った楽器を手にして、主を賛美する者となりなさい。”(1 歴 23 : 4-5)

レビ人の 75 パーセントは、門や聖なる物など神殿周辺の管理、15 パーセントは人々に神の律法を教えて、国全体を管理する仕事に当たった。しかしダビデの心を一番に占めたのは音楽だった。彼は全レビ人の 10 パーセント以上、すなわち 4000 人をその任務に就かせた。想像してみてください。4000 人が賛美する場面を！

厳かな行列とともに神の箱がエルサレムに運び込まれたとき、神殿の音楽が壮大に始まりました。音楽の才能のあるレビ人が、特別にこのときのために採用されたのです。王自身、詩篇の半分の歌を作曲、作詞した才能豊かな詩人でした。全部で 73 篇を作っています。しかし、ダビデが現代でいうストラディバリウスでもあることを、何人が知っていたでしょう。彼のように才能ある楽器のデザイナーであり、制作者なのです(1 歴 23 : 15)。少年時代、父親の羊の番をしていたとき、ダビデは時間をむだにしませんでした。荒れ野で、彼は音楽の基本を身につけ、柳の葉で笛を

⁶⁵ (66) ダビデの時代、イエスの時代のように、二人の大祭司がいた。エブヤタルはアロン（エリの末）の息子イタマルの子孫で、ツァドクはアロンの息子エルアザルの子孫である。

作り、おそらく立琴も作ったのです。世界の歴史の中でも、彼のように多種にわたる才能のある人物は見当たりません(67)。⁶⁶

そのときの合唱団のメンバーで、歌と楽器の両方ができる者は 288 名だった（1 歴 25：7）。彼らはそれぞれが 12 人で構成する 24 の合唱団に分けられた。神殿音楽家の仕事は、預言者の地位に似通ったものと考えられた。“立って朝ごとに主をほめたたえ、賛美し、夕べにも同じようにすること。”（1 歴 23：30）ダビデは、曲を作り霊的な歌を歌うには聖霊の働きが必要だと分かっていた。歌を通して言葉が、おそらく説教より力強く、人々に最もよく広がることも彼は知っていた。

レビ人の中の 3 人の最も優れた音楽家たちがこの事業で王を助けた。“また、ダビデと將軍たちは、アサフとヘマンとエドトンの子らを奉仕のために取り分け、立琴と十弦の琴とシンバルをもって預言する者とした。”（1 歴 25：1）(68) —この 3 人の、イスラエルの神殿礼拝への貢献は、評価し過ぎることはない。それだけでなく、彼らの子孫は何世紀もの間、その使命を忠実に守った。それから 500 年後、捕囚から戻ってからも、アサフの一族は集会での音楽担当者として注目された（エズラ 2：41、3：10）。

神殿礼拝へのダビデの影響は、何世紀にも及んだ。たとえば、ヘゼキヤ王が宗教改正をしたときダビデの形式を再導入した。“さらに、彼は、ダビデおよび王の先見者ガド、預言者ナタンの命令のとおり、レビ人にシンバルと十弦の琴と立琴を持たせて、主の宮に立たせた。この命令は主から出たものであり、その預言者たちを通して与えられたものだからである。ヒゼキヤ王とつかさたちが、ダビデおよび先見者アサフのことばをもって主をほめたたえるようにレビ人に命じると、彼らは喜びつつほめたたえた。そして、一同はひざまずき、伏し拝んだ。”（2 歴 29：25、30a）

祭司（アロンの子孫）については、ダビデは礼拝奉仕のために彼らを 24 部門に分け、一組ごとの順番制にしました。祭司は 2 年間に 1 か月、または年に 2 週間、神殿奉仕をします。キリストがお生まれになった時代でも、この順番は同じでした。洗礼者ヨハネの父ザカリヤが、アビヤの組の祭司だったことから分かります。ですから、彼はツアドクの子孫ということになります（ルカ 1：5、1 歴 24：10）。

ダビデは、礼拝を音楽ときれいな衣装で美しい形式にしようと思いました。それを現代まで受け継いでいるのがルーテル教会の一派です。ルーテル教会は 200 年余りの間に、礼拝形式が大きく分けて 2 つのグループになりました。一つのグループは、全典礼とそれに伴う全般にわたってダビ

⁶⁶ (67) ダビデが作った楽器は、バビロン捕囚から戻った後も使われていた。（2 歴 7：6、アモ 6：5、ネヘ 12：36）

デの形を維持しています。このグループは現在では、‘ハイ・チャーチ’と呼ばれています。一方はパウロの形式に従っている人たちです。“あなたがたが集まる時には、それぞれの人が賛美したり、教えたり、黙示を話したり、異言を話したり、解き明かしたりします。”（1 コリ 14：26）こちらはルーテル教会内でも‘ロー・チャーチ’と呼ばれることがあります。ルーテル教会のこれらのグループは必ずしも教義上のことで分けられたのではなく、習慣の違いによるものです。

大きくなる救世主への期待

礼拝改革と詩は、ダビデの預言者としての使命を表しています。しかし先に述べましたが、この王は、通常は祭司だけの仕事である焼き尽くす生け贄を献げることもしました。なぜ彼はそんなことをしたのでしょうか？ 実際ダビデは徐々に、イスラエルが望んでいる救世主のひな型である‘祭司王’になっていました。ダビデの未来の息子は、先祖のダビデがしたように、同じ3つの役割－つまり王、祭司、預言者－を担うことになっていました。この預言はダビデの詩篇 110 に、はっきりと見ることができます。

主は、私の主に仰せられる。

「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、
わたしの右の座に着いていよ。」

主は、あなたの力強い杖をシオンから伸ばされる。

「あなたの敵の真中で治めよ。」（詩 110：1-2）

イエス様の時代の大祭司や学者たちは、単なる人間の救世主を期待しました。祭司と学者たちとの論争で、イエス様は詩篇 110 を引用してご自分の救世主としての使命を説かれました（マタ 22：42-45）。なぜダビデの子がダビデの主なのか、と賢明にもイエス様は大祭司に尋ねられました。主ヤハウエが、全ての敵を足の下に従わせると約束された、この‘私の主’とは誰のことか、と。

もしダビデが詩篇に書いて記録していなかったら、祭司たちにとって答えは簡単だったでしょう。その場合、答えは当然‘ダビデ’になります。しかしこの詩では、‘ダビデ’と‘私の主’とは別々の二人なので、指導者たちは何も言えませんでした。彼らはイエス様が言われたことに何も答えられなかったのです。

主は誓い、そしてみこころを変えない。
「あなたは、メルキゼデクの例にならい、
とこしえに祭司である。」(詩 110 : 4)

ダビデの主でもあるダビデの子は、神の右の王座に座っておられます。しかもメルキゼデクの位の祭司でもあります。どうしたらそんなことになるのでしょうか？イスラエルではアロンの一族以外のだれも祭司として働くことは出来ないと、旧約聖書に規定されています。しかしダビデは例外でした。確かに彼は焼き尽くす生け贄を献げ、祭司の役割を果たしました。彼は‘祭司王’としてのイエス様のひな型でした。これが、なぜサウルではなくダビデが生け贄を献げることを許されたのか、ということの説明です。

ちなみに、詩篇 110 篇に関してのイエス様の言葉は、別の理由でも興味深いことです。イエス様は詩篇の表題を本当のことと信じておられるということが、その言葉に現れています。それらは旧約聖書には載っていませんが、ユダヤ人の伝統は著者の名前を忠実に伝えていきます。もしイエス様がこれを信じておられたのなら、私たちが同じように信じることは当然です。

ペテロはペンテコステの説教で詩篇 110 篇を、説明するようにして引用しています。ダビデは天に上ったわけではありません。彼は自分でこう言っています。『主は私の主に言われた。わたしがあなたの敵をあなたの足台にするまではわたしの右の座に着いていなさい。』

ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。
(使 2 : 34 - 36)

5章 ダビデ家の中の敵

たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、
私はわざわざいを恐れませんが、
あなたが私とともにおられますから。

ダビデは 60 歳近くなっても、まだ王位継承者を正式に指名していなかった。たぶん彼は、ソロモンが継承者にかかる重圧を受けないで成長することを願って、黙っていたのだろう。ダビデが 60 歳になったとき、ソロモンはわずか 10 歳前後だった。

おそらくダビデの最年長の息子アムノンが、王の後継者として最有力候補とされていたことだろう。彼はヘブロンで、質素な環境の中で生まれたが、かなり若いときにエルサレムの、杉で建てられた立派な城に移った。先に述べたように、王子たちは王の側近として王の食卓に着くことが許されていた。ダビデは子育てについて、詩篇 34 篇で見事に語っている。

来なさい。子たちよ。私に聞きなさい。
主を恐れることを教えよう。
いのちを喜びとし、しあわせを見ようと、
日数の多いのを愛する人は、だれか。
あなたの舌に悪口を言わせず、
くちびるに欺きを語らせるな。
悪を離れ、善を行なえ。
平和を求め、それを追い求めよ。(詩 34 : 11 - 14)

ダビデは、子供たちは指導されなければならないとは分かっていたが、訓練されることも同様に必要だということに気付いていなかったようだ。サムエル時代の大祭司エリの死からわずか 100 年だったので、ダビデはその家族の話を聞いていたはずだ。エリの場合のように父親が息子を訓練しなければ、主を恐れることなく大人になってしまう。王は、この悲劇から何も学ばなかったらしい。おそらく彼は、戦うことと政治を行うことで忙しく、息子たちと一緒にいて、彼らの成長を確かめたり訓練したりする時間が十分になかったのだろう。

娘たちに関していうと、17 人ほどいた王女たちのほとんどは母親が違って、彼女たちの間にはおそらく特別な緊張感があっただろう。王のハーレムにいる女たちはお互いに、必ずしもいい関係だったとはいえない。一夫多妻の家庭では、父親は子どもの母親のそばで子育てをすること

ができない。一夫一婦の結婚では可能だが。おまけに王妃の中には王と同じ神を信じていない者もいた。

おそらくダビデは、長男のアムノンが悪い方に向かっていること、従兄弟のヤナダブが悪い入れ知恵をしていることに気付いていただろう。しかし父親は、長子である息子を叱ったり懲らしめたりして、混乱させたくなかったようだ（2サム3：2）。その結果、若い王子は自分勝手を身につけて成長した。そして今、彼は異母妹のタマルに気をそそられていた。

タマルは10代の可憐な王女で、安らかな未来が約束されていました。彼女はイスラエルの上流の若者か、近隣国の王子の妻になるはずでした。彼女は思春期の少女の例にもれず、すばらしい夫と出会うことを夢見ていたことでしょう（少なくとも、昔はそうでした）。

タマルの母親はマアカといいました。彼女は小国ゲシュルの王女で、ダビデの4番目の妻でした。タマルには同腹の兄アブシャロムがいて、彼はかわいい妹を溺愛していました(69)。⁶⁷

ダビデの長男は異母妹の美しさにのぼせて、どんな結果になるかもおかまいなしに、彼女の体が欲しくてたまらなくなりました。美男子の王子はたぶん女性に人気があったので、そんな一時の熱はアムノンには初めてのことでなかったでしょう。ところが状況としては、アムノンにとって非常にやりにくいものでした。というのは、モーセの律法はフリーセックスを、特に近親相姦を禁じていたからです。その上、王女たちには特別な監視がついていました。彼女たちは付き添いなしでは、一步も家から出ることができませんでした。

ダビデの成人した子どもたちは、バテ・シェバとの出来事や、ハーレムでのことに気付いていたと思われる。この父親は、自分がいい見本ではないことを自覚していながら、それでも性欲をがまんすることについて息子たちに意見する勇気を持てたのでしょうか？でもこれは、神を畏れる父親が息子たちに教えるべき、最も重要な項目の一つです。自分より力の弱い女性を、自分の欲望から守るのは男の義務です。それなのに、情けないダビデは、それが良いか悪いかを考えることなく、魔が差したときに自分の欲しい女はだれでも手に入れるという、悪い見本を息子たちに見せてしまいました。そして今、アムノンは父の敷いた路線を辿ろうとしています。このように、父の不正行為は3代、4代後にでも罰せられるのです。

上に述べたように、ダビデの兄シムアの息子で、王女の従兄弟ヤナダブは、そのとき宮廷に住んでいました。彼は根っからの悪で、恋患いしているアムノンに、タマルを彼の部屋に呼び寄せてもい

⁶⁷ (69) アムノンとアブシャロムを区別することは、この宮廷史の意味を理解するために大事です。だれがだれか分かるためには、この章を最初からもう一度読んでください。

いという許可を、王から取る方法を教えました。それは清らかなデートではなく、10代の少女を計画的に強姦しようとするものでした。

二人の若者が、そんな犯罪が成功すると考えたのは、おかしいことです。王は、自分の娘の将来をだめにした彼らを罰するはずですよ。それなのに悪だくみをしたのは、おそらく彼らは、結局はダビデは自分たちを放っておくと見越していたからでしょう。あるいは、アムノンがタマルをなんとかして自分の正式な妻にすることを、真剣に考えていたかもしれない。モーセの律法は同親兄妹の結婚を禁じていますが、一方、強姦者に被害者を娶ることを命じています（申 22：28-29）。おまけに、律法が下される以前には、先祖たちは異父母姉妹と結婚したことを、みんなが知っています（創 28：9）。今も同じ事ができないわけがない。たぶんこれがアムノンの言い訳です。

ダビデはバテ・シェバとのことを隠そうとして道を踏み外しました。アムノンも同じくタマルを寝室に引き込もうとして間違いを犯したのです。従兄弟に唆されて、彼は病気のふりをして、異母妹を自分の部屋に呼んでもいいという父の許しをもらったと、嘘をつきました。

アムノンがタマルを犯そうとしたとき、彼女は死にももの狂いで彼を説きつけようとしていました。“いけません。兄上。乱暴してはいけません。イスラエルでは、こんなことはしません。こんな愚かなことをしないでください。私は、このそしりをどこに持っていきましょう。あなたもイスラエルで、愚か者のようになるのです。今、王に話してください。きっと王が私をあなたに会わせてくださいます。”（2サム 13：12-13）

果たして、ダビデはこんな結婚を許したのでしょうか？かわいそうなタマルは思いつくことを並べて、時間が稼げたのでしょうか？それはわかりません。はっきりしているのは、アムノンは妹の言うことに耳を貸さず、彼女を（動詞をそのまま翻訳して）“負かした”ことです。これと同じ動詞が、ダビデがゴリヤテを“負かした”ときに使われています。二通りの勝利；英雄的なものと恥ずべきもの。真の英雄は自分より強い相手を負かします。臆病者や女たらしは自分より弱い者を負かすのです。

タマルの行く末

王子が思いをとげた後は、よくある展開となりました。“ところがアムノンは、ひどい憎しみにかられて、彼女をきらった。その憎しみは、彼がいだいた恋よりもひどかった”（2サム 13：15）。罪は、犯す前は素晴らしいことのように思えますが、後では気分が悪くなるものだと、みなさんも想像できるでしょう。罪がもたらす満足感はずつかの間のことで、罪人の口には苦味が残り続け

ます。アムノンがそうでした。彼は胸の奥底で間違いを犯したことがわかっていて、吐き気を催すほどに感じていました。自分自身を欺くことは難しいのです。

アムノンは異母妹を部屋から冷たく追い出し、召使いに言いつけてドアに鍵を掛けました。世界中でどれだけの女性が、このようなことを経験してきたことでしょうか？

タマルは服を裂き髪に灰を被って、両手を頭に置いてひどく泣きながら中庭を歩いて行きました。それは当時のイスラエルの女性たちが、強姦されたときに嘆きや恥を表すやり方でした（エレ2：36-37）。

タマルは、もう何にも関心を持ちませんでした。彼女は強姦され、処女と結婚の資格が奪われたことを、周り中に知られてしまいました。タマルは、強姦された少女は結婚に関してはほとんど見込みがないと知っていました。加えて、それが近親相姦であることが彼女の恥を千倍にも増したのです。自分の異母兄に犯されたのだから。

「私は、このそしりをどこに持って行けましょう。」これはタマルが、アムノンの望みどおりにしないよう説き伏せようとしたとき、彼に言った言葉です。その後、彼女はそしりをどこへ持って行けたでしょう。彼女は兄アブシャロムの家で、孤独な女性として生きたと、聖書は記しています（2サム13:20）。兄が家へ帰ると、いつも妹が部屋の隅から悲しい目を向けてくるという情景を、想像してください(70)。⁶⁸

ほかの王女たちは次々結婚していきました。彼女たちはみな、すばらしい結婚式をあげ、そして母親となる喜びを経験するのです。でも、タマルにはできません。彼女を妻にする者はひとりもありません。少女の自尊心が損なわれ、人生は厳しいものとなりました。心が壊れてしまった娘を王宮の中で見て、ダビデはどう感じたのでしょうか？タマルは、男が主の言葉を聞かないで、性欲の対象として好きにしたとき女性に起こることの、彼にとっての生きた例です。これで見るように、タマルの運命は父親には強烈な教訓でした。

神はこの出来事や結果を通してダビデを訓練しておられました。これは、子どもたちを通して私たちをも訓練なさる神のやり方なのです。配偶者を見捨てた人の多くは、後に離婚の渦中にある孫たちの苦悩を見なければなりません。そんな状況になると、人は自分自身の‘幸せ’のために、だれかを一特に我が子を一苦しめる権利があるのだろうか、きっと自分自身に問わざるを得なくなるのです。

⁶⁸ (70) ヘブル語の“孤独”という言葉は、英語で **destitute** 貧しい、**destroyed** 破壊された、**wasted** ダメになった、**numbed** 麻痺した、**devastated** 荒廃した、という意味を持つ。これら全部がタマルの感情だった！

タマルについてはここまでしかわかりません。私たちには、もし彼女が自分の悲劇を主の手に委ねたなら、それまでのこととはかかわりなく、主が彼女に生きる価値ある人生をお与えになったということは、わかります。主の手が、悲運をよかったこととする祝福に変えて下さらなければ、それ以上恐ろしい結末はありません。タマルは周りの人に善と愛を与えるような女性になったかもしれない。そしてそのような人生は決して無駄ではありません。運命を受け入れて悪を赦すには、どんな場合でも何年も苦しむことになります。とにかく、兄アブシャロムの悪行は、彼女の人生を少しも楽にしなかったのです。

読者のみなさんは、ダビデは国の最高裁判官として、長男の酷い行いにどんな罰を言い渡したのだろう、と考えるでしょう。彼は、アムノンに賠償させるか、または投獄するという命令をしたでしょうか？それとも、アムノンを王位継承者名簿から外したと公に告げ、レバノンに追いやって何年間か木を切らせることにしたのでしょうか？

いいえ、ダビデはそのようなことはしませんでした。彼は怒った、それだけでした。父親としての彼は、気持ちの奥底でアムノンが自分に向かって「あなたご自分が私よりましだと思っているのですか？私にお説教などしないでください！」と叫ぶのを恐れたのかもしれませんが。しかし箴言の言葉は正しい。“むちを控える者はその子を憎む者である。子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる”（箴 13：24）

ああ、ダビデ、ダビデ、息子たちに厳しくしなかったら、世間があなたの代わりにすべきことをするということが、60歳になっても分からないのですか？もしあなたがアムノンを罰していれば、アブシャロムも仕返しなどしなかったでしょうに。もちろん、あなたは息子たちを愛しましたが、娘たちを同じように愛したのですか？タマルの不名誉をそそがないままにしたのは、あなたが彼女の幸せに無関心だということの現れではないのですか？

ダビデの弟コンプレックスは、年とともに軽くなったというものではなかったようです。ダビデ王は国を治めることはできましたが、自分の家庭や家族の治め方を知りませんでした。このことからすると、なぜ新約聖書の指導者たちが自分の家族をうまく管理するようと言われたのか、よく分かります（1テモ 3：2-5）。

もし、アムノンが王族の第一子としての権利を失って、長い期間宮廷から追い払われていたら、次の悲劇は起こったでしょうか？

アムノンの死

王がアムノンを罰しないままなので、タマルの兄のアブシャロムは自分で復讐することにした。若い王子は妹に不名誉をもたらした相手に復讐するため、いろんな方法を幾日も寝ないで考えた。ダビデはその年齢のときには、ひどい目にあっても復讐心を抱くことはなかった。というのは、彼は罰することは神の御手に委ねるものと思っていたからだ。父親のような信仰がなかったので、哀れなアブシャロムは憎しみに凝り固まってしまった。事態をさらに悪くしたのは、アムノンが後悔した様子を見せず、異母妹に償いをしようとしなかったことだ。アブシャロムには、兄を赦すという選択肢はなかった。

アブシャロムは兄を殺す計画を仕上げるまで、まる2年間、策を練った。彼は、父親がウリヤ殺害を謀ったように、綿密に計画を進めた。アブシャロムはアムノンを、父の護衛がいるエルサレムで殺すのは難しいと分かっていた。そこで彼は、町から数キロ離れた自分の私有地バアル・ハツォルで実行することにした(71)。⁶⁹

アブシャロムは筋書き通り、父親と兄に、自分の地所で行う羊の毛刈り祭りに来てくれるよう頼んだ。羊の毛刈り祭りは共同体の催しで、いつも賑やかな宴会で終わる。ダビデは負担をかけたくないと、招待を断った。それはアブシャロムが予想していたことだった。“それでアブシャロムは言った。「それなら、どうか、私の兄弟アムノンを私どもといっしょに行かせてください。」王は彼に言った。「なぜ、彼があなたといっしょに行かなければならないのか。」しかし、アブシャロムが、しきりに勧めたので、王はアムノンと王の息子たち全部を彼といっしょに行かせた。”(2サム 13：26-27)

ダビデはアブシャロムの申し出を不信に思ったが、最後には受け入れた。彼はタマルの事件以来、二人の兄弟の仲がよくないことを知っていたに違いない。ダビデは、息子の頼みを聞き入れてアムノンを祭りに行かせたことを、死ぬまで悔やんだ。なぜ、どうして彼はそんなにだまされやすく考えなしで、弱腰だったのだろうか？

弟の祭りへ向かっているときには、アムノンは自分の人生が終わりかけていることを知らなかった。もし彼が以前から死に備えていなかったとしたら、このときにはもうそんな時間がなかった。“アブシャロムは自分に仕える若い者たちに命じて言った。「よく注意して、アムノンが酔って上ぎげんになったとき、私が『アムノンを打て。』と言ったら、彼を殺せ。恐れてはならない。この私が命じるのではないか。強くあれ。力ある者となれ。」アブシャロムの若い者たちが、アブシャロムの命じたとおりにアムノンにしたので、王の息子たちはみな立ち上がって、おのおの自分の驃馬に乗って逃げた。”(2サム 13：28-29)

⁶⁹ (71) バアル・ハツォルはエルサレムから6キロか18キロのところにある。

復讐はアブシャロムにとって心地よかったですでしょうか？おそらくよくなかったと思います。この恐ろしい行為で、彼は妹の不名誉や彼女が今抱えている苦境を思っただけの悲しみから解放されたのでしょうか？されなかったでしょう。タマルの人生は、

強姦した者が死んで、良くなったでしょうか？まったく逆でした。アムノン殺害の結果、アブシャロムが国から逃亡しなければならなかったため、彼女は兄の援助を失うことになりました。

この恐ろしい出来事はすぐにダビデに知らされた。最初は、アブシャロムが兄弟を全部殺した、ということだった(72)。⁷⁰ バテ・シェバの赤ん坊が死んだときと同じように、ダビデは息子たちの死を深く悲しんで、地に伏して泣いた。ナタンが予言した剣が、ダビデの罪のせいで再び彼の家族を打ったのだ。バテ・シェバとの一夜の快楽は、この悲劇に値するものだったのだろうか？いや違う。100倍も違う！

ならず者の甥ヤナダブは、アブシャロムの計画を知っていたので、叔父を慰めた。“・・・今、王さま。王子たち全部が殺された、という知らせに心を留めないでください。アムノンだけが死んだのです。”(2サム 13:33) しかし長子を失い、またアブシャロムも失ったのと同じことになって、悲劇に変わりなかった。その犯人アブシャロムはゲシュルの宮殿へ逃げた。当時、そこは彼の祖父(あるいは叔父)が王として治めていた。

ダビデは二人の息子を失ったことを、ひどく嘆きました。彼は、国中で自分ほどひどい失敗をした父親はない、と感じたかもしれません。失敗は今や世間に知れてしまった。だれか彼の嘆きを慰めたでしょうか？失われた二人の息子の母親たち、アヒノアムとマアカにできたでしょうか？できません。彼女たちにも自分の慰めを見つけるのさえ、とても難しいことだったので、ダビデのことをかまう余裕はありません。バテ・シェバにしても、自分が元々の原因だと感じていただけに、嘆いている夫を慰める自信はありませんでした。

唯一ダビデが慰めを受けたのは主からでした。彼には依然として天の父—その“賜物と召命とは変わることがない(ロマ 11:29)”—がおられました。胸裂かれた父親が、自分の嘆きが天で聞かれていることを知らなかったら、彼は確実に潰れたでしょう。ダビデが泣いているとき、どの詩で主に訴えたか分かりません。これかもしれません。

私の心の苦しみが大きくなりました。

どうか、苦悩のうちから私を引き出してください。

私の悩みと労苦を見て、

⁷⁰ (72)バテ・シェバの息子たちはまだ幼かったので、その場になかったかもしれない。

私のすべての罪を赦してください。(詩 25：17-18)

ダビデは長男アムノンを長い間、深く悼みました。彼は幼い少年の明るい瞳を思い出したことでしょう。あの子はヘブロンを通りや小道を裸足で走り回っていた。アムノンは素晴らしい少年だった。彼の初子。だのに今はもういない、殺されて、永遠に父の届かないところへ行ってしまった。

自責の念で、昼も夜もダビデは平穏でいられませんでした。彼の息子たちは、自分がしたことそのままに同じことをしたのです。一人は性欲を抑えられなかった。もう一人は復讐心のなすがままにした。こういう制御されない強い衝動が彼らをだめにしたのです。彼らの父親は、そんな悲劇が起こらないようにするには、なにをすべきだったのでしょうか。ダビデの問いの中で、最も彼を悩ませているのは「死に際して、アムノンの主との関係はどうだったのか？」ということでした。

その当時は、死んでからのことは、新約聖書で言われているほど明らかにされていませんでした。イエス様以後は、クリスチャンにはよく分かるようになりました。というのは、イエス様が聖書の中のだれよりもよく、天国と地獄について話されたからです。ダビデが知っていたのは、人は死後、無になってしまうのではない、ということでした(詩 16：10-11)。それならばアムノンはどうなるのか、ということが父を苦しめる問題だったのです。

答えは神のみぞ知る。タマルを強姦してからの2年間、若い王子の心に何が起こったかを、神だけが見ておられました。アムノンは最後まで自分の罪を小さく見ていたのか、それとも悔やむに至ったのか？彼は聖所で罪の生け贄を献げ、妹に対して犯した罪を神に告白したのだろうか？おそらくそれは、弟の羊の毛刈り祭りの数日前までに起きたかもしれないことです。私たちには謎でも、主はご存じです。

おそらく、時間とともに刺すような痛みは鎮まったでしょうが、ダビデの悲しみが完全に消えることはありませんでした。時が経つと父は、手の届かない所へ行った、生きている息子を追憶するようになったことでしょう。美しく、理知的なアブシャロム。しかし、モーセの律法が殺人者には死刑を宣告しているというのに、国の最高裁判官であるダビデが、どうして放蕩息子を家へ帰すことができるのでしょうか？その次の王子アドニアは、自分が王位を継ぐつもりになっています。

次から次へ起こる悲劇の中で、毎朝いつもの礼拝をすることは、ダビデにとって測り知れない慰めでした。そこで彼はみ言葉を聴き、レビ人たちと賛美することができました。生け贄の血が祭壇に滴ると、ダビデは主ご自身が、自分と不幸な家族の罪を赦して下さったと感ずるのです。

アブシャロムの帰還

アブシャロムはガリラヤ湖の北にあるゲシュル王国に逃れた。そこの親族が3年間、彼を受け入れて優遇した。皆は彼が強国の王ダビデの、生きていた最年長の息子だということを知っていた。そのため、イスラエルの王位を継ぐ者として、王者の扱いを受けたのだ。それは、逃亡生活の間に結婚して、3人の息子と娘一人が生まれたことでわかる（2サム 14：27）。彼の息子たちの名前は記録されていない。しかし娘は、悲劇の叔母の名をもらってタマルといった。彼女も、とても美しい女性に成長した。

アブシャロムはゲシュルで、いわゆる‘運転免許’、つまり馬車を走らせることを習って帰って来ました。先にふれましたが、ダビデの宮廷では馬は好まれません（73）。アブシャロムは世間のやり方に慣れて、父親は古くさいと思っていたに違いありません。おそらく「エジプトから馬を買えるのに、どうして父さんはラバに乗っているのだ？」と考えていたことでしょう。

ヨアブがついに仲裁に出た。ダビデの内も外も知っていて、ダビデが外国に住んでいる息子のことでどんなに寂しがっているか、ヨアブは分かっていた。また、彼はこれを、王とその息子に貸しを作る好機だと承知していただろうし、最も自分に従順な王子を王位に就かせることを、ヨアブは明らかに望んでいた。

ヨアブは最高裁判官というダビデの地位を利用することにした。宮廷ではアブシャロムの名前を口にするのは許されなかったため、彼はテコアの村から自分の妻を使いに出した（74）。⁷¹彼女は王に、自分の息子たちについて作り話をした。一人が、多分もう一人に殺されたようだ。もしモーセの律法が文字通りに当てはめられるなら、殺人者は殺されるべきで、母である彼女は残っている息子も亡くすことになる。それはだれの利益になるのか？慈悲は正義に優先しないのか？

疑うことをしないダビデは、この場合は正義より慈悲を優先させると、約束した。すると、彼女はときを逃さず、王は自分の家族に同じようにするべきだと言った。もし王の息子が死罪になれば、イスラエルの民は跡継ぎのないままになってしまうではないか？水（アブシャロムの血）が地に流されても、アムノンを死から甦らせることはできない。（彼女は当然、王子の名前は言わなかった。）もし王が自分の息子に慈悲を与えるなら、彼は自分の下した裁定に背かないことになる。

⁷¹ (73) ダビデはアラムとの戦いの戦利品として多くの馬を連れてきた。しかし彼はそれを高く評価しないで、ほとんどを農場での労役馬にした。（2サム 8：4）

ここでダビデは、ヨアブがすべてを取りはからったことを悟った。王に直接話さないで、間接的な手段を取るのがヨアブのやり方だった。それでもダビデは甥を自分のもとに呼び出して、アブシャロムを家へ呼び戻すようにと言った。ヨアブの策略は成功した。彼は王の気持ちを知っていたが、王子のことはよく知らなかったので、野心的なアブシャロムの能力と計略のことは、考えもしなかった。

イスラエルの王子はゲシュルの祖父母の家で、盛大な別れの宴を開いた。だれもが未来の王に祝いを述べた。アブシャロムは、父のお気に入りの息子として宮廷で歓迎されるだろうと思って、戦車に乗って勇んで故郷へ帰って行った。ところが、彼はもう父の食卓に招かれなかった。ダビデに、殺人者である息子と対面する勇気がなかったからだったのだろうか？それがわかったとき、彼の落胆は大きかった。

ダビデはもっと早くにヨアブを通して伝えておくべきだった。「アブシャロムはイスラエルの王になることはない、告げなさい。彼はその期待をすぐに、全部捨てなければならない。もしアブシャロムが帰りたいなら帰っても良い。しかし私の宮殿へは入れない。」—そうしないで、ダビデは間接的な方法で、アブシャロムに王座を継がせないと考えていることを、自分の民に伝えた。王の排斥が先例となって、他の主立った親族の多くがそれに従った。アブシャロムは上流社会に戻ることなく、丸3年間をエルサレムで暮らした。

失望と恨みの種が膨らんで落ち込んだアブシャロムは、とうとう、自分の話を聞いてほしいと父に頼むことを、ヨアブに強いた。ところが将軍がそれに同意しなかったので、アブシャロムは彼の大麦畑を燃やしてしまった。この傲慢な行為をきっかけに、王子はまた以前のように振る舞い始めた。

“それで、ヨアブは王のところに行き、王に告げたので、王はアブシャロムを呼び寄せた。アブシャロムは王のところに来て、王の前で地にひれ伏して、礼をした。王はアブシャロムに口づけした。”（2サム 14：33）

5年もの間、父と息子はお互いに会うことがありませんでした。こちらの方は温もりを欠いた出会いですが、あの放蕩息子の帰還の話を通想させます。アブシャロムと放蕩息子の違いを見ると、後者は自分の心がけについてあれこれ考え、その罪を天と父に恐れ入って告白しました（ルカ 15：18、21）が、アブシャロムはそれをしませんでした。ダビデとアブシャロムの間には、本当の心の結びつきは生まれませんでした。父と息子の間にはアムノンの屍が記憶の中に依然として横たわっていたのです。

結論としては、アブシャロムの殺人行為に対するダビデの懲罰は、アムノンのタマル強姦と同様、取るに足りないものでした。殺人はなかったことのように葬られて、続いての王位継承の順位についてもはっきりされませんでした。結局、アブシャロムは自分が引き起こした混乱から、たいした影響を受けずに逃れることができたのです。そしていっそう悪いことに、彼は陰である工作を謀っていたのです。

美貌の王子 **One note is lacking from this chapter**

ダビデは晩年を宮殿で、穏やかに暮らせることを望んだ。主の剣はすでに、赤ん坊のシメア、タマルとアムノンを打っている。失望や死はこれで十分ではないだろうか？しかしダビデにとって、これは一家最大の悲劇の前奏だった。神はダビデの大罪を赦されたが、罪がもたらす人生への結果は依然残されている。先に述べたように、公人の罪の罰は公にされなければならない。

しかし彼の罪の結果は災禍ではなく、ダビデに対する主の一種の‘厳しい慈悲’でした。それらを通して、ダビデの愛する父なる神は彼を訓練し、彼が天国への道から逸れないようにされたのです。神を信じていない人たちは、同じ状況でも違うように受け取ります。彼らにとって、悔い改めへの導きが見られる場合は別として、罪の結果にはどんな祝福もありません。

聖書の中のヒーローたちは、ときに読者をがっかりさせます。ヒーローではなかったと分かることがよくあるのです。しかし聖書は、信仰者たちの立派な人生を強調しているわけではありません。神の憐れみを主張しているのです。ダビデの弱さや、最後の失墜を完全に知っておられるのに、神は彼を選ばれました。ダビデが姉たちや息子たちに対して受け身一方だったり小心だったり、女性にはだらしなく、子どもたちをうまくしつけるのにも失敗した、そんなことはみな神にとってはお見通しでした。しかしまた、主は彼が自分の罪を認め、神の憐れみに縋り続けたことを知っておられました。そのことが主の目には、他のなによりも大切だったのです。

ダビデの罪は公然の秘密でしたが、それを悔いて主の前に告白したことも知られていました。このように、王は国民と家族にとって、恵みの生きた見本になりました。もし王がそんな恐ろしい罪を赦されたなら、ほかの者たちが赦されないわけがありません。多くのイスラエル人はそう考えました。しかし一方で、ダビデの罪の結果は彼の民に警告を与えることとなりました。「王がしたようなことをするな」。あなた方は自分の人生が、王に降りかかったようなあんな家庭の混乱や様々な悲劇で、めちゃくちゃになってほしくないでしょう！

さらに悪い悲劇が、ダビデ 60 歳のときに起こった。それは人から観ると、老いて行く王の最後の 10 年をだいなしにするようなことだった。王家の中で生存している最年長の息子、アブシャロムが悲劇をもたらした。

若いときのアブシャロムは、ダビデが若いころのように、人にもてはやされたが、二人は似ているところより違いの方がはるかに大きかった。ダビデは幼いころから主から受けた使命に従っていた；羊の番、楽器作り、作詞作曲、ゲリラ集団の訓練、イスラエルの国境警備、エルサレム建設、神殿礼拝の司式、などなど。王はこれらのことに全身全霊を投じて、自分の名誉のためではなく神の栄光のために励んだ。輝かしい名望は、ダビデが熱中した重大なそれらの事の副産物だった。

しかし、もともとアブシャロムは体を使って働くような仕事はしなかった。彼にとって仕事は、出世の手段だった。また信仰のようなものや謙遜といったものは、彼の人生には見られなかった。ところが彼は今、栄誉や名声、権力を得るのは難しい立場にある。その上、彼は心を惹きつけるというより、人に冷酷な印象を与える人柄だった。

彼の大きな特徴は、姿形だった。それについては、アブシャロムがイスラエルだけでなく聖書全体の中でも、最も美しかったと描写されている。“アブシャロムほど、その美しさをほめはやされた者はいなかった。足の裏から頭の頂きまで彼には非の打ちどころがなかった。”（2サム 14：25）アブシャロムの髪はすばらしく多く、きれいだった。年に一度切るが、重さが 2 キロ以上もあったという！こんなに重いのは、たくさんのオイルや髪飾りを付けていたからとしか思えない。

若い頃、ダビデは魅力的だったが、彼にその自覚はなかった。一方アブシャロムは自分の容姿を利用して、政治的に有利に計った。旧約聖書の中のヨセフやダニエルのように、ヒーローの外見のよさは神の栄光を高めるのに役立つ。しかしみかけのよさは、アブシャロムの場合のように自惚れを助長する。

ダビデはアブシャロムを心から愛していたが、息子の方は父を気に掛けていたようではない。おそらく若い王子の目には、父親はもう国を治めることもできない、うんざりするような年寄りなのだろう。今時の言い方をすれば、「年寄りの恐竜は、俺のように若くて優れた頭領に譲る潮時だ」と、アブシャロムは考えたことだろう。もし権力交代が流血なしでは実現しないとなれば、血を流してもいいと、アブシャロムは合理的に考えていた。彼は自分の国の人々が、父親さえもが犠牲になることを想定していた。この犠牲は、彼がイスラエルの王座を確保するために必要だった。そのように、彼は陰謀を巡らしていた。

アブシャロムは、自分が実に前向きだというイメージを作り出すことから始めた。都に戻るとき、彼はある乗り物、馬が引く戦車を持ち込んだ。新しい乗り物に乗った美男子は、みんなを感心させた。魅力的な評判に加え、アブシャロムは戦車の前を走って喧伝する者を 50 人雇った。かなり多い。エジプトのパロのあとを継いだヨセフは、前を走る者は一人だった。

アブシャロムは兄殺害の計画に 2 年かけたが、父に対する謀反は準備にその倍の時間が必要だった。アブシャロムの巧妙な策略は、聖書が詳しく記録している。“アブシャロムはいつも、朝早く、門に通じる道のそばに立っていた。裁きのために王のところに来て訴えようとする者がいると、アブシャロムは、そのひとりひとりを呼んで言っていた。「あなたはどこの町の者か。」その人が「このしもべはイスラエルのこれこれの部族の者です。」と答えると、アブシャロムは彼に、「ご覧。あなたの訴えはよいし、正しい。だが、王の側にはあなたのことを聞いてくれる者はいない。」と言い、さらにアブシャロムは「ああ、だれかが私をこの国のさばきつかさに立ててくれたら、訴えや申し立てのある人がみな、私のところに来て、私とその訴えを正しくさばくのだが。」と言っていた。人が彼に近づいて、あいさつしようとする、彼は手を差し伸べて、その人を抱き、口づけをした。”（2サム 15：2-5）

どの国にも、政府に不満を持っている人はいます。判決が正しくても、裁判に負けた側には不平が出ます。ダビデの国にもそういう人々がいました。ウリヤに対する不正な宣告と実行についての王からの公表は、だれもが知っていて、まだ彼らの中から消え去っていませんでした。アブシャロムはこれを自分の目的のために利用しました。こういう事がイスラエルの最高裁判所で絶えず起っていると、ほのめかしたのです。多くの者が彼を信じました。

聖書は年取った王を、まったく違うように評価している。“ダビデはイスラエルの全部を治め、その民のすべての者に正しいさばきを行なった。”（1歴 18：14）

へつらいと甘言が、大方の北の部族に奏功した。彼らはすでに、大きくなっているユダ族の力を恐れていた。（望ましくない人口調査が、この恐れを引き起こした。）アブシャロムは、一般の人たちをたぶらかす能力に長けていた。美男子の王子が友達であるかのように普通の市民に挨拶したら、彼らは舞い上がって感激する。アブシャロムの秘かな企みは、老いた王の面前、宮廷の中で 4 年間続いた。だれも王に言いつけなかったようだ。そのことはダビデが家族や宮廷、召使いたちの中において、どんなに孤立していたか、どんなに寂しかったかを示している。

聖書はその成果について記しています。“アブシャロムはイスラエル人の心を盗んだ。”（2サム 15：6）心を盗む一どうやって？ 反対者を中傷して自分を誉めあげると、盗めます。政界の中の、道はずれたご都合主義者は、自分より優れた対抗者から大衆の心を離すための撒き餌として、

宣伝活動やメディアを使う方法を知っています。それがダビデに襲いかかりました。徐々に彼は息子の陰に追いやられていきました。

それより数十年前、ダビデは神が自分を王位後継者にお選びになったことを知っていながら、サウルに対して謀反を起こすことはありませんでした。彼の詩篇が、このことをはっきりと叙述しています。一方、哀れなアブシャロムは、主への信頼が全くありませんでした。王子は、主が自分を王座に上げようと思っておられるかどうか、尋ねませんでした。アブシャロムは、神が彼に王座ではなく、それとは別の、しかし大切な使命を委ねたいと思っておられるなどとは、想像もしなかったのです。彼の欠陥は、その自惚れと自尊心であり、主の教えや導きに従わずに自分の思いを優先して、王国を追い求めると決めたことでした。結果はどうであれ、彼は自分の手で自分の運命を切り開くことにしました。

ダビデに対する陰謀

アブシャロムは、4年後には革命を起こすための十分な支援者が集まると、計算した。そして、エルサレムには父の支援者が大勢住んでいるので、革命はヘブロンで起こす。彼はそこで生まれ、幼児期を過ごした。それに、宮廷がヘブロンからエルサレムに移されたことで、ヘブロンの影響力が低下するのではないかと心配した人もいただろう。事實は、神に示されたエルサレム移転だったが、ダビデが調子に乗ってしたように思って、多くのヘブロン人が憤慨していたのだろう。

反乱は、アブシャロムが生け贄の宴をヘブロンで開く許可がほしいと、父親に申し出たことで始まった。彼が無事にエルサレムに帰還したこと、また外国に居る間に立てた誓約を果たしたことを主に感謝するためというのが、彼の理由付けだった。“もし主が、私をほんとうにエルサレムに連れ帰ってくださるなら、私は主に仕えます。”（2サム 15：8）

よく考えると、これは説得力が弱い。このときには、アブシャロムがゲシュルから戻ってすでに6年が経っています。どうして、エルサレムの聖所がこの式典にふさわしくないのでしょうか？しかし痛ましいことに、アブシャロムの父は息子の言うことを鵜呑みにしてしまいました。息子を信用するというのは、単純素朴で、だまされやすいということです。驚いたことに、アブシャロムは自分の殺人計画を、ずうずうしく主の御名によって正当化しました。

ダビデが最後に息子に言った言葉は「元気で行って来なさい」というものでした。それは、アブシャロムが生け贄のために企てた計画への許可だったのです。王は、愛する息子—他の何より愛した者—の顔を見ながら、これが最後になるという予感を覚えなかったようです。

ヘブロンには200人が招待客として集められたが、その中のだれもアブシャロムの政府転覆計画を知らなかった。しかし、あちこちで起こっている騒ぎやラッパの音は、政権が変わったことを知

らせるものだということを悟った。その音を聞くや、支援者たちが駆けつけた。アブシャロムの策略に最も重要な役を果たした人物は、ギロ出身のアヒトフェルだった(75)⁷²。彼は長年ダビデの宮廷の顧問として働いた後、アブシャロムと同列の地位に就いていた。実はアヒトフェルはイスラエル一番の賢人と言われていたので、ほかの者たちは、彼がこの計画に加わったからには、成功するものと思っていた。

最も賢明なイスラエル人が、アブシャロムのような謀反人を支持する民衆に、なぜ加わったのでしょうか？その説明として、アヒトフェルはバテ・シェバの祖父かもしれないということがあります(2サム 11:3、23:34)。もしそれが本当ならば、彼は王が自分の孫娘の人生に手を出して、家族に大きな嘆きをもたらしたことを、決して赦せなかったに違いありません。ところが、復讐のためではないとしても、アブシャロムの反乱が成功すれば、バテ・シェバと彼女の幼い息子たちが殺されることは、彼にはわかっていたはずです。祖父が、かわいい孫娘や子どもたちをそんな目に遭わせたいわけがありません(76)。⁷³

おそらく一番いい説明は、アヒトフェルには主に対する畏れが欠けていたということです。主への畏れは常に知恵の初めです。(箴 9:10) それがなかったため、彼は人生最大の誤りを犯したのです。アブシャロムは自分がヘブロン王であると宣言した。祭司が即位式に呼ばれなかったので、宗教的な儀式はなかった。アブシャロムは自分に‘戴冠’し、自分で

焼き尽くす献げ物をして、それで十分だと考えた。ラッパが鳴らされ、国の周辺には陰謀が野火のように広がった。反乱の支援者の中の、ある者はダビデに対して恨みを持ち、ある者はアブシャロムの魅力に惹かれて暴動に参加していた。どれだけの兵士や予備兵が騒動に加わったのか、正確な割合は分からないが、イスラエル軍の半分以上だったように思われる。

ダビデは30年間、人々に対して正しい為政者だったし、そのように評価された。ところがこの首謀者は、首都を陥落させ国境を警備し、神殿礼拝を前例のないほど輝かしいものにして、イスラエルを超大国にした王の業績を無視した。大衆はどうかというと、彼らは戦車に乗った若くて美男子の暴れ者を選び、神から召命された老いた正しい為政者を捨てた。

ポンテオ・ピラトの法廷で、もっと悲劇的にこの場面が繰り返されました。人々は殺人者を釈放して、ダビデの子を十字架刑にすることを選びました。彼らはイエス様が、人として地上に来られ

⁷² (75) ギロは好都合にもヘブロンのちょうど南にあった。

⁷³ (76) もしアヒトフェルが本当にバテ・シェバの祖父で、自分のひ孫が王位を継ぐことを知っていたなら、彼はきっとこの企みからは離れていたはずだ。彼が反乱に加わったということは、ダビデはまだ自分の後継者を発表していなかったことを示している。

た神の子だと、信じられませんでした。民主主義というのは、信仰のこととなるといつも正しく働かなくなります。そのために教会の審議会の大多数は、完全な間違いを何度もしてきました。

エルサレムとの別れ

間もなくダビデは恐ろしいニュースを聞いた。“イスラエル人の心はアブシャロムになびいていません。”（2サム 15：13）アブシャロムの、民の心を盗む作戦は成功し、彼の父は見捨てられた。もし、自分の子供が親を殺す計画をしていると言われたら、みなさんはどう思いますか。それはみなさんの心を粉々に砕くでしょう。ダビデの心も、完全に潰れてしまいました。かわいい息子がそんなにも激しく背いたとき、自分の人生に何の益があったのかと、思い悩んだでしょう。

ダビデは子供の育て方に関して最悪の父親だと、世間の目にさらしました。恥は耐え難いものだったにちがいません。しかし最も耐え難いことは、自分の放蕩息子のことを考えるとき、彼の心を貫く痛みでした。アブシャロムは、いったいどうしたのだ？彼はどうなるのだろう

こんな混乱の最中にも、ダビデには適切な解決を考えつく沈着さがあった。エルサレムに留まれば、町は包囲され、民は飢えや病気に襲われることになる。それよりも自分が逃げた方がいいと、判断した。サウルとの時は、内乱になることを避けたのだが、自分に武器を向けた愛する息子に対してはなおさらのこと、ダビデは軍事行動は起こしたくなかった。戦いが避けられないなら、戦場はエルサレムから遠く離す。そうすれば、一般人が巻き込まれることはない。

王の家族全員と、召使いや友人たちもいっしょに、急いでエルサレムから逃れなければならなかった。逃げて行く者はみんな、運べるだけの物をかばんに詰めた。運搬用の動物はそんな突然の移動には間に合わなかった。すぐに 1000 人以上の人々が、エルサレムの東門からキデロン川に向かう道に殺到した。

沈みかけた船に最後まで残っていたのは、常に誠実な船長、ダビデだった。彼は町の出口にある家の横に立ち、横を通る人々に懇ろな言葉をかけた。彼の肩には、自分の妻子と支援者が生きるか死ぬかの、重い責任がかかっている。バテ・シェバも幼い息子を腕に抱き、もう一人の手を引いて通って行った。10 歳ぐらいになっていたソロモンは、母親の脇に付いて自分で歩いて行ったことだろう。

アブシャロムの母マアカと妹タマルはどうしただろう？彼女たちはこの悲しい行列の中にいたのだろうか？多分いただろう。ダビデが彼女たちを都に残していくことはありえない。哀れな二人の女性たちの心は、ダビデとアブシャロムの、王族間の恐ろしい闘いに引き裂かれた。二人はアブシ

ャロムの幼い娘を連れて行ったことだろう。彼女はマアカあるいは、タマルと呼ばれていた(77)⁷⁴。

驚いたことに、ダビデは外国人だけを護衛兵として連れて、出て行った。ケレテ人とペレテ人の600人と、ガテから来たペリシテの兵士たち600人が、彼と共にエルサレムを離れた。ペリシテの兵士たちは、最近、イタイに率いられて、妻子と一緒にガテの家からイスラエルに逃げて来たのだった。王は新しく来た者たちを気の毒に思って、エルサレムに残るようにと説得したが、彼らは残りたくなかった。彼らは、アブシャロムの側で仕方なく戦わされるのは、危険なことだと悟っていた。イタイの忠誠の誓いはダビデに対するもので、彼は死ぬまでそれを守る決心だった。“主の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためでも、死ぬためでも、しもべは必ず、そこにいます。”(2サム15:21)

イタイはダビデの影響で偶像から離れて、イスラエルの神に依り頼むようになっていました。彼は、ダビデのすばらしさを知って、自分が従う方のためにもいつでも死ぬつもりでいた外国人の一人でした。大多数のイスラエル人が王に背いた中で、敵国の者がダビデに忠誠を表すというのは、驚くべきことです。このことはダビデの子、イエス様にも起こりました。主イエスはほとんどのユダヤ人に見捨てられましたが、‘異邦人の光’となりました。(ルカ2:32)

このときに、だれが忠実な王の支持者か、だれが日和見主義者で利益追求者なのかが、はっきりわかった。ダビデを最も深く傷つけたのは、彼の相談相手であり友であるアヒトフェルが彼に反逆したことだと思われる。この賢人に会ったのはヨナタンの死後だったが、アヒトフェルの助言は多くの悲惨な状況のとき、彼の助けとなった。王はアヒトフェルを、単に宮廷に仕える使用人ではなく親しい友として大切にしていた。今ダビデは、アヒトフェルが秘かに自分をきらっていて、独りで謀反心を抱いていたことに気付いた。実に、アヒトフェルは旧約聖書の中のイスカリオテのユダだ。

詩篇41篇と55篇は、ダビデの受けたショックと痛みをまざまざと描写している。アヒトフェルは王の信仰の友であり、彼と一緒に礼拝に参列していた。そのような友に裏切られることは、人の生涯の中で最もつらい経験だ。この詩篇にはそれをよく表す、「友が裏切るときの祈り」というタイトルが付けられている。

⁷⁴(77)アブシャロムには娘が一人だけいた。彼女はタマルともマアカとも呼ばれた。(2サム14:27、1列15:2)少女は明らかに祖母と叔母の両方の名前を付けられている。筆者の想像だが、少女はその叔母にとって、彼女が出会った恐ろしくつらい時以来、大きな喜びになったことだろう。

まことに、私をそしる者が敵ではありません。
それなら私は忍べたでしょう。
私に向かって高ぶる者が
私を憎む者ではありません。
そうではなくて、おまえが。私の同輩、私の友、私の親友のおまえが。
私たちは、いっしょに仲良く語り合い、
神の家に群れといっしょに歩いて行ったのに。(詩 55：12-14)

エルサレムを離れて、定かでない未来へ向かったダビデの行く道は、最も困難なものだったにちがいない。“この民がみな進んで行くとき、国中は大きな声をあげて泣いた。王はキデロン川を渡り、この民もみな、荒野のほうへ渡って行った。”(2サム 15：23)

1000年後のある夜遅く、ダビデの子イエス様は、同じキデロン川を渡って歩かれました。彼も裏切られ、見捨てられました。彼の弟子の一人が報奨金ほしさにイエス様のおられるところを密告し、他の弟子たちは逃げていきました。その夜、このようなひどい裏切りにあったイエス様は、先祖ダビデのこの詩を引用されました。

私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた。(詩 41：9 参ヨハ 13：18) つまり、自分の民に捨てられ、友に裏切られたときのダビデは、ご自分の民に捨てられ、友に裏切られたメシヤのひな型です。

どうしてわたしをお見捨てになったのですか？

大祭司とレビ人は急いで、契約の箱を聖所からダビデの隠れ家に運ぼうとした。しかし王はそれを元のところに戻すようにと言った。ダビデは‘恵みの手段’から離れることはとても苦しかったが、この時、自分たちと一緒に契約の箱を運び出すのは、難しく危険だとわかっていた。また契約の箱は、主がご自分の名を掲げる場所としてお選びになったエルサレムにあるべきだ。献げ物はそこで続けられるべきで、だれが王位に就こうが変わりがない。

その上、主はご自分が望まれるときに、エルサレムと聖所への帰還の道を開くことがおできになる、とダビデは確信していた。だから、契約の箱と一緒に二人の祭司を都に返す時にダビデは次のように言った。“この私に主が良いと思われることをしてくださるように”(2サム 15：26) 二人の祭司とその息子たちが、アブシャロムの宮殿で情報を集めて、秘かにダビデに報告することにした。

同じ流れで、王は友人のフシャイを、どんなことであってもアヒトフェルの助言に反対するよう頼んで、エルサレムに送り返した。フシャイは生きていたときのヨナタンほどに心が通じ合っ
てはいなかったし、アヒトフェルほど賢明ではなかったが、勇敢な真の友だった。‘王の親友’とい
うのが実は彼の職業であり、宮廷での役割で、そのための給料をもらっていた（1歴 27：33）。

わけがわからないのは、宮殿を守るために、王が 10 人のそばめをエルサレムに残したことで
す(78)⁷⁵。ダビデが、かよわい女性たちを敵の中に置き去りにしたのは、おかしなことです。どうして
彼はそんなふう判断を誤ったのでしょうか？当然、アブシャロムと兵士たちは、まっ先に宮殿に
入るに違いありません。そこにいるそばめたちには、城はもちろん、自分を守ることもできな
いでしょう。このときのダビデの作戦は、ひどい間違いでした。

年老いた王が、エルサレムから逃れている間に書いた詩篇は、胸の痛みを最も強く表していると、
筆者は思っています。その詩を、ダビデの子のイエス様は十字架上の苦しみの中で暗誦されま
した。

わが神、わが神。

うして私をお見捨てになったのですか。

遠く離れて私をお救いにならないのですか。

私のうめきのことばにも。

わが神。昼、私は呼びます。

しかし、あなたはお答えになりません。（詩 22：1-2）

しかし、私は虫けらです。人間ではありません。

人のそしり、民のさげすみです。

私を見る者はみな、私をあざけります。

彼らは口をとがらせ、頭を振ります。

「主に身を任せよ。

彼が助け出したらよい。

彼に救い出させよ。

彼のお気に入りなのだから。」

しかし、あなたは私を母の胎から取り出した方。

母の乳房に抛り頼ませた方。

生まれる前から、私はあなたに、ゆだねられました。

⁷⁵(78)このことから、ダビデには 20 人くらいの妻以外に、少なくとも 10 人の側女もいたことがわかる。

母の胎内にいた時から、あなたは私の神です。
どうか、遠く離れないでください。
苦しみが近づいており、助ける者がいないのです。(詩 22 : 6-11)

犬どもが私を取り巻き、
悪者どもの群れが、私を取り巻き、
私の手足を引き裂きました。
私は、私の骨を、みな数えることができます。
彼らは私をながめ、私を見ています。
彼らは私の着物を互いに分け合い、
私の一つの着物を、くじ引きにします。(詩 22 : 16-18)

民の半分が自分に背き、息子が命を取ろうと画策することのほか、どんなときなら、ダビデがこれほど孤独で傷つき、嘲笑われていると感じるでしょうか？アブシャロムの兵士たちが、ダビデの服を取り合ってくじを引くなど、宮殿を略奪した時にしかできないことです。

エルサレムから離れる重い足を踏み出したとき、老いた王は自分がその日、人生で最も重要な使命を負っていることを知りませんでした。逃亡は彼の罪の結果だったとしても、同時にそれは彼と息子、そして子孫のための、神の良いご計画でした。イエス様には詩篇 22 篇が必要でした。ダビデが大きな試練に遭うことがなければ、それは生まれなかったでしょう。

そのことを知らずに、ダビデは自分の詩を書いて預言者としての働きを成し遂げました。それらはイエス様の、また私たちのために書かれたのです。ダビデの 73 篇全部の詩を含めた賛美歌集は、イエス様の賛美歌書であり、祈祷書でした。聖書にはほかのだれも、ダビデほど多くの章を書いていません。彼の詩篇は、高揚した喜びから深い絶望に至るまで、人間の感情をすべて描写しています。そのような宗教的な歌曲集は、他にはほとんどありません。ダビデの詩の多くは、彼の苦悩についての率直な記述で始まります。しかしそれらはいつも、信仰の表明で終わります。詩篇 22 篇でさえ、このパターンに当てはまります。深い絶望のただ中から始まり、希望の光を伴って終わるのです。

まことに、主は悩む者の悩みを
さげすむことなく、いとうことなく、
御顔を隠されもしなかった。
むしろ、彼が助けを叫び求めたとき、
聞いてくださった。(詩 22 : 24)

これはまさに、父なる神がお見捨てになって地獄へ落とされましたが、イエス様も十字架の上で信じられたことなのです。

飢食になるダビデ

逃亡のあいだ、ダビデはいろんな人と出会った。そのときはもう彼は王座にいないので、人々は王にふさわしい作法でふるまう必要を感じなかった。彼らはダビデから恩典を与えられることも期待しなかった。

ダビデが最初に出会ったのは、サウルの第一の召使ツイバだった。彼はメフィボシェテの地所の監督として過去 10 年間仕えた。ツイバはロバに乗って逃亡者に会いに来た。もう一匹のロバには食べ物を積んでいた。ダビデと家族は、一日で 30 キロほどをヨルダン川まで歩こうとしていた。食料もなく、その間中追跡を恐れながらの逃亡だった。ツイバの持ってきた贈り物は、一番必要なものだった。

ところがツイバは、王の心を最も刺し貫いたに違いない悪い知らせも持ってきた。それはメフィボシェテがどちら側に付くか決めたこと、つまりイスラエルが彼を王にするだろうからということで、エルサレムに残るというのだ。なんと気の毒なダビデ！かつて一番の友だったヨナタンの息子に裏切られたのだ。ダビデはメフィボシェテを苦境から救いあげ、10 年間自分の息子たちと同じ扱いで食卓を共にしてきたというのに。どうしたら、メフィボシェテは自分の恩人を陰で裏切ることができるのだろうか？ツイバの言葉を信じるのは難しかったにちがいないが、ダビデはそれを信じて彼に、主人の全財産を渡すと約束した。

次に彼らに会いにオリーブ山の東斜面まで来たのは、シムイという名のサウルの身内だった。この男は 20 年以上ものあいだダビデをひどく憎み続けていて、今彼はその恨みを吐き出した。“出て行け、出て行け。血まみれの男、よこしまな者。主がサウルの家のすべての血をおまえに報いたのだ。サウルに代わって王となったおまえに。主はおまえの息子アブシャロムの手で王位を渡した。今、おまえはわざわざ会うのだ。おまえは血まみれの男だから。”（2サム 16：7-8）

シムイは逃亡者の群れのそばではなくただ中で、彼らと一緒に実に長い道のりを歩いた。侮辱の言葉を叫びながら、彼は石を投げつけ、王や彼の一行をいつまでも辱めた。石はダビデに、そして小さな子どもたちを連れたバテ・シェバにも当たったかもしれない。

ダビデの甥アビシャイは、そのならず者に腹を立てて、彼の首をはねる許しを願った。王はシムイに辱められたが、その願いを許さなかった。彼はアビシャイの思いは理解していたが、復讐することは、彼自身が克服しようとしていた誘惑だったのだ。“王は言った。「ツェルヤの子らよ。これ

は私のことで、あなたがたには、かかわりのないことだ。彼がのろうのは、主が彼に『ダビデをのろえ。』と言われたからだ。だれが彼に、『おまえはどうしてこういうことをするのだ。』と言えようか。』・・・彼にのろわせなさい。主が彼に命じられたのだから。たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」（2サム 16：10－12）

この言葉は、ダビデがどれほど打ち砕かれたかを示している。自分が本当に殺人者であると自覚していたので、人殺しと呼ばれることをじっと我慢できた。主も、彼をそう呼ばれた。彼は、サウルやその家族は殺さなかったが、ウリヤの血に関して罪がある。事実、逃亡はその罪がもたらした結果だ(79)⁷⁶。だからダビデは、主がシムイを遣わして呪われたのだと考えた。

ダビデが追われる身になると、だれが彼の本当の友で、だれがそうでないかがはっきりしました。このことはイエス様の場合にも起こりました。主イエスはエルサレムに入られたときに、自分たちの王としてホサナと叫ぶ群衆に迎えられたというのに、わずか5日後、町から‘宿営の外’へ追い出されました。（ヘブ 13：11－13）。シムイは、イエス様の十字架の下の見物人たちと同様に、ダビデを呪いましたが、イエス様の弟子の一人でさえ、そういうことをしてしまったのです。

ダビデと一行は日没前にやっとのことで、ヨルダン川の渡し場にたどり着いた。女子どもたちはくたくたに疲れていて、川から思う存分水を飲むと、地面に倒れ込んで眠った。夜警が組織されたことだろう。ダビデは大祭司ツァドクからの報告を待つと、約束していたから、それが来るまで起きていることにした。逃亡した最初の夜、星空を見ながら、彼は何を考えただろう。同じ空の下で、主が先祖のアブラハムにされた約束を思い出していたかもしれない。

ダビデは袋小路に追い込まれた思いだった。状況は、昔、彼がサウルから逃げていたときより千倍も悪かった。もしアブシャロムが勝てば、ダビデは死ぬことになる。アブシャロムが負ければ、彼は‘最愛’の息子を失うことになる。老王は、何を望み、何を祈ればいいのか分からなかっただろう。しかし石の枕の上に頭を横たえると、ダビデはいつものように夕べの祈りを祈った。それは後に「息子アブシャロムから逃れたダビデの詩」と題された。

主よ。なんと私の敵がふえてきたことでしょう。

私に立ち向かう者が多くいます。

多くの者が私のたましいのことを言っています。

「彼に神の救いはない。」と。

⁷⁶ (79)シムイは大勢が亡くなった疫病や、サウルの娘と側女の息子たちの死のことを憶えていたのかもしれない。

しかし、主よ。
あなたは私の回りを囲む盾、私の栄光、
そして私のかしらを高く上げてくださる方です。
私は声をあげて、主に呼ばれる。
すると、聖なる山から私に答えてくださる。セラ
私は身を横たえて、眠る。
私はまた目をさます。
主がささえてくださるから。
私を取り囲んでいる幾万の民をも私は恐れない。
主よ。立ち上がってください。
私の神。私をお救いください。(詩 3 : 1-7a)

人生で一番苦しい最中というのに、ダビデがこんな詩を創り出せたのは、信じられないことです。主は答えてくださる、主がささえてくださる、主は救ってくださる！ダビデはそんな時も、自分の神をひたすら信頼していたのです。なんの兆しもないときでさえ、神の助けを疑いませんでした。

老王は、自分がこの惨禍を受けて当然だと分かっていました。しかし、彼は、自分には何度も不忠実なときがあったにもかかわらず、神はご自分の約束に忠実であられることを確信していました。確かに、自分の罪が自分の人生、またはもっと悪いことに愛する者の人生を台無しにしたことを見たときでも、神の愛を信頼するというのは、素晴らしいことです。

6章 放蕩息子の父

私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえます

そうこうしているうちに、アブシャロムは抵抗する者もなくエルサレムに侵攻した。予想どおり、彼はただちに宮殿に入った。反乱軍の主要な者たちはみな、すでに‘新しい王’の前に集合していた。前に述べたように、ダビデは自分の友フシャイを都に潜入させていたので、フシャイもアブシャロムの前に進んだ。‘新しい王’が父親の友の心変わりに驚いたのを見ながら、フシャイはしらを切って王に言った。“いいえ、主と、この民、イスラエルのすべての人々とが選んだ方に私はつき、その方といっしょにいたいのです。また、私はだれに仕えるべきでしょう。私の友の子に仕えるべきではありませんか。私はあなたの父上に仕えたように、あなたにもお仕えいたします。”

(2サム 16：18-19)

当時、アブシャロムの周辺にはそんな例がたくさんあったので、フシャイが心変わりしたことを納得させるのはそれほど難しくなかった。

最初、何をすればいいか分からなかったので、アブシャロムは国の賢人アヒトフェルに尋ねた。彼は助言を用意していた。つまり‘新しい王’は、彼と父親との関係が完全に切れたことを国中に示すべきだ、というものだった。それをするために、アブシャロムにとって公然とダビデのそばめたちと寝ることが、一番簡単だった。それは老王に大きな一撃を与え、この息子は反乱を成し遂げる力ある男だということを、民に誇示することになる。

アブシャロムはすぐに、アヒトフェルの助言通りにすることにした。彼は自分がモーセの律法に反していることを知っていたが、気にしなかった。というのは、革命はつねに犠牲を伴うからだ。律法は、第4の戒めを破る者に次のように言っている。“あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。”(出 20：12) “父の妻と寝る者は、自分の父の恥をさらすのであるから、のろわれる。”(申 27：20)

イスラエルの人々はそのような見せ物を体験したことがなかったし、その後二度と出くわすことはなかった。“こうしてアブシャロムのために屋上に天幕が張られ、アブシャロムは全イスラエルの目の前で、父のそばめたちのところにはいった。”(2サム 16：22) そのやり方を想像すると、まずアブシャロムが、公衆の前でファンファーレと共にテントに入り、そのあと召使いがダビデのそばめを一人ずつテントの入口へ連れてきては、戻っていく。エルサレムの住人たちは、ニヤニヤしながら宮殿の屋上をじっと見て、何人の女が中へ入ったかと、指を折って数えただろう。男女のそのような行為が、厳しく外聞をはばかりとされている時代に、この見せ物は身の毛がよだつ事件だったにちがいない。

預言者ナタンを通してダビデに語られた神の言葉がこの日、現実になった。“主はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行なおう』”（2サム 12：11-12）

わたしが引き起こす、わたしが取り上げる、わたしが与える…。ここで、ご自分の民を厳しく訓練して教えるため、今その左の御手を働かせておられるのは、主ご自身だ(80)⁷⁷。“人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。”（ガラ 6：7）ダビデは女に弱かった。今彼は、女のことで屈辱を受けたのだ。

しかしアヒトフェル自身は知らなかったのだが、彼のしたことは結局、王の人生に関しての神のご計画を成し遂げることだった。アブシャロムの道化は、ダビデへの神の怒りの罰ではなく、単に父なる神からのお叱りだけだったことだ。不幸の中にあっても、ダビデは見捨てられたメシアのひな型だったし、彼が詩篇を書いたのは、主イエスに用いられるためだった。

見せ物興行のあと、アヒトフェルはアブシャロムにもう一つ適切な助言をした。その夜のうちに、ダビデを追跡すべきだ、ということだった。“アヒトフェルはさらにアブシャロムに言った。「私に一万二千人を選ばせてください。私は今夜、ダビデのあとを追って出発し、彼を襲います。ダビデは疲れて気力を失っているでしょう。私が、彼を恐れさせれば、彼といっしょにいるすべての民は逃げましょう。私は王だけを打ち殺します。私はすべての民をあなたのもとに連れ戻しません。すべての者が帰って来るとき、あなたが求めているのはただひとりだけですから、民はみな、穏やかになるでしょう。」”（2サム 17：1-3）

反乱を起こしたとき、アブシャロムはすでに 12,000 人の精鋭軍を配置していた。4年かけて、彼はそれほどの数の男たちを自分側に引き入れた。そのときダビデには主と、外国人兵士、ケレテ人とペレテ人、ガテからきたイタイの部下の 1,200 人がいるだけで、アブシャロム軍の十分の一だった。

アヒトフェルは、ダビデ一人に的をしぼるのが最良だと考えた。もし彼らとその夜出発すれば、戦死者は一人だけで、後に戦争が起こることにはならない。バテ・シェバも子どもたちも生き残る。ヨルダン川の浅瀬に野営しているダビデたちは混乱している、というアヒトフェルの想定は正

⁷⁷ (80) “神の左手の仕事”というのはマルチン・ルターが言った言葉だ。意味は、人間に与えられる神の罰。一方“神の右手の仕事”は、神の救いを意味する。

しかた。そこまで30キロも家族を引きずって来て、兵士たちは疲れ切ってぐっすり眠っていた。憔悴し、食料もなく、ダビデの部隊は、その夜、防御態勢を整えることもできなかった。

イスラエル族の首長たちは皆、アヒトフェルの提案に賛成した。しかしアブシャロムは、他の意見も聞きたかったので、フシャイに尋ねた。ダビデが時間をかせげるように、フシャイは死にも狂いで、その夜に行くのはよくないと言った。だれもが老王は熊のように豪胆だと知っている。フシャイはアブシャロムの目に、空想画を描き続けた。もし追撃が延期されれば、全イスラエルはアブシャロムの主張に従うだろう。民はこぞって‘新しい王’の側に付き、そして王は自分の作戦を指揮することができる。町を綱で引いて谷へ落とす・・などなど、始めから終わりまで、幻想を並べた。

しかしその計画は見栄っ張りの‘新しい王’の気に入った。アブシャロムは自分がとても人気があるので、分別ある人物は父の側には残っていないと考えた。アヒトフェル以外の、その場にいた全員がフシャイの意見を支持した。アヒトフェルは

賢明だったので、その弱点に気づいた。絶対に、ダビデには力と軍勢を集める時間を与えてはいけない。しかしだれも彼に賛成しなかった。“アブシャロムとイスラエ

ルの民はみな言った。「アルキ人フシャイのはかりごとは、アヒトフェルのはかりごとよりも良い。」これは主がアブシャロムにわざわいをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれたはかりごとを打ちこわそうと決めておられたからであった。”（2サム 17：14）—これが、主がご自分の者を護られるやり方だった。

アヒトフェルは‘新しい王’が待つなら、戦いに勝つチャンスはないと思った。予備軍の優秀な者たちは、きっとダビデの側に付く。もしアブシャロムが負けたら、そのときはアヒトフェルも命がないだろう。彼はダビデの前に立って、死の宣告を聞きたくなかった。このことを自覚して、アヒトフェルはそっとエルサレムから出て行って、自分の町へ帰った。そして“家を整理して、首をくくって死に、彼の父の墓に葬られた。”（2サム 17：23）

主に油注がれた者に刃向かうことは、小さなことではありません。アブシャロムを支持すると決めたときアヒトフェルは、神の側で戦う者は勝ち組で戦うのだということがわかりませんでした。これは彼の決定的な失敗でした。現代でも、神の子らと戦う者たちが、同じ過ちを犯しています。

アヒトフェルは旧約聖書の中で、イスカリオテのユダのひな型という役割をしています。ユダがイエス様の敵たちに教えたことは、アヒトフェルがアブシャロムにした助言と同じですが、二人と

も助言を求められることはその後二度とありませんでした。ユダも出て行って、首を吊りました。

ヨルダン川を渡る

ダビデが逃亡した第一日目についての聖書の記録は、とても詳しく臨場感にあふれているので、その場において目撃した者が書いたと思われます。目撃者4人の中のだれかが記述した者として考えられています。二人の大祭司、ツアドクとエブヤタル、または彼らの息子のアヒマアツとヨナタン。筆者自身はツアドクの息子アヒマアツだと思いますが、だれだったとしても、それを書いたのは優秀な記者です。

ダビデの友フシャイは、アブシャロムが自分の助言を無視して、すぐにダビデを追いかけていくのを恐れた。それで、彼は宮廷の会議から急いで大祭司たちに使いを送って、ダビデはその夜のうちにヨルダン川を渡らなければならないと伝えようとした。

召使いの少女が水瓶を運ぶように見せかけて、城壁のすぐ外にあるエン・ロゲルの泉の横に隠れている祭司の息子たちに、フシャイの伝言を渡した。不運なことに、一人の少年が伝言の受け渡しに気付いて、アブシャロムに知らせた。‘新しい王’は、暴君がそうであるように、情報集めに抜け目がなかった。

少年の報告でアブシャロムは、ヨナタンとアヒマアツの若い祭司たちは、彼がエルサレムに入ったとき、歓迎の場になかったことを突然思い出した。彼らが城壁の外にいたのは、なぜなのか？当然、自由に動けるためにほかならない。ということは、彼らはダビデの味方にちがいない。

これに気付いたアブシャロムは、ヨナタンとアヒマアツを追って、急いで捜索隊を繰り出した。幸いなことに、一人の賢明な田舎の女が自分の中庭にある空井戸の中に彼らを隠し、蓋をして穀物でその上を覆った。そのおかげで、若い祭司たちはアブシャロムの魔手から逃れた。

夜が明ける前、ダビデと疲れ切った一行は深い眠りから起こされた。兵士たちは眠たがっている妻子たちを引きずって、暗い中で川を渡るしかなかった。浅瀬の岩はすべりやすく、冷たい水を被った者もいただろう。水に濡れた者も濡れなかった者も、いずれにせよ、夜明け前に全員が川を渡り終えた。当時、川の向こう側に多くのイスラエル人が住んでいたが、心理的にはヨルダン川は依然としてイスラエルと他の世界との境界のように思われていた。そこを越えるということはダビデにとって、ささいな事ではなかった。

ヨナタンとアヒマアツが伝えたエルサレムからの報告は、王にとって強い衝撃だったにちがいない。彼の相談相手で友だったアヒトフェルが、自分を殺そうとしていたのか？一族の首長たちがそれを支持したというのか？なぜイスラエルの民は政権交代の方がよかったのか？彼らは、王がそれまで自分たちのためにしたことを忘れてしまったのか？最悪は、アブシャロムが彼のそばめたちを強姦したという報告だった。どうしたら息子が父親をそれほど侮辱できるのか？ダビデは、エルサレムの人々が今、自分のことを、年寄で時代遅れのリーダーだと陰で笑っていると考えたかもしれない。

こんなことすべてが王を老けさせました。人々に対する彼の信頼は、回復するのに人生の最後までかかったかもしれません。しかし、まだひとつの慰めがありました。ダビデは主にすべてを、悲劇ぜんぶを話すことができました。詩篇 69 篇は、このときの詩だったかもしれません。それは後に、イエス様の受難の詩篇のひとつになりました。この詩篇は、ダビデとイエス様が、見物人から受けた恥と嘲笑を描写したものです。

あなたは私へのそしりと、
私の恥と私への侮辱とをご存じです。
私に敵対する者はみな、あなたの御前にいます。
そしりが私の心を打ち砕き、
私は、ひどく病んでいます。
私は同情者を待ち望みましたが、ひとりもいません。
慰める者を待ち望みましたが、
見つけることはできませんでした。
彼らは私の食物の代わりに、苦味を与え、
私が渴いたときには酔を飲ませました。(詩 69：19-21)

それからの数日間、ダビデはさらに 100 キロ、疲れた一行とともに歩かなければならなかった。ヨルダン川を渡ってから、まず北に向かい、次にマハナインにたどり着くまで東へ歩いた。この町はイシュボシェテが治めていたとき、北の部族の首都だった。ここは、先祖ヤコブが怒っているエサウに会う覚悟をしたとき、天使と出あったところだ(創 32：2)。ダビデもここで‘天使’と出会うことになる。

ダビデの天使たちとは、マキル、バルジライ、ショビという 3 人の金持ちで、王とその一行に援助の手を差し伸べて来た。乾燥果実や生きた羊、ベッドまでおびただしい物資がダビデの元へ運び込まれた。そこには 1000 人以上いた上、人数は増え続けていたので、人々に食べさせるのには大量の食料が必要だったのだ。

マキルはよきサマリア人で、彼は政情が悪かったときにヨナタンの息子を保護していた。同じようにして、政治には関わりなく彼はダビデの群れを養った。もう一人の保護者はバルジライで、80歳。3人目の‘天使’は、驚きも驚き、征服された町ラバ出身のアモン人ショビだった。ダビデが同国の民であれ、敵国であれ、いつも篤志家の人々から好感を集めていたのは、注目に値する。

マキルもバルジライもショビも、もしアブシャロムが勝てば自分がどうなるかは、考えなかった。そして彼らは主のみ言葉と自分の良心の声を聞き、政情にかかわらずそれに従ったのだ。

戦う父と子

“ダビデがマハナジムに着いたとき、アブシャロムは、彼とともにいるイスラエルのすべての人々とヨルダン川を渡った。”（2サム 17：24）反乱の数日後、内乱が起ころうとしていた。ダビデへの忠誠を失わず、マハナジムに集まった兵士や予備軍が何人いたのか、言うのは難しい。数千人より多くはなかつたろう。反対に、アブシャロムには 12,000 人の精鋭隊がいて、彼はこのとき従兄弟のアマサをその軍団長に任命した(81)⁷⁸。一方、ダビデは軍を3つに分け、1000人隊長として3人の信頼する者をそれぞれの指揮官とした。ダビデの甥ヨアブとアビシャイ、そしてガテ人のイタイだ(82)⁷⁹。

ダビデは戦いに出ていくつもりだったが、指揮官たちはそれを止めた。王は敵の一番の的なので危ない。また彼は民の 10000 人以上に値するから、死んでほしくない。ダビデはすぐに彼らの思いを受け入れた。自分の息子と戦わないでよくなったので、彼はほっとしたことだろう。

急いで集めた軍勢が前戦へ出て行くとき、老王はマハナジムの門のそばに立って出発を見送った。彼は3人の千人隊長たちに悲壮な願いを言った。「私に免じて、若者アブシャロムをゆるやかに扱ってくれ」（2サム 18：5）。この言葉を聞いてだれもが、王がまだ息子をどれほど愛しているか、そして彼にもう一度チャンスを与えたいと願っているということを理解した。マハナジムにいる間中、ダビデは数百年前の先祖ヤコブと同じことで、主と格闘した。父親の罪のために子どもたちが苦しみを受けるのか？ヤコブは言った。“私はあなたを去らせません。私を祝福してくださなければ”（創 32：26）つまり、私を、私の子どもたちをも。

対抗する軍勢は密林の中で戦った。戦闘にはたやすい地形ではなかった。エフライム族の領地はヨルダンの西にあったが、どういうわけかその対岸の東側はエフライムの森と呼ばれていた。ダデ

⁷⁸ (81) アマサはダビデのもうひとりの姉アビガルの息子である。

⁷⁹ (82)1000人隊長が3人だったことから、ダビデの軍勢は3000人ぐらいだったと推察できる。

の軍には、以前に難しい地形で戦った経験者が多くいたが、アブシャロムの軍隊にとっては慣れない状況だった。彼らが有利な点は、ダビデの兵力をはるかに越える数だけだった。

馬は役に立たなかった。たぶん、彼らが森の中ではうまく乗りこなせなかったのだ。それで、アブシャロムもラバに乗らなければならなかった。気性の荒いラバの上にふさふさの髪という組み合わせが、実の父に反旗を翻した若者にとって致命的なものとなった。アブシャロムは、丈夫な樫の木に突っ込んで、宙づりになった。彼の豊かな髪が枝にからまって引っ掛かり、ラバが逃げてしまったのだ。あわれなアブシャロムは木にぶら下がって、どれほどの時間、逃れようともがいたのだろう。それは分からないが、彼の髪はとても多かつたし、木の枝は強すぎたので、離れることができなかった。

ダビデの兵士が偶然それを見つけて、ヨアブに報告した。アブシャロムは自分の状況を悟るだけの頭はあつただろう。彼の命の砂時計はもうすぐ落ちてしまう。良心に反する罪を多く犯してきたこの男は、このとき神に顔を合わせる用意をしたのだろうか？最後には‘父と天に対して’の罪を告白したのだろうか？主の憐れみを願って泣いたのだろうか？それも分からない。

しかし、アブシャロムは信仰深い父の息子だ。彼の母は異教徒で、彼自身も母のように生きたが、彼は子どものとき神のみ言葉を教えられた。何百回も父や兄弟たちと食前に、また神殿礼拝で賛美歌を歌ったので、死に直面したとき、彼はその数行を思い出してみ言葉にしがみついたかもしれない。

神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、
あなたの豊かなあわれみによって、
私のそむきの罪をぬぐい去ってください。(詩 51 : 1)

もしアブシャロムが木にぶらさがっているときに、この箇所を憶えていたとしたらどうだっただろう。彼には、この詩句は父が姦淫と殺人を犯した後に書かれたことがわかっていたにちがいない。彼の父が詩で示した手本は、人生最後の数分間にでも主のあわれみに気付くよう、アブシャロムを導くことができたのだろうか？ダビデは息子たちにとって、揺るぎない道德の見本となることには失敗したが、あわれみを受ける生きた見本であったのは確かだ。しかしこれが、彼が出来た、またどんな親でも子どもたちに残すことのできる、最も大切な見本かもしれない。

もしみなさんが、子どもたちの前で神の戒めに従う生活をしてこなかったとしても、神の憐れみの大きさの見本を見せることはできます。子どもたちに、自分が犯した過ちを認めなさい。自分にはイエス様と日ごとの赦しが必要であることを、彼らに見せなさい。みなさんがいなくなったと

き、子どもたちはみなさんが、罪があるにもかかわらず、教会礼拝と聖餐式に与って、どんなに聖書と賛美歌に縋っていたかということをお出しすでしょう。それ以上の遺産はありません。

しかしアブシャロムの最後のときの話はまだ終わっていない。謀反を起こした王子が窮地に陥っていることを聞いたとき、ヨアブは怒った。そのことを知らせた者は、どうしてそのときその場でアブシャロムを殺さなかったのだ？しかしその者は、町の門で王が言った言葉を聞いたので、どうしても彼の息子に害を加えられなかったのだ。

ヨアブはだれかがアブシャロムを殺すことを望んだが、だれもしようとしなかったので、自分が殺すことにした。“ヨアブは、・・手に三本の槍を取り、まだ櫛の木の中真中に引掛かっただま生きていたアブシャロムの心臓を突き通した。ヨアブの道具持ちの十人の若者たちも、アブシャロムを取り巻いて彼を打ち殺した。”（2サム 18：14-15）司令官がアブシャロムにとどめを刺して、道具持ちたちはそのふりをしたただけだった。しかしヨアブの部下たちが、アブシャロムの遺骸を侮辱したことで、彼らの憎しみの深さがわかる。

ばか者は知恵と教を見下す

アブシャロムの人生は、罪の力をはっきりと見せました。人間的な判断で言うと、父親が彼を訓練しなかったし、母親は異教徒で、兄は妹を強姦したが罰を受けなかったというのを見てきたから、彼は道を踏み外したのです。しかし最後の審判のときには、アブシャロムは自分の罪を人のせいにはできません。彼自身が間違っただ選択をしたのです。責任は彼のものです。しかしもし彼が最後の瞬間にでも、自分の罪を神の子羊の上に置いたなら、違っただきます。その後、神の子羊は全世界の罰を全部、ご自分の肩に負って罪を償ったださるからです。

おそらくヨアブは、平和のためにはアブシャロムが死ななければならぬと考えたのだらう。生きていれば、王子はまた次の謀反を引き起こすにちがいない。それだけでなく彼に対する司令官の思いには、私的な部分もあっただ。それはアブシャロムが彼の麦畑を燃やしたことに對する恨みだっただ。しかしアブシャロムの悲劇に自分がどう関わっただか、なぜヨアブは考えてみなかったのだらう。彼こそ、ダビデが息子に情けをかけるようにするため、テコアからの婦人を送っただ張本人だっただ。彼はゲシュルからアブシャロムを連れ帰り、彼が宮廷や上流社会に戻るよう取りはからいさえした。もしヨアブがアブシャロムをゲシュルに留めていたなら、内乱は起きなかったのだ。

ダビデは司令官たちに、息子をゆるやかに扱っただくれるよう頼んだが、ヨアブはそれまでのように、王である叔父の願いを無視した。なぜなら、何をしてもダビデは罰を与えないと、ずっと以前

から彼にはわかっていたので、自分のしたいことをしたのだ。しかし、愛する息子を失うことはダビデにとって大きな悲しみだったので、彼はヨアブを決して赦さなかった。この出来事は、身内の男二人の関係に取り返しのつかない害悪となった。

アブシャロムの死は決して英雄的なものではなかった。彼の死は愚か者、反逆者にふさわしいものだった。「賤けなしで育った者は、名誉なしで死ぬ」というフィンランドのことわざは、このことが本当だと言っている。損傷した上に侮辱を加えるため、ヨアブはアブシャロムを罪人として葬ると決めた。せめて息子をベツレヘムの家族の墓に葬ることができるだろうという、王の僅かな慰めをも彼は退けた。そうではなく、アブシャロムの遺体はエフライムの森の中に掘った穴に、動物の死体のように投げ込まれ、その上に岩が積み重ねられた。墓石もなかった。昔のイスラエルでは、罪人だけがそのように扱われた。

アブシャロムは自分の悲劇的な運命を予感していたのかもしれない。というのは、彼は王の谷に自分のための標柱を立てていたからだ。“アブシャロムは存命中、王の谷に自分のために一本の柱を立てていた。「私の名を覚えてくれる息子が私にはいないから。」と考えていたからである。彼はその柱に自分の名をつけていた。それは、アブシャロムの記念碑と呼ばれた。今日もそうである。”（2サム 18：18）

ところが数章前には、彼に3人の息子がいたことが記されています。この違いの説明としては、その3人ともが若くして死んだのだというほかありません。娘のマアカ（タマル）だけが大人になりました。彼女はユダの王妃になって、イエス様の祖先の一人になりました（2歴 11：20-22）。信じられようが信じられまいが、アブシャロムは娘を通して私たちの救い主の親族の一人となったのです。

ユダヤ人の歴史家ヨセフスによると、イエス様のころにもまだ、アブシャロムの標柱はエルサレムの近くに立っていました(83)⁸⁰。ということは、ダビデの32代目の子はその傍を何度も通られたのです。イエス様は通り過ぎるとき、何を考えられたのだろうと思います。イエス様は、彼の無駄だった人生や彼を待っていた永遠の地獄のことで、その先祖を哀れに思われたでしょうか？それとも、アブシャロムが土壇場で神の方に向いて、天国へ行けたのを喜ばれたでしょうか？

王子の死後、彼の従兄弟アマサは軍隊をまとめることができなかった。それが混乱を引き起こし、ダビデの軍隊がアブシャロム勢を叩き潰した。戦闘犠牲者は2万人と言われ、その大部分がアブシャロムの兵士だった。聖書には、森が剣より多くの男たちを‘呑み込んだ’と記している。ア

⁸⁰ (83) 現在もあるアブシャロムの墓はのちに建てられた。信心深いユダヤ人は、そこを通るときは石を投げた。

ブシャロムの兵士たちは道に迷ったり、谷に落ちて足や首を折ったりして、しまいには疲労や出血、飢えや渇きで死んでしまったのだ。結局、主に油注がれた方を拒んで、自分たちの好みの王を選んだ者たちに、悲劇と死が報いとなった。

放蕩息子の父ダビデ

戦いが止んだとき、大祭司ツアドクの息子アヒマアツは、王に報告するためマハナイムへ走って行きたいと、司令官に願い出た。彼は自分が届ける報告は良いものだと考えたが、ヨアブには分かっていた。戦争の結果はダビデに喜びをもたらさないだろうと。ヨアブは彼に言った。「息子が死んだことは、王にとって良い知らせではない」(2サム 18：19 [New Living Translation])。実は、ヨアブはダビデの反応を心配していたのだ。とても心配だったので、情報を伝える役目のアフリカ人奴隷を最初に王の元にした。しかしアヒマアツはアフリカ人のあとから飛び出して、途中で追い越した。この若い神学者は軟弱ではなかった。

ダビデはマハナイムの門のところに一日中座って、戦いの結果の知らせを待ち望んでいた。彼も‘いい知らせ’を待っていたのだが、部下たちにとってのいい知らせとは意味が違っていった。一人、また一人と町に到着した伝令の話は詳しくて生き生きしているもので、この記録も目撃者によるものにちがいない。たぶん伝令のひとり、若い祭司アヒマアツが書いたと思われる。(この場面全部については、2サム 18：19-32 を読んでください。)

伝令が到着したとき、王が最初に言ったことは何だったか？それは「勝ったのか、負けたのか？」だろうか？いや、そうではなく「アブシャロムは無事か？」だった。アヒマアツはそんな質問を想定していなかったもので、王に本当のことを言えなかった。アフリカ人が到着すると、ダビデは同じ質問をした。「アブシャロムは無事か？」このことから、父親は一日中、心の中でただ一つの思いを巡らせていたことが分かる。息子の幸運だけを。ダビデにとって、伝令の肯定が最良の答えだった。

息子の死を聞いたダビデの反応は、先の戦争のときに日本の親たちが示した態度とは大きく違っていました。日本の親たちは息子の勇ましい死の知らせを、微笑して受けるようにと教え込まれていました。ダビデは微笑どころか、号泣したのです。彼の生涯で、この息子の死ほど彼を打ちのめした悲しみはありませんでした。老王

が門の上の部屋で泣き叫んでいるのを、町中の人が見ました。“わが子アブシャロム。わが子よ。わが子アブシャロム。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブシャロム。わが子よ。わが子よ。”(2サム 18：33)

ダビデは悲しみのあまり声を上げて泣きました。彼の愛しい、かわいい息子はもう二度と家へ帰ってこない。和解することもできない。再出発はない、新しくやり直すことは不可能だ。この才能ある若者は別の道を選んでいれば、多くのことを成し遂げることができたでしょう。それだけに父の愛は大きかったのです。アブシャロムはうぬぼれて強情でした。その性格も、しっかりした育て方をされたなら違っていただろうでしょう。ダビデにとって最悪なのは、アブシャロムが自分の父親に仕掛けた戦争で死んだことでした。この思いが、彼の魂に深い傷を残したのです。死の床にあったときでも、ダビデは不幸な息子の名を口にしました（1列2：7）。

死のもたらす静寂が町を覆いました。勝利の兵士たちが、悲しみと恥をかかえて、いわゆる‘しっぽを足の間に垂れた’状態で、戦場から戻ってきました。王は彼らの勇敢な行いをねぎらうべきなのに、門口の上の部屋で自分の気持ちを吐き出して泣いていました。ダビデの嘆きは、子どもが何をしようと、父親は子どもを愛していることを兵士たちに知らせました。実にこの物語は、世界の文学作品の中でも、父性愛の最も感動的なもののひとつです。イエス様があの有名な、父と放蕩息子のたとえ話をされたとき、おそらくダビデの悲しみを心に持っておられたことでしょう(84)⁸¹。

2サムエル記19章には、訳によって‘よき知らせ’、または‘吉報’という言葉が何回も出てきます。新約聖書が‘良い知らせ’について私たちに伝えていることの根底には、アブシャロムの死の話があります。考えてみてください：戦いには勝ちましたが、王の息子は死にました。この知らせは王と息子以外のみんなにとって、良き知らせです。聖金曜日に、おそらく父なる神は天国の神殿を行ったり来たりして、ダビデのように悲痛な言葉「わたしの息子、わたしの息子」と叫ばれたことでしょう。父なる神が、私たちのために罪の赦しを成し遂げるのに支払われた代償は、それほど高かったのです。神の赦しは、もしアブシャロムが受け取りさえしたなら、彼にも及んだのです。

ヨアブには、自分の身勝手な振る舞いを恥じた様子が見られません。アブシャロムを殺したあと、彼は何事もなかったように、王の前へ進み出て言いました。“立って外に行き、あなたの家来たちに、ねんごろに語ってください。あなたが外においでにならなければ、今夜、だれひとりあなたのそばに、とどまらないでしょう。そうなれば、そのわざわざいは、あなたの幼いころから今に至るまでにあなたに降りかかった、どんなわざわざいよりもひどいでしょう。”（2サム19：7）

ヨアブの言った事そのものは正しかったかもしれませんが、嘆き悲しんでいる父親に向かってこんなに冷たく言うのはどうだったのでしょうか？ダビデは指揮官たちに、アブシャロムを生かしてお

⁸¹ (84) 放蕩息子はアブシャロムのように外国へ行った。彼はアブシャロムのように、世間の前で父を侮辱した。彼の父はダビデのように、息子が帰って来るのを待ちこがれた。彼はダビデがアブシャロムを赦したように、息子の全てを赦した。

いて欲しいと特に頼みました。ヨアブは、なぜ王の願いをきかなかったのか、説明すべきではなかったでしょうか？彼は、息子を悼んでいる父親の心を、少しでも思いやるべきではなかったでしょうか？

ダビデはアブシャロムの死について、最後まで甥と話せなかったようだ。しかし今や彼はヨアブのやり方にうんざりして、彼を司令官から罷免することにした。ダビデはすぐに、もうひとりの姉アビガルの息子アマサを軍の新しい指揮官に指名し、次のような言葉を送った。“あなたは、私の骨肉ではないか。もしあなたが、ヨアブに代わってこれからいつまでも、私の将軍にならないなら、神がこの私を幾重にも罰せられるように。”（2サム 19：13）

しかし問題は残っている。アマサは反乱の戦いで、王を殺そうとするアブシャロム側に加わっていた。しかしダビデは、抵抗できないで木からぶら下がっている息子を刺し殺したヨアブよりましだと、考えたにちがいない。アマサは実際、職業軍人ではなかった一少なくとも、ダビデの勇士一覧には彼の名前は出ていない。彼が指揮した戦いは、多くの犠牲者を出して混乱のうちに終わっている。しかしダビデはヨアブを二度と見たくなかったので、任務にふさわしいかどうか関係なく、アマサを指名したのだ。

アブシャロム側で戦った兵士たちはアマサが新しい指揮官になったことを聞くと、自分たちも軍法会議にかけられることがないと分かった。済んだことは済んだことだ。それで、アブシャロム軍の残りの者たちは、アマサと共にダビデの軍隊に簡単に戻れると考えた。しかしこのことは、王のために死ぬ覚悟だった者たちにとってどんな影響を与えただろう。彼らは、王は誠実な者よりも、裏切った者に報いたように思ったかもしれない。

王がエルサレムに戻る

アブシャロムが負けたあとで、イスラエルの人々は老王が自分たちにどれほど良いことをしてくれたかを、突然思い出した。敵国のくびきから解放してくれたのは誰だった？ダビデ王だ。自分たちのために美しい都を征服したのは誰だった？ダビデ王だ。30年間公平に自分たちを治めたのは誰だ？ほかでもないダビデ王だ！

首導者たちが王のためにできる最小のことは、彼を凱旋式の行進で都に迎えることだった。しかし誰が指図するのだ？大部分の族長がアブシャロムと共謀していたので、彼らにはその度胸がなかった。反乱はユダの領域のヘブロンで始まったが、反乱軍に加わったのは、最終的には北の部族の者たちの方が多かった。

ぐずぐず延ばしにがまんできなくなると、ダビデは自身の部族の者にヨルダン河を渡る準備をするよう、秘かに言いつけた。彼らは指図に従って、自分たちだけで、王をエルサレムに移すことになった。他の10部族の者たちは後で腹を立てた。彼らはこの重要な場面で出し抜かれ、面目を失ったと思ったからだ。10部族は、弱小のユダ族より多くの分け前を王からもらえると欲していたのだ。こんなふうには、分裂の種が北の部族の心に蒔かれた。

ダビデがエルサレムから逃れたとき、だれもが彼を餌食にしたが、今勝利者として都に戻ったので、状況が違った。実際、彼を欺いた者が、率先して彼の帰還を歓迎する中にいた。中でも一番ダビデを罵ったシムイは、ヨルダンまで彼を迎えに行き、後悔している、役に立ちたいと自分を売り込んだ。そして、王と彼の家族を自分の船で渡らせるという特権を願い出た。

ヨアブの兄弟アビシャイは再び、この卑怯者の首をはねたいと願ったが、ダビデはもう一度それを止めた。“「ツェルヤの子らよ。あれは私のことで、あなたがたには、かわりのないことだ。あなたがたは、きょう、私に敵対しようとするのか。きょう、イスラエルのうちで、人が殺されてよいだろうか。私が、きょう、イスラエルの王であることを、私が知らないともいうのか。」そして王はシムイに、「あなたを殺さない。」と言って彼に誓った。”（2サム 19：22-23）ここではダビデは、自分の敵に対してとても寛容で立派に見える。(85)⁸²

ところが本当のところ、ダビデはシムイの呪いを決して忘れませんでした。記録にある王の最後の言葉はこの男に対する仕返しに関するものでした。神の正しい人ダビデですが、晩年もシムイに対する苦い思いから解放されなかったのでしょうか。自分の被った不正を赦して忘れることは、どんなに信仰心の厚い人にとってさえも、それほどに難しいことでしょうか。人の罪を海の深みに投げ入れて、きっぱりと忘れることができるのは神だけでしょうか。後で、この問題に戻ることにします。

かつてダビデの団を、亡命者キャンプで養っていた援助者バルジライも、歓迎するためにヨルダン川にいた。80歳になっていたが、彼の頭も気骨もまだ損なわれていなかった。王はバルジライに、都へいっしょに来て住むことを勧めたが、彼は丁寧に断った。上等の食事や楽しい宴会も、この老人の気を引かなかった。代わりに自分の息子をエルサレムの宮廷に送ることを望んだ。ダビデは死の床で、バルジライのすばらしい行いを思い出したものだ。

⁸² (85) 文字通りの翻訳では；ダビデは「ツェルヤの息子たち、なぜ私に対してサタン（敵対者）になりたいのか？」と言った。ダビデはしばしば甥たちの強暴さにため息をもらしたが、それをなんとかすることはなかった。

エルサレムに近づいたとき、ダビデは親友ヨナタンの息子メフィボシェテに出会った。「メフィボシェテよ。あなたはなぜ、私といっしょに来なかったのか」と、ダビデは悲しんで言った（2サム19：25）。メフィボシェテは、召使いのツイバがあの大変な日に、乗り物がなくては何も出来ない彼を都に置き去りにしたと言って、召使を非難した。彼は自分の悲しみを表すため、王が亡命していた間中、体も洗わず髭も剃らないでいたと言った。確かに、彼はその言葉どおりの様子をしていた。

ツイバとメフィボシェテのどちらを信じればいいのか、ダビデには分かりませんでした。それで彼は、サウルの地所を二人で分配するように命じました。驚くことに、王はどちらのことも悪くは思っていないでした。どちらの言葉を信じるかは、読者が決めればいいのですが、筆者にはメフィボシェテの説明の方が本当のように聞こえます。サウルの召使いだったツイバは、国がアブシャロムのものになると、自分には将来性がないと分かって、今の主人を犠牲にしてもダビデに仕えようと思ったのかもしれない。

その上、肢体の不自由なヨナタンの息子が、アブシャロムの反乱の結果、イスラエルの王になろうと考えることなど、ありそうもないことでした。メフィボシェテは、数年間同じ夕食のテーブルに着いていたので、アブシャロムをよく知っていました。アブシャロムは王座を狙おうとする者だれでも、良心の痛みなく首をはねるだろうということも明らかです。父親を追い払おうとするぐらいだから、自分にも同じやり方をするだろう。そしてイスラエル人は多分、アブシャロムを退けて自分を選ぶということはないと、悟るだけの目が彼にはありました。だから、ツイバが言ったことは全部嘘だという方が、可能性が高いと思われます。

ダビデがこのことをはっきり理解していなかったので、友達の息子の評判に汚点が残ってしまいました。しかし主はメフィボシェテを護られました。彼の息子ミカから大きな家族となり、ヨナタンの家系はミカを通して、実にバビロン捕囚まで続いたのです（1歴8：34-40）。

本当の信者は、いい時も悪い時も神の油注がれた者の側にいました。主はダビデに従った者たちの忠誠に報い、その名前とよい業が聖書に記録されるようになさいました。このように彼らは世の終わりまで記憶されますが、一方、シムイや油注がれた人に背いた者たちの名には、永遠の汚点が貼り付くのです。

このことは今でも真実です。主はご自分を信じる者たちがどんな扱いを受けたか、決してお忘れにはなりません。迫害を受けているクリスチャンに冷たい水を一杯与えたり、メディアの非難を受けている人を公然と支持したりする人はだれでも、報いられないことはありません。

もう一つの謀反

エルサレムに着いてすぐ、ダビデはそばめたちに関する係争を解決することにした。彼は彼女たちに会いたくなかったので、みんなは見張りの付いた家に移された。彼女たちは閉じこめられて、相手が生きているのに未亡人としてそこで後の人生を送った。

かわいそうな女たち—彼女らは、本当にそんなひどい扱いを受けなければならなかったのだろうか？確かに彼女たちのせいではなかった。ダビデがそばめたちを置き去りにし、アブシャロムが彼女たちの同意を得ないで自分のしたようにしたのだ。ダビデは、アブシャロムの魅力で女たちが欲求不満を解消したのではないかと疑ったのだろうか。王は、モーセの律法が宣言しているように、彼女たちがほかの者と結婚することを禁じた。一方、どんなときでも、女たちとその子供たちが安全な生活をして、安定した収入があるようにした。

この時のことと思われるが、ダビデは宮廷に宦官を雇い始めた。1 歴代誌 28：1 で廷臣とか役人と翻訳されているのは、実は去勢された男のことだ。ハーレムがあるところにはどこでも、性的欲求不満の女たちが召使いと性関係をもてないよう、宦官がいた。

一夫多妻の罪は男の去勢という、さらなる罪を作り出しました。モーセの律法は去勢には否定的です（申 23：1）。イスラエルではこの種の手術は許されていないので、ダビデやのちの王たちは宦官をアフリカから買っていたと思われます。しかし、こんな非人間的行為を許した最初のイスラエル王であることは、ダビデの誉れにはなりません。

ダビデはイスラエルの王に復位したが、国はまだすっかり平和になったというわけではなかった。王はユダ族をえこひいきしているという恨みが、北の部族たちの間で募っていた。強い扇動者と、王に背くようにという 10 部族への合図の角笛の音があるだけでよかった。このとき角笛を吹いたのはシェバという者（サウルの召使いツィバと混同しないように）だった。彼はベニヤミン族で、彼らは自分の一族から王が出て欲しいと望んでいた。おそらくシェバ自身が王座に着くことを夢見ていたのだろう。

ダビデは、新しい司令官アマサにシェバの反乱を鎮めるよう命令した。反乱は野火のように広がっていて、時間がなかった。しかしアマサが素早く動かなかったので、ダビデはアビシャイに頼るしかなかった。「私の家来を引き連れてシェバを追いなさい」と彼は甥に命じた。ヨアブはまだエルサレムに戻っていなかったが、王の許しを得ないで追跡の遠征に加わった。そうすると、大部分の兵士が彼を指揮官として受け入れた。

追放されていたヨアブは、25 年前にサウルの指揮官を殺したのと同じ欺き方で、新しい司令官（従兄弟のアマサ）を取り除こうと謀った。この二人が出会ったとき、アマサは従兄弟の帯に結

びつけられた剣の鞘を見たのに、何の疑いも持たなかった。“ヨアブはアマサに、「兄弟。おまえは元気か。」と言って、アマサに口づけしようとして、右手でアマサのひげをつかんだ。アマサはヨアブの手にある剣に気をつけていなかった。ヨアブが彼の下腹を刺したので、はらわたが地面に流れ出た。この一突きでアマサは死んだ。”（2サム 20：9－10）

ヨアブはユダと同じ振る舞いをしました。彼も裏切るために友に口づけをしたのです。ヨアブは、アマサが反乱に加わって王を裏切ったからだと言って、自分を擁護したかもしれません。彼は今度もまた、ダビデが特に出した命令に背きました。アマサが死んだあと、ヨアブは以前のようにダビデ軍の司令官の役割に戻りましたが、だれも抗議する者はありませんでした。

北の部族の反乱軍は崩壊し始めた。終いには、シェバの部族の者だけがダンの北辺の町アベルに逃れて、戦い続けた。ひとりの知恵のある女が、シェバの首を城壁からヨアブへ投げて、町に攻め入られるのを防いだ。

終わりよければすべてよし。反乱は収まって、ダビデの最後の戦いは終わった。ダビデは再び、国の至高の支配者として王座に座ることができた。ヨアブがエルサレムに戻るのを歓迎するのは、ダビデには易しいことではなかったにちがいない。しかし、反乱を終わらせた勝利の司令官ヨアブから、ダビデは逃れられなかった。殺人をしようがどうしようが、ヨアブは何事もなかったように、前からの地位に居続けた。気の毒に、ダビデは晩年はこの鉄面皮の甥と、毎日宮廷で顔を会わせなければならなかった。

7章 いつまでも主の家に

まことに、私のいのちの日の限り、
いつくしみと恵みとが、
私を追って来るでしょう。

私は、いつまでも、主の家に住みましょう。

主は全ての敵から自分を救ってくださったと、ダビデが言える日がついに訪れた。感謝に満ちて、彼は詩篇 18 篇を書いた。そのことは 2 サムエル記 22 章にも書かれている。詩篇は次のように証している。

主はダビデの岩、そのやぐら、その盾、その救いの角である。

主は高い天から御手を遣わしてダビデをとらえ、

天地をゆるがして水の深みから引き上げてくださる。

主は正しい者に、その正しさのため報いてくださる。

しかしよこしまな者は顧みられない。

主はダビデに、その正しさのゆえに敵との戦い方を教えてくださる。

ダビデは祈る。主が諸国の民を自分に従わせられますようにと。

ダビデは、無力な自分が小さな子どものように、主に助けを求めたときに起きたことを、生き生きと描写している。

すると、地はゆるぎ、動いた。

また、天の基も震え、揺れた。

主がお怒りになったのだ。

煙は鼻から立ち上り、

その口から出る火はむさぼり食い、

炭火は主から燃え上がった。

主は、天を押し曲げて降りて来られた。

暗やみをその足の下にして。(2サム 22:8-10)

ダビデは、どうしていつも主が自分を助けてくださったのか考えて、次のように結論している。

主は、私の義にしたがって私に報い、
私の手のきよさにしたがって私に償いをされた。
私は主の道を守り、
私の神に対して悪を行なわなかった。(2サム 22：21-22)

これは、ダビデがまだ自分の目から見ても正しかったときの信仰でした。しかし彼がもはや“私は主の前に全く、私の罪から身を守る。”(2サム 22：24)と言えない時が来ます。ダビデの言葉がダビデの子の言葉となったのは、そのときでした。正にイエス様は、全世界でただ一人、上の詩の言葉に当てはまるお方です。

神の国で最高の戦士であるダビデが、自分の中に潜む敵との戦いに敗れたとき、神はご自身の戦士を戦いに送られました。イエス様はただ一人、最後まで手を汚すことなく、常に神の道を辿られました。ですから死が襲ったとき、3日目に父なる神は御手を伸ばしてイエス様を深い水から引き上げられ、その一人子を死から目覚めさせられました。

主は生きておられる。
ほむべきかな。わが岩。
あがむべきかな。わが救いの岩なる神。
この神は私のために、復讐する方。
諸国の民を私のもとに下らせる方。(2サム 22：47-48)

この詩篇でダビデは、イエス様の甦りと、敵に勝利することを予言しています。読者のみなさん、もしあなたがイエス様を信じるなら、詩篇 18 篇の約束があなたの人生にも実現するのです。主はあなたの岩、あなたの砦、あなたの救い主です。イエス様は御名を呼び求めれば、いつも助けてくださいます。エペソ 6 に言われている‘武器’を持って、御国のためにどう戦えばいいか教えてください。主は、敵がどんなに力で優っていようと、すべての敵からあなたを助け出してくれます。そして最後には、死から救ってくださるのです。

神殿建設の準備

前述したように、ダビデの統治の始め 20 年間は、戦争の時代でしたが、後の 20 年間は神殿の準備と礼拝改革の時でした。神の家を計画することと、礼拝を改革することは、実は同じことの裏表です。

ダビデは、これからの神殿は壁、床、天井があるだけでは十分ではない、と考えた。これは、神の栄光の問題にほかならなかった。“・・主のために建てる宮は、全地の名となり栄えとなるように大なるものとしなければならない。・・”（1歴 22：5）神の聖所全体はできるだけ美しく、調和的で、風雅でなければならない。また人の目にも、神と出会う場所には安らぎが感じられるように。

歴代誌からは、ダビデは最後の 10 年間で神殿建設の青写真を作ったことが分かります。彼は調度品や装飾品、工芸品も細部にわたって計画しました（1歴 29：11－18）。この点で、彼を新しいモーセと呼ぶことができます。モーセとの共通点として、ダビデは神殿の青写真を直接天から受け取ったと言う注釈者もいます。しかし他の注釈者は、ダビデは神殿の建物に幕屋の元の様式を応用したのだと考えています。もしそうなら、ダビデは彼が発揮した他の多くの才能に加えて、優れた建築家であり、設計家でもあったと言えます。

ソロモンは神殿事業の始めころに生まれた。彼の父親が 50 歳ごろだった。準備をしている間に、子どもだったソロモンは 10 代になった。彼が生まれる前、主は彼の父に、神の家を建てるのは平和な者でなければならないと言われた。ダビデの上の息子たちは、父親より平和であるとはとても言えなかったため、この任務にふさわしくなかった。

ある日、父は 10 代の息子ソロモンを呼び寄せて、彼の生涯の使命を話して聞かせた。ダビデは自分の思いを伝える力を持った人物だったから、ソロモンは父親の熱意をよく理解した。王は次のように、跡取り息子を励ました。“そこで今、わが子よ、主があなたとともにおられ、主があなたについて語られたとおり、あなたが、あなたの神、主の宮をりっぱに建て上げることができるように。ただ、主があなたに思慮と分別を与えて、あなたをイスラエルの上に任命し、あなたの神、主の律法を守らせてくださるよう。主がイスラエルについてモーセに命じられたおきてと定めをあなたが守り行なうなら、あなたは栄える。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。”（1歴 22：11－13）

父親が死ぬと、ソロモンはアラウナの脱穀場に神殿を建てました。それは、世界で最も美しい建造物の一つでした。最初の神殿はバビロン人が破壊するまで、4 世紀近くエルサレムに立っていました。ツエルバベルとヘロデの第 2 の神殿は、結果的にはローマに滅ぼされるまで同じ場所に 500 年ありました。しかしダビデの 32 代目の子は、“ソロモンよりまさった（ルカ 11:31）”方です。彼は先の建設者たちができなかったことを成し遂げられました。ご自分の民のため、その罪が一度だけ贖われる場所－不滅の神殿を建てられたのです（ヨハ 2：19－21）。

次の王はだれか？

老王は徐々に弱っていき、床に就いたままになった。ダビデは旧約聖書に出てくる他の人たちの年齢に届かず、わずか 70 年生きてただけだった。前述したように、アブシャロムが起こした悲劇的な反乱が、王の寿命を縮めたのかもしれない。詩篇 41 に、病床での思いが述べられている。

私の敵は、私の悪口を言います。

「いつ、彼は死に、その名は滅びるのだろうか。」

たとえ、人が見舞いに来ても、その人はうそを言い、

その心のうちでは、悪意をたくわえ、

外に出ては、それを言いふらす。

私を憎む者はみな、私について共にささやき、

私に対して、悪をたくらむ。

「邪悪なものが、彼にとりついている。

彼が床に着いたからには、

もう二度と起き上がれまい。」(詩 41 : 5 - 8) ⁸³(86)

残りの人生を全ての敵から解放されることを信じて、ダビデは詩篇 18 を書いた。(この詩篇のことは、この章の始めに取り上げた) しかしその約束は、多くの神の約束のように、御国に入ってから初めて完全に実現する。

王の血のめぐりが悪くなって、床の中でも暖かくならなかった。一人の宦官が老王の‘あんか’の役目をする若い美女を見つけるべきだ、と提案した。この案はダビデから出たのではなかったが、彼は反対もしなかったようだ。このときバテ・シェバは 40 歳くらいで、女性の絶頂期だったのに、なぜ、夫を暖める役目を彼女にと、考えられなかったのだろうか。それとも、だれか宮廷の重要人物が、彼女を死にそうな王から遠ざけておこうとしたのかもしれない。というのは、後継者の順位がまだ公にされていなかったからだ。支配者の死の床には、権力を狙う者たちがしきりに寄っていくものだ。

このころの話はみんな、ハーレムにいるというのに、老王がどんなに孤独であったかを、胸が痛くなるほどあからさまにしている。もしダビデがひとりだけの妻と結婚していたなら、彼女は最後まで彼と一緒にいただろう。しかしダビデの歴史は、一人の女で満足しない男が老いてから孤独になるという、説得力ある見本となっている。

⁸³ (86) この詩は明らかに早い時期に作られているが、晩年のダビデの病にも当てはまる。続いて起こったことでわかるように、ダビデは彼を妬み、憎み、噂をまき散らす者たちに囲まれて、終わりまで陰謀の中で生きなければならなかった。

イスラエルで最も美しい女の子を捜すため、一種の美人コンテストが行われた。そしてシェネム人でアビシャグという名の美女が、この任務のために選ばれた。年老いた王と 10 代の女の子が一つのベッドに、毎日毎日、日が一昨日いるわけだ。年も人生経験もひどく違った二人がどんな話をするのか、想像するのも難しい(87)⁸⁴。

聖書によると、二人は性的な関係を持たなかったようだ。そんなことは、彼にとって永久に終わっていた。

そんな中で老王は、死ぬ前にもう一度謀反に遭うことになる。それはまたもや、彼自身の家族の中から起こった。生きていた最年長の王子アドニヤが、自分の支持を集めて、王冠を狙った。王が民の目から隠されていたので、人々はこれを王から出たことだと思ったかもしれない。

アドニヤは、彼の死んだ兄アブシャロムと同じくらい美男子だった。国民への自分像を造り出すため、彼は兄を手本とした。“一方、ハギテの子アドニヤは、「私が王になろう。」と言って、野心をいただき、戦車、騎兵、それに、自分の前を走る者五十人を手に入れた。一彼の父は存命中、「あなたは どうしてこんなことをしたのか。」と言って、彼のことで心を痛めたことがなかった。そのうえ、彼は非常な美男子で、アブシャロムの次に生まれた子であった。彼はツェルヤの子ヨアブと祭司エブヤタルに相談をしたので、彼らはアドニヤを支持するようになった。”（1列 1：5-7）

ダビデの息子教育の仕方はアムノンのとき以来、少しも良くなってないとわかる。驚いたことに、大祭司のエブヤタルがダビデの意向を知っていながら、司令官ヨアブといっしょにアドニヤの側についた。古強者のヨアブはそのときまでは、王に対する陰謀から思慮深く距離を置いていたが、ここで彼は決定的な間違いを犯した。

ヨアブは自分の影響が、若いソロモンには届いていないことに気付いたかもしれない。少年は預言者ナタンと勉強したり、礼拝に出たりして毎日を送っていたのだろう。ソロモンが戦闘訓練の場に姿を見せることはめったになかった。そこでヨアブは、彼より兄のアドニヤの方が操りやすいと思ったに違いない。

⁸⁴ (87)アビシャグは、雅歌に出てくる、若いソロモンが恋した“シュラム（シェネム）の女”だと考える聖書注釈者もいる。一方、彼女はアドニヤ王子側の者で、わざと王から情報を遮断したのだと言う注釈者もいる。しかし公には、アビシャグはダビデの最後の妻で、モーセの律法によると息子たちは彼女とは結婚できなかった。

さらに彼は、ダビデの死が数週間後に迫っていると思い込んでいたので、次の王の軍隊で自分の立場を確立しようとした。軍の大部分が、アドニヤ側についた司令官ヨアブに従った。ただ、ケレテ人とペレテ人、そして残りの古参兵などだけがダビデへの忠誠を守った。

大祭司のエブヤタルは、サウルの祭司虐殺からただ一人生き残って、エフォドを持ってダビデのゲリラキャンプに逃げ込んだ本人だった。その後 40 年以上ダビデに仕えたというのに、ここで忠誠心を一転させたのは、司令官ヨアブの寝返りよりも驚くことだった。当時、大祭司には彼とザドクの 2 つの家系があったため、エブヤタルはおそらく、将来の王の宮廷で自分の息子たちに、より高い地位を確保するつもりだったのだろう。

アドニヤはアブシャロムの様式にならって、自分の即位式を手配した。祝いの場所はエルサレムに近いエンロゲルの井戸だった (88)⁸⁵。ソロモン以外の王の息子たちと、エルサレムの主な実力者が全部出席した。ただ、預言者ナタンと警護兵長のベナヤ、そして彼の外国人の部下たちは呼ばれなかった。

ダビデは長い間、情報から離されて伏せていた。もしナタンが、病床にバテ・シェバを送らなかつたら、アドニヤの即位式計画のことは何も知らないままだっただろう。王妃は王に、現在起きていることを話し、ソロモンの味方になってほしいと頼んだ。20 年連れ添った夫に頼み事をするというのに、10 代の少女がいる前だとは、彼女はどんな思いだっただろう。死にかけている夫に寄り添う役目が、どうして自分ではなく他の者にあるのかと、彼女は自問しただろうか。

ダビデにアドニヤの即位式のことを話した後、バテ・シェバは続けて言った。“王さま。王さまの跡を継いで、だれが王さまの王座に着くかを告げていただきたいと、今や、すべてのイスラエルの目はあなたの上に注がれています。そうでないと、王さまがご先祖たちとともに眠りにつかれるとき、私と私の子ソロモンは罪を犯した者とみなされるでしょう。” (1列 1:20-21) そのとき預言者ナタンが入ってきて、バテ・シェバの話が確かだと認めた。ここでダビデは、自分が老い衰えた男ではなく実力者であることを証明する。話を聞いて直ちに、彼はアドニヤの即位式に招かれなかった外国人衛兵の頭ベナヤと、大祭司の一人ツアドクを呼び出した。

ダビデは彼らに次のような計画を提案した。“あなたがたの主君の家来たちを連れ、私の子ソロモンを私の雌騾馬に乗せ、彼を連れてギホンへ下って行きなさい。祭司ツアドクと預言者ナタンは、そこで彼に油をそそいでイスラエルの王としなさい。そうして、角笛を吹き鳴らし、『ソロモン王。ばんざい。』と叫びなさい。それから、彼に従って上って来なさい。彼は来て、私の王座に

⁸⁵ (88) 当時、即位式は井戸の所で行われたようだ。

着き、彼が私に代わって王となる。私は彼をイスラエルのユダの君主に任命した。”（1列1：33
-35）

ダビデの計画は実に巧妙だった。戦いも流血もなく、単に別の即位式をするだけのことだった。イスラエルの人々が、二人の王子のどちらに忠誠を注ぐかが明らかになるだろう。

このことはただちに実行に移された。ギホンの泉で大祭司ツァドクが、天幕から持ってきた油でイスラエル王、19歳のソロモンに油注ぎをした。イスラエルの人々はそれを聞いて、地が揺れるほど興奮して喜んだと、聖書は記している。どちらの候補者が一般の人々に指示されているかは、疑問の余地がない。ソロモンは自分像を創り上げるために馬に乗って市内を巡るなどしなかったが、神を畏れる若者として知られていた。

アドニヤと招待客たちはどうしただろう？支援者たちはもうひとつの即位式のことを聞くと、びっくり仰天して自分の支持していた者を置き去りにして逃げてしまった。アドニヤも敗北を認めた。彼は弟をひどく恐れたので、聖所に走り込んで祭壇の角を握りしめた。モーセの律法によると、そこを逃げ場とした者はだれも殺されない。アドニヤはこのとき40歳だったが、結局は、半分の歳の若者の前へ連れて行かれた。ソロモンは単に彼の企みのことを注意しただけで、家へ帰るようにと言った。

政権交代

歴代誌によると、ダビデは最晩年には息子ソロモンと一緒に統治した。実際、彼は床を出て政権交代を確かにするまでに体力を回復した。その間、父と息子は数件の重要な変更について話し合った。たとえば、領土管理のためにふさわしい指導者を選んだ。ヨルダンの東側方面には特に気を配った。これら全てについては1歴代誌26：29-32に記録されている。

ダビデは大きな祝宴を開くのが好みのようなので、息子のために正当な即位式を準備できて、幸せだったにちがいない。これは彼の最後の大きな業績となった。指導者、高官、廷臣（宦官）そしてイスラエルの最強兵士のすべてが招かれた。このときソロモンは、何百もの焼き尽くす献げ物をする祭典のあいだ中、荘厳な儀式の聖務に就いていた

ダビデは祝宴のなかで、息子と人々に別れを告げた。彼は、若く経験のないソロモンを彼の王座の後継者に、また神殿を建てるようにと主が選ばれたことを話した。そして続けて息子に向かって言った。“今、主の集会、全イスラエルの前で、私たちの神が聞いてくださるこの所で、あなたがたは、あなたがたの神、主の命令をことごとく守り、求めなさい。それは、あなたがたがこの良い地を所有し、あなたがたの後、とこしえまでもあなたがたの子たちにゆずりとして与えるた

めである。わが子ソロモンよ。今あなたはあなたの父の神を知りなさい。全き心と喜ばしい心持ちをもって神に仕えなさい。主はすべての心を探り、すべての思いの向かうところを読み取られるからである。もし、あなたが神を求めるなら、神はあなたにご自分を現される。もし、あなたが神を離れるなら、神はあなたをとこしえまでも退けられる。”（1歴28：8-9）

しかし、ダビデの終生の最重要課題は神殿だった。“「今、心に留めなさい。主は聖所となる宮を建てさせるため、あなたを選ばれた。勇気を出して実行しなさい。」・・それから、ダビデはその子ソロモンに言った。「強く、雄々しく、事を成し遂げなさい。恐れてはならない。おののいてはならない。神である主、私の神が、あなたとともにおられるのだからー。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てず、主の宮の奉仕のすべての仕事を完成させてくださる。”（1歴28：10、20）ダビデは、大事業を進める際には、レビ人たちがそろってソロモンと協力して働くことを約束した。それから彼はソロモンに、神殿の設計図と必要な用具のリストをすべて渡した。

王権を譲るに際して、ダビデは自分の宝物蔵から多量の金銀を神殿基金のために寄贈した。国の、他の指導者たちが先例に倣うことを期待してのことだ。真の指導者は、自分の家より主の家を大切にするものだということを、老王が例を示したのだ。ダビデの例に従って、国中の指導者たちが基金のために170トンの金を寄贈した。このときイスラエルは、正に黄金時代にあった。与える喜びが、形となって現れたのだ。

ダビデには夢の実現を見ることが許されませんでした。代わりに、彼はモーセの運命と同じ経験をすることになりました。モーセは40年間、民を荒野で導きましたが、約束の地に入ることはありませんでした。しかし私たちの中でだれが、自分の課題を果たしたからといって、自慢できる者がいるでしょうか。死に際して「完了した」（ヨハ19：30）と言われた方がただお一人、おられるだけです。

ソロモンの即位式で捧げられたダビデの祈りは、旧約聖書の中で最も美しいものです。それは主の祈りや、いつか天国で歌われる賛美を思い起こさせます。まるで主の老いた僕が、天からその立琴に授けられた音楽のようです。

主よ。偉大さと力と栄えと栄光と尊厳とはあなたのものです。

天にあるもの地にあるものはみなそうです。

主よ。王国もあなたのものです。

あなたはすべてのものの上に、かしらとしてあがむべき方です。

富と誉れは御前から出ます。

あなたはすべてのものの支配者であられ、・・

今、私たちの神、私たちはあなたに感謝し、

あなたの栄えに満ちた御名をほめたたえます。
まことに、私は何者なのでしょう。私の民は何者なのでしょう。
このようにみずから進んでささげる力を保っていたとしても、
すべてはあなたから出たのであり、
私たちは、御手から出たものをあなたにささげたにすぎません。
(1 歴 29 : 11-14、参：黙 4 : 11、5 : 12-14)

主の老いた僕ダビデには、もうひとつの告白がありました。彼の先祖たちのように、この地上で自分のための永遠の祖国や神殿を手に入れることはありませんでしたが、その先のことを待ち望んでいました。“私たちは、すべての父祖たちのように、あなたの前では異国人であり、居留している者です。地上での私たちの日々は影のようなもので、望みもありません。”(1 歴 29 : 15) 霊的な戦いの中で、ダビデはこれ以上のものは得ませんでした。彼自身の目からは、最後まで自分は‘悩む者、貧しい者’のままだったのです(詩 35 : 10、40 : 17、70 : 6)。

ダビデの最後の言葉、そして死

祝宴が終わり、老いた王はまた病床に戻った。残りの時は急速に過ぎていった。父はもう一度息子ソロモンを呼んで、彼に最後の指示と任務を与えた。

彼はソロモンに、御言葉に聞いて従うことの重要さをもう一度強調した。“私は世のすべての人の行く道を行こうとしている。強く、男らしくありなさい。あなたの神、主の戒めを守り、モーセの律法に書かれているとおりに、主のおきてと、命令と、定めと、さとしとを守って主の道を歩まなければならない。あなたが何をしても、どこへ行っても、栄えるためである。そうすれば、主は私について語られた約束を果たしてください。すなわち『もし、あなたの息子たちが彼らの道を守り、心を尽くし、精神を尽くして、誠実をもってわたしの前を歩むなら、あなたには、イスラエルの王座から人が断たれない。』”(1 列 2 : 2-4)

死に近づいた王はもう一度、預言者ナタンを通して聞いた約束を口にしました。つまりダビデの子孫は永遠に主に仕える、ということです。彼は暗闇の底にいたとき、幾度となくこの言葉に立ち返って、慰めを得たのです。彼は死が近い時でさえ、この言葉にしがみつきました。私たちはどんな約束に、ダビデのようにしがみつくでしょう。“主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます”(使 16 : 31) の約束でしょうか。

最後が近づいたとき、人は実際の状態よりいいふりをする力が出ません。死んでいく人の最後の言葉は、その人の生涯の価値を表すものです。これは老いたダビデが 20 歳の息子に与えた、最後の言いつけの一つです。

“また、あなたはツェルヤの子ヨアブが私にしたこと、すなわち、彼がイスラエルのふたりの將軍、ネルの子アブネルとエテルの子アマサとにしたことを知っている。彼は彼らを虐殺し、平和な時に、戦いの血をつけたのだ。だから、あなたは自分の知恵に従って行動しなさい。彼のしらが頭を安らかによみに下らせてはならない。”（1列 2：5-6）

ダビデは家族の批判を恐れて、早いうちに甥を罰することができなかった。（なんといってもヨアブの母親は自分の姉なのだ。）今、彼はヨアブの殺人の罪を、若いソロモンに罰するように命じた。同時に、シムイを罰することも息子に頼んだ。シムイは彼がアブシャロムから逃げていたとき、ダビデを呪ったからだ。

ダビデはシムイに手を下すことができなかった。というのは、ヨルダン川から戻ったとき、罰を与えないと誓ったからだ。しかしながらこの誓いは、息子までが守るべきものではなかった。彼には今、シムイを正当に罰する責任がある。“彼のしらが頭を血に染めてよみに下らせる”（1列 2：9）‘血’が、ダビデが口にして、聖書に記録された最後の言葉だった。

老いた王は最後の 10 年間、この二人に対する苦い思いを胸に抱えていたということで、終わってしまうのでしょうか。ダビデは本当にそんな情けない男だったのでしょうか。彼は若いときは恨みから自分の心を守ることができたのに、老年になってからそれができなくなったのは、どうしてですか？これは年取っていくクリスチャンにとって、考えるべきことです。自制がはずれたとき、私たちの口から何が出てくるのでしょうか。憎しみの言葉でしょうか、愛の言葉でしょうか。

神様、ありがとうございます！ダビデの 32 代目の子は死の直前に十字架から「ピラトと大祭司たちが、彼らのしたことで罰せられますように！ローマ兵はみな絞首刑になれ！」とは言われませんでした。逆に、「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」（ルカ 23：34）と、ご自分を苦しめる者たちを、父なる方から庇われました。暴力と報復がうずまくこの世界にいて、イエス様のように怒りも憎しみもなく死んでいく人を見ると、本当にほっとします(88)⁸⁶。

⁸⁶ (88) ちなみに、イエスの死について話すのは、現在では子どもに有害だといわれるのはなぜだろう？彼らは、報道機関から多くの種類の暴力を日常的に見ている。子どもたちが愛に溢れ、憎しみがすっかり消えたこの死のことを聞くのは、けっして有害ではない。

ところで、シムイに関しての告発の理由として、報復のほかに何か考えられるでしょうか。老いた王は若干 20 歳の息子に王国を残そうとしていました。ですから、あるいは単に、今後あるだろうヨアブとシムイが起こす謀略のことを、彼は恐れたのかもしれませんが。もともと、ヨアブは二人を殺していて、ずっと以前に法廷に訴えられるべきだったのです。この殺人者の罪は、罪人の血で払い戻されるまでダビデの家に留まっています（1列 2：31-32）。この意味でダビデの言葉は、復讐心からの訴えというより律法の正当な要求というものだったと思われます。

また、ダビデは死の床にあっても自分の感情を抑えなかったことが分かります。彼は子どものころからそうしたように、今の感情を主と人々の前で声に出して言いました。彼は死ぬまで正直でした。私たちも、黙示録の聖なる殉教者たちが天の神殿に立って呼びかけていることに目を向けるべきではないでしょうか。彼らは叫んでいます「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさないのですか。」（黙 6：10）と。

聖書はダビデの死を“彼は長寿に恵まれ、齢も富も誉れも満ち満ちて死んだ”（1歴 29：28）と描いています。彼は詩篇 16 篇に告白しているように、甦りを信じて目を閉じました。ダビデのその言葉は、後に起こった彼の子の甦りに重なります。

まことに、あなたは、私のたましいを
よみに捨ておかず、
あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。
あなたは私に、いのちの道を
知らせてくださいます。
あなたの御前には喜びが満ち、
あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。
（詩 16：10-11、使 2：27-28）

ダビデはベツレヘムの家族の墓ではなく、エルサレムに新しく作られた、王のための埋葬地に葬られました。ペテロが説教で言ったように、ダビデの死から 1000 年後でさえ、だれもがその遺跡を知っています（使 2：29）。

ダビデは始めにユダを、そしてのちにはイスラエルの全 12 部族を 40 年間統治しました（1011-971BC）。彼の生涯のことは、彼が活着している間に目撃者たちによって記録されました。そのうちの一つの文書は予言者サムエルによって書かれ、一つは予言者ナタンに、あと一つは予言者ガド

によって書かれました（1歴 29：29－30）。それらの資料はサムエル記、列王記、歴代誌が書かれたときに用いられました（89）⁸⁷。

ダビデの 32 代目の子は、長寿と富と栄誉を享受した父祖ダビデのように死ぬことが許されませんでした。しかし 4 福音書に書かれた中には、イエス様の罪は一つも見あたりません。愛と真実だけです。

若き王ソロモン

若い王が父の意思を実行し始めたとき、彼には弟コンプレックスがないことがはっきりした。‘3 人組’一兄のアドニヤ、ヨアブ将軍、大祭司アビアタルは厳しい警告を受けて、もう一回生き延びるチャンスを与えられた。

その後、あるときアドニヤは父親の‘あなか’だったアビシャグに思いを寄せ、結婚したいと思った。ソロモンは愚かではなかった。彼はすぐに、兄はクーデターを起こそうとしていると見破って、彼に憐れみをかけることを止めた(90)⁸⁸。アドニヤは生きるチャンスをもらったのに、それを失った。ソロモンがアドニヤを殺す命令を出したとき、ヨアブは自分も反逆罪で法廷に引き出されると悟った。

そこで老大将は聖所に走り込み、祭壇の角を握った。“ヨアブが主の天幕に逃げて、今、祭壇のかたわらにいる、とソロモン王に知らされた”（1列 2：29）ソロモンはケレテ人とペレテ人の司令官ベナヤを呼び寄せて、聖所であろうがヨアブの首をはねるよう命じた。祭壇の角は、二人を殺した罪と大反逆罪から守るものではなかったのだ（出 21：14）。

ヨアブは最後の瞬間、神の前で罪を告白しただろうか。そうであってほしい！権力欲は、彼の人生における最大の問題だった。彼が角にしがみついていたとき、彼にはまだ主のもとに罪を持って行く時間があったのだ。しかし、ヨアブがそうしたかどうかは分からない。ただ、彼は同僚の指揮官によって聖所の庭で処刑され、荒れ野の近くにある自分の町に葬られたことだけが分かっている（1列 2：34）。

⁸⁷ (89) 1 サムエル記 1－16 章はサムエル自身によるものと見られる。ところが 1 サムエル記 17 章から 2 サムエル記 6 章までと 21－24 章はガドによる。ナタン⁹⁰の報告は、他の部分－2 サムエル記 7－20 と 2 列王記 1－2 章－の基であるようだ。

⁸⁸ (90) 当時、前支配者が残した妻やそばめを自分のものにするのは、次の支配者であると顕示する意味があった。

ダビデをひどく呪ったシムイも、哀れな末路だった。始め、ソロモンは監視するためシムイをエルサレムの町に監禁した。新しい王は若すぎて経験不足だと思った彼が、極秘にどんなクーデターを企てるか、だれがわかっていただろう。2年後シムイは監禁を破って、二人の逃亡奴隷を連れ戻すため、ガテまで出かけた。おそらく、奴隷たちは主人以外の者に引き渡されることはないの
で、シムイが出て行かなければならなかったからだ。でなければ、奴隷を失うことになる。貪欲がシムイをエルサレムから引っぱり出した。ソロモンはこれを聞いて、先に言ったとおりシムイに死刑を宣告した。

アドニヤの陰謀を支持してから大祭司に起こったことは・・・エブヤタルは命を亡くさなかったが、祭司の権利を失った。ソロモンは彼に、エルサレムの北にある小さな町、彼の故郷アナトテに住むことを命じた。エブヤタルの子孫はサムエル記が

書かれているときには、食べていくために幕屋の半端仕事をさせてもらうほど落ちぶれてしまった（1サム2：36）。しかし、ときに息子が父親より優れていることがある。預言者エレミヤはエブヤタルの直系の子孫かもしれないのだ（エレ1：1）。

ヨアブが死に、エブヤタルがいなくなると、ベナヤとツァドクが彼らの部署を引き継いだ。ソロモンは自分の王権を堅くし、その後は神殿事業に力を注ぐことができた。

新約聖書の中のダビデ

聖書の残りの部分には、この本の中で筆者があれこれ言っているように、バテ・シェバのことでダビデの過ちについて書かれていません。サムエル記はダビデの罪の結果を、事実によって冷静に記述しています。列王記は彼の罪については1回、言及していますが、歴代誌には載っていません。サムエル記から後では、聖書はダビデを単に神を誉め讃えた人として回想しています。彼は正しい王の模範で、後の王たちはみんな彼と比べられています。このことから、主がいったん罪を赦されたなら、その罪を忘れて遠くへ、海の深みにまで追いやってしまわれることが、私たちにわかるのです。

旧約聖書の預言者たちは、ダビデの子、メシヤである王、よき羊飼いがイスラエルに出てくるということを、変わることなく言い続けました。“わたしは、彼らを牧するひとりの牧者、わたしのしもべダビデを起こす。彼は彼らを養い、彼らの牧者となる。主であるわたしが彼らの神となり、わたしのしもべダビデはあなたがたの間で君主となる。主であるわたしがこう告げる。”（エゼ34：23－24）

ついにその日が来ました。神がナザレの少女のもとに、天使ガブリエルを遣わされたのです。天使は彼女にすばらしい知らせを告げました。彼女は、待ち望まれたダビデと神の子孫の母として選ばれたのです。“その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。”（ルカ 1：32-33）

イエス様の時代に、彼の高貴な先祖のことを知っていると思われる人は、わずかでした。ある人は「まさか、キリストはガリラヤからは出ないだろう。キリストはダビデの子孫から、またダビデがいたベツレヘムの村から出る、と聖書が言っているではないか」（ヨハ 7：41-42）と言いました。イエス様の公的宣教の3年の間では、カナンの子と盲人のバルテマイだけがイエス様をダビデの子と呼びました。

しかし、王がロバに乗ってご自分の都に入り、みんなが「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。祝福あれ。いま来た、われらの父ダビデの国に。ホサナ。いと高き所に。」（マル 11：9-10）と叫んで歓迎する、すばらしい日が来ました。

これは多くの教会で‘枝の主日’や待降節だけでなく、年間を通して聖餐式で歌われるホサナです。歌うごとに、イエス様が来られる素晴らしい日が近づいてきます。再臨の日、ダビデの子は黄金の冠をかぶり、私たちに永遠の御国に連れて行ってくださいます。

ローマ人への手紙でパウロは、ダビデが過ちの後に書いた詩篇 32 篇を引用しています。この詩句の中に、ダビデの信仰の核心が見られます。“ダビデもまた、行ないとは別の道で神によって義と認められる人の幸いを、こう言っています。「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。主が罪を認めない人は幸いである。」”（ロマ 4：6-8、詩 32：1-2）そうです。ダビデは行いではなく、信仰ゆえに義とされました。これは、彼の生涯を考えると、ほかのどんなことよりも覚えてほしいと、聖書が私たちに望んでいることです。

ヨハネの黙示録にも‘ダビデ’の名前が3回出てきます。そしてそのたびに、イエス様に言及します。天の長老のひとりが弟子ヨハネに言います。「泣いてはいけません。見なさい。ユダ族から出たしし、ダビデの根が勝利を得た」（黙 5：5）。みなさん、この言葉に注目してください。勝利の日はまだありません。その日が来れば、戦いは終わります。イエス様が最後の勝利を収められたからです。私たちは涙の最後の滴を払い、地を踏み鳴らした兵士の靴と血にまみれた軍服はことごとく火に投げ込まれ、焼き尽くされます(イザヤ 9：5)。

いつくしみと恵み

ダビデの生涯のこの物語を終える前に、ダビデの伝記から出てくるもう一つの重要な疑問について、考える必要があります。つまり、彼が若いときに信じたように、神のいつくしみと恵みは本当に人生の日々、彼を追っていったのでしょうか。このことについては、ダビデが死と向き合ったとき、バテ・シェバに言った言葉が答えです。“私のいのちをあらゆる苦難から救い出してくださった主は生きておられる”（1列 1：29）これは老いた王が死を目前にして、自分の人生を振り返ったものです。

このヘブル語の‘苦難’という言葉は多くの意味をもっています。苦悶、敵対、逆境、不安、心配、苦痛。どんな苦難、苦痛も、主がいいものに変えてくださらなかったものはない、というのは本当ですか？子どものころの悲しみ—野獣との戦いや兄たちからのいじめ—は、ダビデに祈ること、詩を書くこと、主の助けを信じることを教えました。

若いときにサウルから逃れて 10 年間、荒れ野で逃亡生活をしたことはただの苦難だったのでしょうか？違います。それは彼に、群れを導くことを、またいわれなく迫害されるときに主に立ち返ることを、そして自分の力に頼らないことを教えました。最高の友を亡くした事は苦難だけだったのでしょうか？違います。ヨナタンは死んでもダビデの最も親密な友のままだったからです。

彼がバテ・シェバと犯した姦淫の罪のことはどうだったのでしょうか？ダビデはそれからも‘救い出された’のでしょうか？そうです。彼は罪を赦されて、神の恵みをほかの罪人たちに伝えることを、そのとき学んだのです。

バテ・シェバは、神が次の王の、そして救い主の先祖の母として彼女を選ばれたことで報われました。ウリヤも、彼の名前がイエス様の系譜に挙げられたことで、報いを受けました（マタ 1：6）。

もう一つ、悲劇がいいものに変えられたことを考えましょう：神はダビデが書いた詩篇を、私たちの、そして御子の助けのために必要とされました。

ダビデの‘弟コンプレックス’はどうなったのでしょうか？死んだ子どもたちは？彼はそれらの‘苦難’からも‘救い出された’と考えていいのでしょうか？そうです。これらの悲劇がなければ、自分の生涯の任務を果たすことができなかったのだと、ダビデは死の床の中で分かりました。

子どもたちに関しては—ダビデは再び天国で会えることを願いながら、彼らを主の御手の中に残しました。そうです、本当でした。いつくしみと恵みとは、困難な生涯を通してダビデを追ってきました。主はずっと彼と共におられたからです。たしかに神は、ダビデが忠実でなかったときでさえ、彼に忠実のままでおられました。

読者のみなさん、あなた方はどうでしょう。死の床で、ダビデと同じ目で過ぎ去ったときを見られるようにと願うでしょう？そうすれば、人生の大きなマイナスは大きなプラスに変わります。

付記

この本に登場する聖書の人物を五十音順に紹介します。

アキシユ：ガテの貴族の世襲の名前と思われる。この名前の王は、ダビデの逃亡生活の前にも後にも出てくる。

アサエル：ダビデの姉ツェルヤの3男、ヨアブとアビシャイの弟。サウルとその息子の司令官アブネルが、戦場で彼を殺した。

アドニヤ：ダビデの4男、ヘブロンで生まれた。父親が生きているときから王位を狙っていた。ソロモンが死刑にした。

アビガイル：ダビデの3番目の妻。

アビガル：ダビデの異父姉、ツェルヤの姉妹。アマサの母。(参：1歴2：13-17、27：18)

アビシャイ：ダビデの姉ツェルヤの次男。ヨアブとアサエルの兄弟。

アビシャグ：ダビデの死の床で、ダビデの‘あんか’となった10代の娘。

アヒトフェル：ダビデの友で相談相手。イスラエルで一番の賢人。もしかしたらバテ・シェバの祖父。ダビデを裏切ってアブシャロムに与した。

アビナダブ：ダビデの2番目の兄。

アヒマアツ：祭司ツァドクの息子。アブシャロムの反乱の間、諜報活動をした。

アヒメレク/アヒヤ：ノブの大祭司、サウルが彼の家族全員を殺した。エリの子孫。

アマサ：ダビデの姉アビガイルの息子。アブシャロムが、のちにダビデも軍の司令官に任命した。従兄弟ヨアブが彼を殺した。

アブシャロム：ダビデの3男。母は異邦人の王女マアカ。妹の強姦者、兄のアムノンを殺して逃げていき、エルサレムに戻って父に対する謀反を起こした。父ダビデとの戦いの後、ヨアブの手によって命を落とした。

アブネル：サウルと、後にその息子イシュボシェテの司令官。サウルの従兄弟でもある。ヨアブが彼を殺した。

アムノン：ダビデの長男。父親が30歳のころにヘブロンで生まれた。異母妹のタマルを強姦して、後に弟のアブシャロムが彼を殺した。

イシュボシェテ：サウルの息子。父の死後、一人だけ生き残った。戦争には参加しなかった。2年～7年の間、イスラエルの10部族の王だった。歴代誌ではエシュバアルともいわれている。
(1歴8：33)

イタイ：ガテ出身のペレテ人将校。600人の兵士を連れてダビデの同盟となった。

ウリヤ：ダビデの高官。バテ・シェバの最初の夫。ダビデが殺した。

エブヤタル：大祭司、アヒメレクの息子。エリの子孫。家族を虐殺されたあとすぐ、ダビデの元へ行って50年近く彼に仕えた。彼の息子はヨナタンといった。アドニヤに与し、ソロモンは彼をアナトテに監禁した。

ガド：ダビデに仕えた最初の預言者。ダビデのゲリラ時代に加わった。

キレア：ダビデの次男。名前の他に何も記述がない。若くして死んだのかもしれない。歴代誌にはダニエルとして記載されている。

シェバ：ベニヤミン人。イスラエルの10部族を説いて、ダビデに対する最後の反乱を煽った。

シムア：サウルの身内。ダビデがアブシャロムから逃げていたとき、彼に石を投げ付けて呪いを浴びせた。

シメア：ダビデの3番目の兄。彼の二人の息子が聖書に載っている。ヨナダブはアブシャロムを悪い道に誘い込んだ。あと一人の息子ヨナタンはダビデ軍の勇者。

シャマ/シメア：ダビデの息子。バテ・シェバの最初の子ども。赤ん坊のときに死んだ。

タマル：①ダビデの娘。異母兄のアムノンに強姦された。②アブシャロムの娘。

ツアドク：ダビデ時代の大祭司の一人。アロンの息子エリアザルの子孫。ソロモンのときに、もうひとりの祭司エブヤタルを追い越した。

ツイバ：サウルの召使い。彼は主人亡きあと、その領地の管理をして、アブシャロムの反乱のあいだはダビデの側に就いた。ヨナタンの息子メフィボシェテの評判を落とした。

ツェルヤ：ダビデの姉、彼よりかなりの年上だった。二人の母は同じだが、父親が違っていた。ツェルヤの息子がヨアブ、アビシャイ、アサエルで、彼らは母の名前で「ツェルヤの息子たち」と呼ばれた。三人はダビデと同じぐらいの年齢だった。

ナタン：①ダビデの預言者。②ダビデとバテ・シェバの息子。一般にマリアの先祖と言われている。

ナハシュ：アモン人の王、ダビデの友。役立たずのハナンの父。

ハナン：アモン人の王。ダビデの使者を侮辱した。ハナンの父ナハシュはダビデの盟友だった。

バルジライ：年取った、裕福な領主で、ダビデがエルサレムから逃亡していたあいだ、彼とその一団を養った。

フシャイ：忠誠を貫いた‘王の友’。アブシャロムの宮廷に潜入していた。

ベナヤ：ダビデの勇士の一人。晩年、ケレテ人、ペレテ人の外国人部隊の司令官に任命された。ソロモンにも仕えた。

エリアブ：ダビデの長兄。後にはユダ部族を率いた。

マアカ：①ダビデの4番目の妻。ゲシュルの異邦人の王女で、アブシャロムとタマルの母。②アブシャロムの娘。おそらくタマルという名前でも呼ばれた。ユダの王レホボアムの妻で、その次の王アビヤの母。

マキル：まぎれもないよきサマリア人。ヨルダンの向こう側に住んだ。ヨナタンの足の悪い息子メフィボシェテを保護した。後には、アブシャロムから逃れたダビデと、彼の大勢の一団とを養った。

ミカル：サウルの娘、ダビデの初恋の妻。サウルはミカルを強いてパルティエルと結婚させた。ダビデは王になったときに、彼女が戻ってくることを要求した。

メフィボシェテ：ヨナタンの息子。わずか5歳のときに父親が死んだ。彼は足を怪我した。12歳のとき、叔父のイシュボシェテがイスラエルの王位を失い、ダビデはメフィボシェテを捜し当てて、家族の一員として彼を養子にした。

ヨアブ：ダビデの姉ツェルヤの長男。アビシャイとアサエルの兄。エルサレム征服以来のダビデ軍の司令官。

ヨナダブ：ダビデの兄シムイの息子。アブシャロムの悪友。宮廷に住んでいた。

ヨナタン：①サウルの息子、ダビデの親友 ②祭司エブヤタルの息子③ダビデの甥で、戦いの勇士

あとがき introduction to internet

ダビデの生涯の本について

ダビデはイスラエルの王として知られています。勇敢な兵士、感情豊かな詩人、熱烈な祈りの人であり、またきわだった音楽家でもあります。イエス様の前にあらわれた聖書の英雄です。このダビデの中で一番にあげられる才能は、音楽家、建築家、行政家です。加えて、美男子で信仰深く、彼に匹敵する人を探すのは難しい。しかしダビデは同時に恐ろしい罪を犯したことで知られていません。彼はどのようにして、神への信仰と奉仕に立ち返ったのでしょうか？

この胸躍るダビデの生涯の伝記は、彼の少年時代から名高い王として死ぬまでを物語っています。ここでのどうしても必要な主題は、その 1000 年後に生きた、もう一人の羊飼いである王—ダビデの子・イエス様のひな型としてのダビデです。聖書の歴史を学ぶ学生たちは、魅惑的で想像をかき立ててくれるこの本が好きです。一方、自分の弱点に打ち勝とうと努力しているクリスチャンの親たちは、慰めと激励を見いだすでしょう。

著者紹介

マイリス・ヤナツイネン（1949 年生れ）フィンランド人の神学者、宣教師、作家。日本とフィンランドで聖書教師として知られている。聖書の人物についての著書があり、「よき知らせの学び」という聖書学習法を編み出した。学習法は 30 カ国以上の言葉に訳されている。